569-167
1200502071867

日本探偵小説全集

5

谷崎潤一郎集

改造社

著者

569
167

國立國會圖書館藏書

I 種
W

1200502071867

目次

祕密……三
柳湯の事件……二三
或る少年の怯れ……四九
人面疽……一四九
金と銀……一八一
呪はれたる戯曲……三〇五
ハッサン・カンの妖術……三七七
途上……四三九
青塚氏の話……四七一

――了――

祕

密

其の頃私は或る氣紛れな考から今迄自分の身のまはりを裹んで居た賑かな雰圍氣を遠ざかつて、いろ〳〵の關係で交際を續けて居た男や女の圈内から、ひそかに逃れ出ようと思ひ、方々と適當な隱れ家を搜し求めた揚句、淺草の松葉町邊に眞言宗の寺のあるのを見付けて、やうやう其處の庫裡の一と間を借り受けることになつた。

新堀の溝へついて、菊屋橋から門跡の裏手を眞直ぐに行つたところ、十二階の下の方の、うるさく入り組んだ Obscene な町の中に其の寺はあつた。ごみ溜めの箱を覆した如く、彼の邊一帶にひろがつて居る貧民窟の片側に、黃橙色の土塀の壁が長く續いて、如何にも落ち着いた、重々しい寂しい感じを與へる構へであつた。

私は最初から、澁谷だの大久保だのと云ふ郊外へ隱遁するよりも、却つて市内の何處かに人の心付かない、不思議なさびれた所があるであらうと思つてゐた。丁度瀨の早い溪川のところどころに、澱んだ淵が出來るやうに、下町の雜沓する巷と巷との間に狹まりながら、極めて特殊の場合か、特殊の人でなければめつたに通行しないやうな閑靜な一廓が、なければなるまいと思つて

ゐた。

同時に又こんな事も考へて見た。——

己は隨分旅行好きで、京都仙臺はおろか、北海道から九州までも歩いて來た。けれども未だ此の東京の町の中に、人形町で生れて二十年來永住してゐる東京の町の中に、一度も足を踏み入れた事のないと云ふ通りが、屹度あるに違ひない。いや、思つたより澤山あるに違ひない。

さうして大都會の下町に、蜂の巢の如く交錯してゐる大小無數の街路のうち、私が通つた事のある所と、ない所では、孰方が多いかちよいと判らなくなつて來た。

何でも十一二歳の頃であつたらう。父と一緒に深川の八幡樣へ行つた時、

「これから渡しを渡つて、冬木の米市で名代のそばを御馳走してやるから。」

かう云つて、父は私を境内の社殿の後ろの方へ連れて行つた事がある。其處には小網町や小舟町邊の堀割と全く趣の違つた、幅の狹い、岸の低い、水の一杯にふくれ上つてゐる川が、細かく建て込んでゐる兩岸の家々の、軒と軒とを押し分けるやうに、どんよりと物憂く流れて居た。小さな渡し船は、川幅よりも長さうな荷足りや傳馬が、幾艘も縱に列んでゐる間を縫ひながら、二た竿三竿ばかりちよろちよろと水底を突いて往復して居た。

私は其の時まで、度々八幡様へお參りをしたが、未だ嘗て境内の裏手がどんなになつてゐるか考へて見たことはなかつた。いつも正面の鳥居の方から社殿を拜むだけで、恐らくパノラマの繪のやうに、表ばかりで裏のない、行き止りの景色のやうに自然と考へてゐたのであらう。現在眼の前にこんな川や渡し場が見えて、其の先に廣い地面が果てしもなく續いてゐる謎のやうな光景を見ると、何となく京都や大阪よりももつと東京をかけ離れた、夢の中で屢々出逢ふことのある世界の如く思はれた。

それから私は、淺草の觀音堂の眞うしろにはどんな町があつたか想像して見たが、仲店の通りから宏大な朱塗のお堂の甍を望んだ時の有樣ばかりが明瞭に描かれ、其の外の點はとんと頭に浮ばなかつた。だん〳〵大人になつて、世間が廣くなるに隨ひ、知人の家を訪ねたり、花見遊山に出かけたり、隨分東京市中は隈なく歩いたやうであるが、いまだに子供の時分經驗したやうな不思議な別世界へ、パタリと行き逢ふことが度々あつた。

さう云ふ別世界こそ、身を匿すには究竟であらうと思つて、此處彼處といろ〳〵に搜し求めて見れば見る程、今迄通つたことのない區域が到る處に發見された。淺草橋と和泉橋は幾度も渡つて置きながら、其の間にある左衞門橋を渡つたことがない。二長町の市村座へ行くのは、いつも

電車通りからそばやの角を右へ曲つたが、あの芝居の前を眞直ぐに、柳盛座の方へ出る二三町ばかりの地面は、一度も踏んだ覺えはなかつた。昔の永代橋の右岸の袂から、左の方の河岸はどんな工合になつて居たか、どうも好く判らなかつた。其の外八丁堀、越前堀、三味線堀、山谷堀の界隈には、まだ〳〵知らない所が澤山あるらしかつた。

松葉町のお寺の近傍は、其のうちで一番奇妙な町であつた。六區と吉原を鼻先に控へて、ちよいと横丁を一つ曲つた所に、淋しい、廢れたやうな區域を作つてゐるのが非常に私の氣に入つて了つた。今迄自分の無二の親友であつた派手な賑澤なさうして平凡な「東京」と云ふ奴を、置いてきぼりにして、靜かに其の騷擾を傍觀しながら、こつそり身を隱して居られるのが、愉快でならなかつた。

隱遁をした目的は、別段勉强をする爲めではない。其の頃私の神經は、刄の擦り切れたやすりのやうに、鋭敏な角々がすつかり鈍つて、餘程色彩の濃い、あくどい物に出逢はなければ、何の感興も湧かなかつた。微細な感受性の働きを要求する第一流の藝術だとか、第一流の料理だとかを翫味するのが、不可能になつてゐた。下町の粹と云はれる茶屋の板前に感心して見たり、仁左衞門や雁治郎の技巧を賞美したり、凡べて在り來りの都會の歡樂を受け入れるには、あまり心が

荒んでゐた。惰力の爲めに面白くもない懶惰な生活を、毎日々々繰り返して居るのが、堪へられなくなつて、全然舊套を擺脱した、物好きな、アーティフィシャルな made of life を見出して見たかつたのである。

普通の刺戟に馴れて了つた神經を顫ひ戰かすやうな、何か不思議な、奇怪な事はないであらうか、現實をかけ離れた野蠻な荒唐な夢幻的な空氣の中に、棲息することは出來ないであらうか。

かう思つて、私の魂は遠くバビロンやアッシリアの古代の傳說の世界にさ迷つたり、コナン・ドイルや涙香の探偵小說を想像したり、光線の熾烈な熱帶地方の焦土と綠野を戀ひ慕つたり、腕白な少年時代のエクセントリックな惡戲に憧れたりした。

眼かな世間から不意に韜晦して、行動を唯徒らに祕密にして見るだけでも、すでに一種のミステリアスな、ロマンチックな色彩を自分の生活に賦與することが出來ると思つた。私は祕密と云ふ物の面白さを、子供の時分からしみ〴〵と味はつて居た。かくれんぼ、寶さがし、お茶坊主のやうな遊戲——殊に其れが闇の晩、うす暗い物置小屋や、觀音開きの前などで行はれる時の面白味は、主として其の間に、「祕密」と云ふ不思議な氣分が、潛んで居るせゐであつたに違ひない。

私はもう一度、幼年時代の隱れん坊のやうな氣持を經驗して見たさに、わざと人の氣の付かな

い。下町の曖昧なところに身を隱したのであつた。其のお寺の宗旨が「祕密」とか、「禁厭」とか、「呪詛」とか云ふものに緣の深い眞言であることも、私の好奇心を誘うて、妄想を育ませるには恰好であつた。部屋は新しく建て增した庫裡の一部で、南を向いた八疊敷の、日に燒けて少し茶色がかつてゐる疊が、却つて見た眼には安らかな、暖い感じを與へた。晝過ぎになると和やかな秋の日が、幻燈の如くあか〴〵と緣側の障子に燃えて、室內は大きな雪洞のやうに明るかつた。

それから私は、今迄親しんで居た哲學や藝術に關する書類を一切戸棚へ片附けて了つて、魔術だの、催眠術だの、探偵小說だの、化學だの、解剖學だのゝ奇怪な說話と挿繪に富んでゐる書物を、さながら土用干の如く部屋中へ置き散らして、寢ころびながら、手あたり次第に繰りひろげては耽讀した。其の中には、コナン・ドイルの The Sign of Four. や、ド・キンシイの Murder as one of the Fine Arts. や、アラビアン・ナイトのやうなお伽噺から、佛蘭西の不思議な Sexuology の本なども交つてゐた。

此處の住職が祕藏してゐた地獄極樂の圖を始め、須彌山圖だの涅槃像だの、いろ〳〵の古い佛畫を强ひて懇望して、丁度學校の教員室にかゝつてゐる地圖のやうに所嫌はず部屋の四壁へぶら

下げて見た。床の間の香爐からは、始終紫色の香の煙が眞直ぐに靜かに立ち昇つて、明るい暖い室内を焚きしめて居た。私は時々菊屋橋際の舗へ行つて、白檀や沈香を買つて來ては、其れを燻べた。

天氣の好い日、きら〳〵とした眞晝の光線が一杯に障子へあたる時の室内は、眼の醒めるやうな壯觀を呈した。絢爛な色彩の古畫の諸佛、羅漢、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、象、獅子、麒麟などが四壁の紙幅の内から、ゆたかな光の中に泳ぎ出す、疊の上に投げ出された無數の書物からは、慘殺、痲醉、麻藥、妖女、宗教――種々雜多の傀儡が、香の煙に溶け込んで、朦々と立ち罩める中に、二疊ばかりの緋の毛氈を敷き、どんよりとした蠻人のやうな瞳を据ゑて、寢ころんだ儘、私は毎日毎日幻覺を胸に描いた。

夜の九時頃、寺の者が大概寢靜つて了ふと、ウヰスキーの角壜を呷つて醉を買つた後、勝手に緣側の雨戸を引き外し、墓地の生垣を乘り越えて散歩に出かけた。成る可く人目にかゝらぬやうに、毎晩服裝を取り換へて、公園の雜沓の中を潛つて歩いたり、古道具屋や古本屋の店先を漁り廻つたりした。頰冠りに唐綫の半纏を引掛け綺麗に研いた素足へ爪紅をさして雪駄を穿くこともあつた。金緣の色眼鏡に二重廻しの襟を立てゝ出ることもあつた。着け髯、ほくろ、痣と、いろ

いろに面體を換へるのを面白がつたが、或る晩、三味線堀の古着屋で、藍地色に大小あられの小紋を白く散らした女物の袷が眼に付いてから、急にそれが着て見たくて溜らなくなつた。

一體私は衣服反物に對して、單に色合が好いとか、柄が粹だとかいふ以外に、もつと深く鋭い愛着心を持つて居た。女物に限らず、凡べて美しい絹物を見たり、觸れたりする時は、何となく顫へ付きたくなつて、丁度戀人の肌の色を眺めるやうな快感の高潮に達することが屢々であつた。殊に私の大好きなお召や縮緬を、世間憚らず、恣に着飾ることの出來る女の境遇を、嫉ましく思ふことさへあつた。

あの古着屋の店に、だらりと生々しく下つてゐる小紋縮緬の袷――あのしつとりとした、重い冷めたい布が、粘つくやうに肉體を包む時の心好さを思ふと、私は思はず戰慄した。彼の着物を着て、女の姿で往來を歩いて見たい。……かう思つて、私は一も二もなく其れを買ふ氣になり、ついでに友禪の長襦袢や、黑縮緬の羽織迄も取りそろへた。

大柄の女が着たものと見えて、小男の私には寸法も打つてつけであつた。夜が更けて、がらんとして寺中がひッそりした時分、私はひそかに鏡臺に向つて化粧を始めた、黃色い生地の鼻柱へ、先づペットリと煉りおしろいをなすりつけた瞬間の容貌は、少しグロテスクに見えたが、濃

い白い粘液を平手で顔中へ萬遍なく押し擴げると、思つたよりものが好く、甘い匂のひやひやとした露が、毛孔へ沁み入る皮膚のよろこびは、格別であつた。紅やとのこを塗るに隨つて、石膏の如く唯徒らに眞白であつた私の顔が、潑剌とした生色ある女の相に變つて行く面白さ。文士や畫家の藝術よりも、俳優や藝者や一般の女が、日常自分の體の肉を材料として試みてゐる化粧の技巧の方が、遙に興味の多いことを知つた。

長襦袢、半襟、腰卷、それからチュッチュッと鳴る紅絹裏の袂——私の肉體は、凡べて普通の女の皮膚が味はふと同等の觸感を與へられ、襟足から手頸までも白く塗つて、銀杏返しの鬘の上にお高祖頭巾を冠り、思ひ切つて往來の夜道へ紛れ込んで見た。

雨曇りのしたうす暗い晩であつた。千束町、淸住町、龍泉寺町——あの邊一帶の溝の多い、淋しい街を暫くさまよつて見たが、交番の巡査も、通行人も、一向氣がつかないやうであつた。甘い皮を一枚張つたやうにばさ〳〵乾いてゐる顔の上を、夜風が冷かに撫でて行く。口邊を覆うて居る頭巾の布が、息の爲めに熱く濕つて、歩く度に長い縮緬の腰卷の裾は、ぢやれるやうに脚へ纏れる。みぞおちから肋骨の邊を堅く緊め着けてゐる厚板の丸帶と、骨盤の上を括つてゐる扱帶の加減で、私の體の血管には、自然と女のやうな血が流れ始め、男らしい氣分や姿勢はだん〳〵と

失つて行くやうであつた。

友禪の袖の蔭から、お白粉を塗つた手をつき出して見ると、强い頑丈な線が闇の中に消えて、白くふつくらと柔かに浮き出て居る。私は自分で自分の手の美しさに惚れ惚れとした。此のやうな美しい手を、實際に持つてゐる女と云ふ者が、羨しく感じられた。芝居の辨天小僧のやうに、かう云ふ姿をして、さま〴〵の罪を犯したならば、どんなに面白いであらう。……探偵小說や、犯罪小說の讀者を始終喜ばせる「祕密」「疑惑」の氣分に髣髴とした心持で、私は次第に人通りの多い、公園の六區の方へ歩みを運んだ。さうして、殺人とか、强盜とか、何か非常な殘忍な惡事を働いた人間のやうに、自分を思ひ込むことが出來た。

十二階の前から、池の汀について、オペラ館の四つ角へ出ると、イルミネーションとアーク燈の光が厚化粧をした私の顔にきら〳〵と照つて、着物の色合や縞目がはつきりと讀める、常磐座の前へ來た時、衝き當りの寫眞屋の玄關の大鏡へ、ぞろ〳〵雜沓する群衆の中に交つて、立派に女と化け終せた私の姿が映つて居た。

こッてり塗り付けたお白粉の下に「男」と言ふ祕密が悉く隱されて、眼つきも口つきも女のやうに動き、女のやうに笑はうとする。甘いへんなうの匂と、囁くやうな衣摺れの音を立てゝ、

私の前後を擦れ違ふ幾人の女の群も、皆私を同類と認めて怪しまない。さうして其の女達の中には、私の優雅な顔の作りと、古風な衣裝の好みとを、羨しさうに見てゐる者もある。

いつも見馴れて居る公園の夜の騷擾も「祕密」を持つて居る私の眼には、凡べてが新しかつた。何處へ行つても、何を見ても、始めて接する物のやうに、珍しく、奇妙であつた。人間の瞳を欺き、電燈の光を欺いて濃艶な脂粉とちりめんの衣裝の下に自分を潜ませながら、「祕密」の帷を一枚隔てゝ眺める爲めに、恐らく平凡な現實が、夢のやうな不思議な彩色を施されるのであらう。

それから私は毎晩のやうに此の假裝をつゞけて、時とすると、宮戸座の立ち見や活動寫眞の見物の間へ、平氣で割つて入るやうになつた。寺へ歸るのは十二時近くであつたが、座敷に上ると早速空氣ランプをつけて、疲れた體の衣裝も解かず、毛氈の上へぐつたり嫌らしく寢崩れた儘、殘り惜しさうに絢爛な着物の色を眺めたり袖口をちやらちやら振つて見たりした。剝げかゝつたお白粉が肌理の粗いたるんだ頰の皮へ滲み着いて居るのを、鏡に映して凝視して居ると、廢頽した快感が古い葡萄酒の醉のやうに魂をそゝつた。地獄極樂の圖を背景にして、けば〳〵しい長襦袢のまゝ、遊女の如くなよ〳〵と蒲團の上へ腹這つて、例の奇怪な書物のページを夜更くる迄

飜すこともあつた。次第に扮裝も巧くなり、大膽にもなつて、物好きな聯想を釀させる爲めに、七首だの麻醉藥だのを、帶の間へ挿んでは外出した。犯罪を行はずに、犯罪に附隨して居る美しいロマンチックの匂だけを、十分に嗅いで見たかつたのである。

さうして一週間ばかり過ぎた或る晩の事、私は圖らずも不思議な因緣から、もッと奇怪な、もッと物好きな、さうしてもッと神祕な事件の端緒に出會した。

其の晩私は、いつもよりも多量にウヰスキーを貪つて、三友館の二階の貴賓席に上り込んで居た。何でももう十時近くであつたらう、恐ろしく混んでゐる場内は、霧のやうな濁つた空氣に充たされて、黑く、もく〳〵とかたまつて蠢動してゐる群衆の生溫かい人いきれが、顏のお白粉を腐らせるやうに漂つて居た。闇中にシヤキシヤキ軌みながら眼まぐるしく開展して行く映畫の光線の、グリ〳〵と瞳を刺す度毎に、私の醉つた頭は破れるやうに痛んだ。時々映畫が消えて、パッと電燈がつくと溪底から沸き上る雲のやうに、階下の群衆の頭の上を浮動して居る煙草の烟の間を透かして、私は眼深いお高祖頭巾の蔭から、場内に溢れて居る人々の顏を見廻した。さうして私の舊式な頭巾の姿を珍しさうに窺つて居る男や、粹な着附けの色合を物欲しさうに盜み視てゐる女の多いのを、心ひそかに得意として居た。見物の女のうちで、いでたちの異樣な點から、

様子の婀娜つぽい點から、乃至器量の點からも、私ほど人の眼に着いた物はないらしかつた。

初めは誰も居なかつた筈の貴賓席の私の側の椅子が、いつの間に塞がつたのか能くは知らないが、二三度目に再び電燈がともされた時、私の左隣に二人の男女が腰をかけて居るのに氣が附いた。

女は二十二三と見えるが、其の實六七にもなるであらう。髪を三つ輪に結つて、總身をお召しの空色のマントに包み、くッきりと水のしたゝるやうな鮮かな美貌ばかりを、此れ見よがしに露はして居る。藝者とも令孃とも判斷のつき兼ねる所はあるが、連れの紳士の態度から推して、決して堅儀の細君ではないらしい。

「…… Arrested at last……」

と、女は小聲で、フイルムの上に現れた説明書を讀み上げて、土耳古卷の M.C.C. の薫りの高い烟を私の顔に吹き付けながら、指に嵌めて居る寶石よりも鋭く輝く大きい瞳を、闇の中できらりと私の方へ注いだ。

あでやかな姿に似合はぬ、太棹の師匠のやうな皺嗄れた聲、――其の聲は紛れもない、私が二三年前に上海へ旅行する航海の途中、ふとした事から汽船の中で暫く關係を結んで居た女であ

つた。

女は其の頃から、商賣人とも素人とも區別のつかない素振や服裝を持つて居たやうに覺えて居る。船中に同伴して居た男と、今夜の男とはまるで風采も容貌も變つてゐるが、多分は此の二人の男の間を連結する無數の男が、T女の過去の生涯を鎖のやうに貫いて居るのであらう。兎も角も其の婦人が、始終一人の男から他の男へと、胡蝶のやうに飛んで歩く種類の女であることは確かであつた。二年前に船で馴染になつた時、二人はいろ〳〵の事情から本當の姓名も名乗り合はず、境遇も住所も知らせずにゐるうちに上海へ着いた。さうして私は自分に戀ひ憧れてゐる女を、好い加減に欺き、こッそり跡をくらまして了つた。以來太平洋上の夢の中なる女とばかり思つて居た其の人の姿を、こんな處で見ようとは全く意外である。彼の時分やゝ小太りに肥えて居た女は、神々しい迄に痩せて、すッきとして、睫毛の長い潤味を持つた圓い眼が、拭ふが如くに冴え返り、男を男とも思はぬやうな凛々しい權威さへ具へてゐる。觸るゝものに紅の血が濁染むかと疑はれた生々しい脣と、耳朶の隱れさうな長い生え際ばかりは昔に變らないが、鼻は以前よりも少し嶮しい位に高く見えた。

女は果して私に氣が付いて居るのであらうか。どうも判然と確めることが出來なかつた。明り

がつくと連れの男にひそ〳〵戯れて居る様子は、傍に居る私を普通の女と蔑んで、別段心にかけて居ないやうでもあつた。實際其の女の隣に居ると、私は今迄得意であつた自分の扮裝を卑しキない譯には行かなかつた。表情の自由な、如何にも生き生きとした妖女の魅力に氣壓されて、拙巧を盡した化粧も着附けも、醜く淺ましい化物のやうな氣がした。女らしいと云ふ點からも、美しい器量からも私は到底彼の女の競爭者ではなく、月の前の星のやうに果敢なく萎れて了ふのであつた。

朦々と立ち罩めた場内の汚れた空氣の中に、曇りのない鮮明な輪廓をくッきりと浮ばせて、マントの蔭からしなやかな手をちら〳〵と、魚のやうに泳がせてゐるあでやかさ。男と對談する間にも、時々夢のやうな瞳を上げて、天井を仰いだり、眉根を寄せて群衆を見下ろしたり、眞白な齒並を見せて微笑むだり、其の度毎に全く別趣の表情が、溢れんばかりに湛へられる。如何なる意味をも鮮かに表はし得る黑い大きい瞳は、場内の二つの寶石のやうに、遠い階下の隅からも認められる。顏面の凡べての道具が、單に物を見たり、嗅いだり、聞いたり、語つたりする機關としては、あまりに餘情に富み過ぎて、人間の顏と云ふよりも、男の心を誘惑する甘味ある餌食であつた。

もう場内の視線は、一つも私の方に注がれては居なかつた。愚かにも、私は自分の人氣を奪ひ去つた其の女の美貌に對して、嫉妬と憤怒を感じ始めた。嘗ては自分が弄んで恣に棄てゝしまつた女の容貌の魅力に、忽ち光を消されて、踏み付けられて行く口惜しさ。事に依ると、女は私を認めて居ながら、わざと皮肉な復讐をして居るのではないであらうか。……

私は、美貌を羨む嫉妬の情が、胸の中で次第〳〵に戀慕の情に變つて行くのを覺えた。女としての競爭に敗れた私は、今一度、男として彼の女を征服して勝ち誇つてやりたい。かう思ふと、抑へ難い欲望に驅られて、しなやかな女の體を、いきなりむづと鷲掴にして、揺す振つて見たくもなつた。

君は予の誰なるかを知り給ふや。今夜久し振に君を見て、予は再び君を戀ひし始めたり。今一度、予と握手し給ふお心はなきか、明晩も此の席に來て、予を待ち給ふお心はなきか。予は予の住所を何人にも告げ知らする事を好まねば、唯願はくば明日の今頃、此の席に來て予を待ち給へ。

闇に紛れて私は帶の間から半紙と鉛筆を取り出し、こんな走り書きをしたものをひそかに女の袂へ投げ込んだ。さうして、又ぢッと先方の樣子を窺つてゐた。

十一時頃、活動寫眞の終るまでは女は靜かに見物してゐた。觀客が總立ちになつて、どやどやと場外へ崩れ出す混雜の際、女はもう一度私の耳元で、

「……Arrested at last.……」

と囁きながら、前よりも自信のある、大膽な凝視を、私の顏へ暫く注いで、やがて男と一緒に人ごみの中へ隱れてしまつた。

「……Arrested at last.……」

女はいつの間にか、自分を見付け出して居たのだ。かう思つて私は竦然とした。

それにしても明日の晩、素直に來てくれるであらうか。大分昔よりは年功を經てゐるらしい相手の力量を測らずに、あのやうな眞似をして、却つて弱點を握られはしまいか、いろ〳〵の不安と疑懼に挾まれながら私は寺へ歸つた。

いつものやうに上着を脫いで、長襦袢一枚にならうとする時、ばらりと頭巾の裏から四角にたんだ小ひさい洋紙の切れが落ちた。

「Mr・S・K・」

と書き續けたインキの痕をすかして見ると、玉甲斐絹のやうに光つてゐる。正しく彼の女の手

であつた。見物中、一二度小用に立つたやうであつたが、早くも其の間に、返事をしたゝめて、人知れず私の襟元へさし込んだものと見える。

思ひがけなき所にて、思ひがけなき君の姿を見申候。たとへ裝ひを變へ給ふとも、三年此のかた夢寐にも忘れぬ御面影を、いかで見逃し候べき。妾は初めより頭巾の女の君なる事を承知仕候。それにつけても相變らず物好きなる君にておはせしことの可笑しさよ。妾に會はんと仰せらるゝも、多分は此の物好きのおん興じにやと心許なく存じ候へども、あまりの嬉しさに兎角の分別も出でず、唯々仰せに從ひ明夜は必ず御待ち申す可く候。ただし、妾に少々都合もあり、考へも有之候へば、九時より九時半までの間に雷門までお出で下されまじくや、其處にて當方より差し向けたるお迎ひの車夫が、必ず君を見つけ出して拙宅へ御案內致す可く候。君の御住所を祕し給ふと同樣に、妾も今の在り家を御知らせ致さぬ所存にて、車上の君に眼隱しをしてお連れ申すやう取りはからはせ置き候間、右御許し下され度、若し此の一事を御承引下され候はずば、妾は永遠に君を見ることかなはず、此れに過ぎたる悲しみは無之候。

私は此の手紙を讀んで行くうちに、自分がいつの間にか、探偵小說中の人物となり終せて居る

のを感じた。不思議な好奇心と恐怖とが、頭の中で渦を卷いた。女が自分の性癖を呑み込んで居て、わざとこんな眞似をするのかと思はれた。

明くる日の晩は素晴らしい大雨であつた。私はすつかり服裝を改めて、對の大島の上にゴム引の外套を纏ひ、ざぶん、ざぶんと、甲斐絹張りの洋傘に、瀧の如く叩きつける雨の中を戸外へ出た。新堀の溝が往來一圓に溢れてゐるので、私は足袋を懷へ入れたが、びしよびしよに濡れた素足が、家並のランプに照らされて、ぴか〳〵光つて居た。夥しい雨量が、天からざあ〳〵と直瀉する喧囂の響の中に、何も彼も打ち消されて、不斷賑かな廣小路の通りも大概雨戸を締め切り、二三人の臀端折りの男が、敗走した兵士のやうに駈け出して行く。電車が時々レールの上に溜まつた水をほとばしらせて通る外は、ところどころの電柱や廣告のあかりが、朦々たる雨の空中をぼんやり照らしてゐるばかりであつた。

外套から、手首から、肘の邊まで水だらけになつて、漸く雷門へ來た私は、雨中にしよんぼり立ち止りながら、アーク燈の光を透かして、四邊を見廻したが、一つも人影は見えない。何處かの暗い隅に隱れて、何物かゞ私の樣子を窺つてゐるのかも知れない。かう思つて暫く彳んで居ると、やがて吾妻橋の方の暗闇から、赤い提灯の火が一つ動き出して、がらがらがらと街鐵の敷

き石の上を駛走して來た舊式な相乘りの俥が、ぴたりと私の前で止まつた。

「旦那、お乘んなすつて下さい。」

深い饅頭笠に雨合羽を着た車夫の聲が、車軸を流す雨の響の中に消えたかと思ふと、男はいきなり私の後へ廻つて、羽二重の布を素早く私の兩眼の上へ二た廻り程卷きつけて、蟀谷の皮がよぢれる程强く緊め上げた。

「さあ、お召しなさい。」

かう云つて、男のざら〳〵した手が、私を掴んで、惶しく俥の上へ乘せた。

しめつぽい匂のする幌の上へ、ぱら〳〵と雨の注ぐ音がする。疑もなく私の隣には女が一人乘つて居る。お白粉の薫と、暖い體溫が、幌の中へ蒸すやうに罩つてゐた。

轅を上げた俥は、方向を晦ます爲めに、一つ所をくる〳〵と二三度廻つて走り出したが、右へ曲り、左へ折れ、どうかすると labyrinth の中をうろついて居るやうであつた。時々電車通りへ出たり、小ひさな橋を渡つたりした。

長い間、さうして車に搖られて居た。隣に列んでゐる女は勿論女であらうが默つて身じろぎもせずに腰かけてゐる。多分私の眼隱しが嚴格に守られるか否かを監督する爲めに同乘して居るも

のらしい。しかし、私は他人の監督がなくても、決して此の眼かくしを取り外す氣はなかつた。海の上で知り合ひになつた夢のやうな女、大雨の晩の幌の中、夜の都會の祕密、盲目、沈默——凡べての物が一つになつて、渾然たるミステリーの靄の裡に私を投げ込んで了つて居る。

やがて女は固く結んだ私の脣を分けて、口の中へ卷煙草を挿し込んだ。さうしてマッチを擦つて、火をつけてくれた。

一時間程立つて、漸く車は停まつた。再びざら〳〵した男の手が私を導きながら狹さうな路次を二三間行くと、裏木戸のやうなものをギーと開けて、家の中へつれて行つた。

眼を塞がれながら一人座敷に取殘されて、暫く坐つてゐると、間もなく襖の開く音がして、女は無言の儘、人魚のやうに體を崩して擦り寄りつゝ、私の膝の上へ仰向きに上半身を凭せかけた。さうして、兩腕を私の頂に廻して羽二重の結び目をほらりと解いた。

部屋は八疊位もあらう。普請と云ひ、裝飾と云ひ、なか〳〵立派で、木柄なども選んではあるが、丁度此の女の身分が分らぬと同樣に、待合とも、妾宅とも、上流の堅儀な住居とも見極めがつかない、一方の緣側の外にはこんもりとした植ゑ込みがあつて、其の向うは板塀に圍はれてゐる。唯此れだけの眼界では、此の家が東京のどの邊にあたるのか、大凡の見當すら判らなかつた。

「よく來て下さいましたね。」

から云ひながら、女は座敷の中央の、四角な紫檀の机へ身を凭せかけて、白い兩腕を二匹の生き物のやうに、だらりと卓上に逼はせた。襟のかゝつた澁い縞お召に腹合せ帶をしめて、銀杏返しに結つて居る風情の、昨夜と恐ろしく趣が變つてゐるのに、私は先づ驚かされた。

「あなたは、今夜あたしがこんな風をして居るのを可笑しいと思つて居らッしやるでせう。それでも人に身分を知らせないやうにするには、かうやつて毎日身なりを換へるより外に仕方がありませんからね。」

卓上に伏せてある洋盃を起して、葡萄酒を注ぎながら、こんな事を云ふ女の素振りは、思つたよりもしとやかに打ち萎れて居た。

「でも好く覺えて居て下さいましたね。上海でお別れしてから、いろ〳〵の男と苦勞もして見ましたが、妙にあなたの事を忘れることが出來ませんでした。もう今度こそは私を棄てないで下さいまし。身分も境遇も判らない、夢のやうな女だと思つて、いつまでもお附き合ひなすつて下さい。」

女の語る一言一句が、遠い國の歌のしらべのやうに、哀韻を含んで私の胸に響いた。昨夜のや

うな派手な悧發な女が、どうしてから云ふ憂鬱な、殊勝な姿を見せることが出來るのであらう。さながら萬事を打ち捨てゝ、私の前に魂を投げ出してゐるやうであつた。

「夢の中の女」「祕密の女」朦朧とした、現實とも幻覺とも區別の付かない love adventure の面白さに、私は其れから毎晩のやうに女の許に通ひ、夜半の二時頃迄遊んでは、また眼かくしをして雷門まで送り返された。一と月も二た月も、お互に所を知らず、名を知らずに會見してゐた。女の境遇や住宅を搜り出さうと云ふ氣は少しもなかつたが、だん〳〵時日が經つに從ひ、私は妙な好奇心から自分を乘せた俥が、果して東京の何方の方面に二人を運んで行くのか、自分の今眼を塞がれて通つて居る處は、淺草から、何の邊に方て居るのか、唯其れだけを是非共知つて見たくなつた。三十分も一時間も、時とすると一時間半もがら〳〵と市街を走つてから、轅を下ろす女の家は、案外雷門の近くにあるのかも知れない。私は毎夜俥に搖す振られながら、此處か彼處かと心の中に憶測を廻らす事を禁じ得なかつた。

或る晩、私はたうとう溜らなくなつて、

「一寸でも好いから、此の眼かくしを取つてくれ。」

と俥の上で女にせがんだ。

「いけません、いけません。」

と、女は惶てゝ、私の兩手をしッかり押へて、其の上へ顏を押しあてた。

「何卒そんな我儘を云はないで下さい。此處の往來はあたしの祕密です。此の祕密を知られゝば、あたしはあなたに捨てられるかも知れません。」

「どうして私に捨てられるのだ。」

「さうなれば、あたしはもう『夢の中の女』ではありません。あなたは私を戀ひして居るよりも『夢の中の女』を戀して居るのですもの。」

いろ〳〵に言葉を盡して賴んだが、彼女は何と云つても聞き入れなかつた。

「仕方がない、そんなら見せて上げませう。……其の代り一寸ですよ。」

女は嘆息するやうに云つて、力なく眼かくしの布を取りながら

「此處が何處だか判りますか。」

と、心許ない顏つきをした。

美しく晴れ渡つた空の地色は、妙に黑ずんで星が一面にきら〳〵と輝き、白い霞のやうな天の川が果てから果てへ流れてゐる。狹い道路の兩側には商店が軒を列べて、燈火の光が賑かに町を

照らしてゐた。

不思議な事には、可なり繁華な通りであるらしいのに、私は其れが何處の街であるか、さつぱり見當が付かなかつた。俥はどん〳〵其の通りを走つて、やがて一二町先の突き當りの正面に、精美堂と大きく書いた印形屋の看板が見え出した。

私が看板の横に書いてある細い文字の町名番地を、俥の上で遠くから覗き込むやうにすると、女は忽ち氣が付いたか、

「あれッ」

と云つて、再び私の眼を塞いで了つた。

賑かな商店の多い小路で、突きあたりに印形屋の看板の見える街――どう考へて見ても、私は今迄通つたことのない往來の一つに違ひないと思つた。子供時代に經驗したやうな謎の世界の感じに、再び私は誘はれた。

「あなた、彼の看板の字が讀めましたか。」

「いや、讀めなかつた。一體此處は何處なのだか私にはまるで判らない。私はお前の生活に就いては、三年前の太平洋の波の上の事ばかりしか知らないのだ。私はお前に誘惑されて、何だか遠

い海の向うの、幻の國へ伴れて來られたやうに思はれる。」

私が斯う答へると、女はしみ〴〵とした悲しい聲で、こんな事を云つた。

「後生だからいつまでもさう云ふ氣持で居て下さい。幻の國に住む、夢の中の女だと思つて居て下さい。もう二度と再び、今夜のやうな我が儘を云はないで下さい。」

女の眼からは、涙が流れて居るらしかつた。

其の後暫く、私は、彼の晩女に見せられた不思議な街の光景を忘れることが出來なかつた。燈火のかん〳〵ともつてゐる賑かな狹い小路の突き當りに見えた印形屋の看板が、頭にはッきりと印象されて居た。何とかして、あの町の在りかを捜し出さうと苦心した揚句、私は漸く一策を案じ出した。

長い月日の間、毎夜のやうに相乘りをして引き擦り廻されて居るうちに、雷門で俥がくるくると一つ所を廻る度數や、右に折れ左に曲る回數まで、自ら一定して來て、私はいつともなく其の鹽梅を覺え込んでしまつた。或る朝、私は雷門の角へ立つて眼をつぶりながら二三度ぐるぐると體を廻した後、此の位だと思ふ時分に、俥と同じ位の速度で一方へ駈け出して見た。唯好い

加減に時間を見はからつて、彼方此方の横丁を折れ曲るより外の方法はなかつたが、丁度此の邊と思ふ所に、豫想の如く、橋もあれば、電車通りもあつて、確かに此の道に相違ないと思はれた。

道は最初雷門から公園の外廓を廻つて千束町に出て、龍泉寺町の細い通りを上野の方へ進んで行つたが、車坂下で更に左へ折れ、お徒町の往來を七八町も行くと旋て又左へ曲り始める。私は其處でハタリと此の間の小路にぶつかつた。

成る程正面に印形屋の看板が見える。

其れを望みながら、祕密の潜んでゐる巖窟の奥を究めでもするやうに、つか〳〵と進んで行つたが、つきあたりの通りへ出ると、思ひがけなくも、其處は毎晩夜店の出る下谷竹町の往來の續きであつた。いつぞや小紋の縮緬を買つた古着屋の店もつい五六間先に見えて居る。不思議な小路は、三味線堀と仲お徒町の通りを横に繋いで居る街路であつたが、どうも私は今迄其處を通つた覺えがなかつた。散々私を惱ませた精美堂の看板の前に立つて、私は暫く佇んで居た。燦爛とした星の空を戴いて夢のやうな神祕な空氣に蔽はれながら、赤い燈火を湛へて居る夜の趣とは全く異り、秋の日にかん〳〵照り付けられて乾涸らびて居る貧相な家並を見ると、何だか一時に

がつかりして興が覺めて了つた。

抑へ難い好奇心に驅られ、犬が路上の匂を嗅ぎつゝ自分の棲み家へ歸るやうに、私は又其處から見當をつけて走り出した。

道は再び淺草區へ入つて、小島町から右へ右へと進み、菅橋の近所で電車通りを越え、代地河岸を柳橋の方へ曲つて、遂に兩國の廣小路へ出た。女が如何に方角を悟らせまいとして、大迂廻をやつて居たかゞ察せられる。藥研堀、久松町、濱町と來て、蠣濱橋を渡つたところで、急に其の先が判らなくなつた。

何でも女の家は、此の邊の路次にあるらしかつた。一時間ばかりかゝつて、私は其の近所の狹い横町を幾度も出つ入りつした。

丁度道了權現の向ひ側の、ぎつしり列んだ家と家との庇間を分けて、殆んど眼につかないやうな、極めて細い、さゝやかな小路のあるのを見つけ出した時、私は直覺的に女の家が其の奥に潜んで居ることを知つた。中へ入つて行くと右側の二三軒目の、見事な洗ひ出しの板塀に圍まれた二階の欄杆から、松の葉越しに女は死人のやうな顔をして、ぢつと此方を見下ろして居た。

思はず嘲けるやうな瞳を擧げて、二階を仰ぎ視ると、寧ろ空惚けて別人を裝ふものゝ如く、女

はにこりともせずに私の姿を眺めて居たが、別人を裝うても怪しまれぬくらゐ、其の容貌は夜の感じと異つて居た。たつた一度、男の乞ひを許して、眼かくしの布を弛めたばかりに、祕密を發かれた悔恨、失意の情が見る見る内に表れて、やがて靜かに障子の蔭へ隱れて了つた。

女は芳野と云ふ其の界隈での物持ちの後家であつた。あの印形屋の看板と同じやうに凡べての謎は解かれて了つた。私は其れきり其の女を捨てた。

二三日過ぎてから、急に私は寺を引き拂つて田端の方へ移轉した。私の心はだん〳〵、「祕密」などと云ふ手ぬるい淡い快感に滿足しなくなつて、もツと色彩の濃い、血だらけな歡樂を求めるやうに傾いて行つた。

柳湯の事件

その青年が上野の山下にある辯護士S博士の事務所を訪れたのは、或る夏の夜の九時半ごろの事であつた。——

ちやうど折よく、私は其時階上の老博士の部屋にあつて、大型のデスクに向ひ合ひながら、何か小説の種にでもなりさうな最近の犯罪事件を、博士の口から聞かうとして居る最中であつた。かう書いて來れば大概讀者は推量するであらうが、博士は古くからの私の小説の愛讀者で、私が訪問するといつも喜んで耳新しい材料を提供してくれる人であつた。私がなまじの探偵小説を讀むよりも、刑事の辯護士として令名の高い、法律學は勿論文學や心理學や精神病學の造詣の深い老博士から、彼が長年取り扱つて居る。種々雑多な罪人の祕密を、遙かに多大の興味を持つて傾聽したことは云ふまでもなからう。——

そこで、その青年が部屋のドーアをノックした時は、前にも記した通り或る夏の晩の九時過ぎであつた。部屋の中には博士と私と二人だけしか居なかつた。博士は例の白い頬鬚のある溫顏に愛嬌に富んだ微笑を浮べ、ゆつたりと太つたリンネルの服の背中を扇風器に吹かせながら、私は

又、遠く上野の山の常盤花壇の灯を臨む窓際に肘をかけて、御馳走に出されたアイスクリームをすすりながら、つい先達て新聞の三面記事を賑はせた龍泉寺町の殺人事件に就いて、いろいろと世間に知れない細かい事柄を語り合つて居るところであつた。二人は最初、話の方に氣を取られて居たせゐか、その青年が階段を登つて來る際に、聞えた筈の足音を、全然聞き洩らして居たので、扉の板戸が不意にこつこつと叩かれた時には、ちよいと意外の感じがした。が、博士はちらりと戸の方を見て、

「お這入り。」

と簡單にさう云つたきり、再び話を續けようとしたらしかつた。多分博士は、何かの用事で給仕が上つて來たのだと思つたものであらう。私にしてもやつぱりさうであつた。此の事務所に通勤して居る人々は、夕方になれば大概歸つてしまふので、階下の部屋に住んで居る給仕より外に、今時分案内もなく二階へ上つて來る者はない譯である。然るに、ドーアの把手がぐるりと廻轉したかと思ふと、ドシン！　と重い物を引き擦るやうな靴の音が響いて、一人の見知らぬ青年がよろける如く室内へ足を運んだのであつた。

「あ、此れは何か、餘程の罪人だな。」

と、その瞬間に私ですら直覺したくらゐであるから、博士は無論、私よりももつと早く氣が付いたに違ひあるまい。實際、その時の青年の表情は芝居や活動寫眞で見るよりもずつと凄慘を極めて居た。その、飛び出るやうに大きく睜つた黑味がちの眼の色だけでも、たしかに異常な犯罪者に相違ない事を、どんな素人にでも頷かせるだけのものはあつた。博士と私とは期せずして顏の色を變へた。しかも斯う云ふ場合に馴れ切つて居る博士は、慌てて椅子から飛び立たうとする私を輕く手眞似で制しながら、沈着な、同時に少しも油斷のない態度で、ぢつと其の青年の方に警戒するやうな凝視を向けた。

青年は二人が相對して居るデスクから二三歩手前まで進んで來て、そこでぴたりと立ち止つたまま暫らく默然として此方を睨み返して居た。

「お前は誰だね、何の用があつて此處へ來たんだね。」

と、博士が柔和な口調で尋ねたけれども、青年は依然として眼を剝いたきり、直ぐには何事をも答へようとしなかつた。いや、直ぐに何事をか答へようとしたらしかつたが、餘りに呼吸がせいせいと彈んで居るので口を利く事すら出來ないやうであつた。その激しい胸の喘ぎ方や、紫になつた脣の色や、無上に搔き亂されて居る髮の毛の樣子から判斷するのに、恐らく彼は往來を

一目散に駈續けて、やつと今此處まで逃げ伸びて來たのであらう。彼はやがて眼を潰つて、片手を心臟の鼓動の上にあてて、猶もはつはつと息を切らせながら、二三分の間一生懸命に、神經の興奮を取り鎭めようと努力して居るらしく見えた。

青年の年ごろは二十七八歲、――なりが穢らしい爲めにふけては見えるが、多くも三十を超えては居なかつたであらう。瘦せた、細長い、古い霜降の背廣服を着て、頭には帽子も被らず、散々に毟り散らした藁屑のやうな毛髮を、青白い額の上に振りかけて、垢じみたカラアにはボヘミアン・ネクタイを結んで居た。私は始め、青年の上衣の肩のあたりに點々と附着して居る繪の具のしみに依つて、多分ペンキ屋の職人であらうと推察したけれども、職工にしては何處かその顏だちに上品なところのあるのを、間もなく發見せずには居なかつた。それに、長く伸ばした髮の毛の樣子と云ひ、ボヘミアン・ネクタイの工合と云ひ、やはり職工よりは美術家に近い風采である事をも、見逃す譯には行かなかつた。青年は、胸の動悸が次第に收まつて、その屑の紫色がだんだん生きた血の色を帶びて來るのを感じた時、再び漸く眼を開いたが、瞳の表情はまだ何か知ら夢を見て居るやうであつた。彼は博士の顏を見ないで、少しく首をうなだれながら、ぢいッとデスクの上に稍長い間視線を向けて居た。デスクの上には、今しがた私が手にして居たアイスク

リームの飲みかけのコップと、卓上電話とが置いてあるばかりなのである。で、彼はそのアイスクリームのコップの方を、いかにも珍らしさうな眼つきで、いつ迄もいつ迄も眺めて居た。彼はきつと息を切らせて喉が渇いて居るのであらう。それで此のアイスクリームを飲ませて貰ひたいのだらう。――私がさう考へたのは咄嗟の間である。さうして次の瞬間には、私の此の推察は非常な誤りであつた事が明かになつた。なぜかと云ふのに、アイスクリームを見詰めて居る、青年の眼つきは、「珍らしさう」と云ふよりも、寧ろ「疑ひ深さう」な色を帶びて來て、見る見るうちに彼の顏には名狀し難い恐怖の情が、ありありと瀰漫したのであつた。たとへて云へば、彼は怜も化物の正體をでも見究めるやうな臆病な眼つきで、さもさも不審さうに、どろどろしたアイスクリームの塊を睨んで居たのである。それから彼は更に一歩前へ進んで一層入念にアイスクリームのコップの中をと見かう見した後、始めて安心したやうにほつとかすかな溜息をついた。その、少くとも私にだけは合點の行かない不思議な素振りを、先から靜かに觀察して居た博士は、此の時を待ち構へて居たやうに、やさしい語氣で再び質問の言葉を云つた。

「君は誰だね、さうして何の用事があつて來たんだね。」

博士は先「お前」と云ふ代名詞を使つたに拘はらず、今度は「君」と改めたのである。此の青

年が卑しい職工ではないらしい事を、博士も私と同樣に後で氣が付いたのだらう。

すると青年は、ぐつと一と息唾を飲んで、大きい眼の上を二三度ぱちぱちと眼瞬きした。それから急に自分の身に危險の迫つてゐるのを感じたやうに、今這入つて來た戸口の方に注意深い瞳を配つて、居ても立つても堪らないやうな、後から恐い物に追ひ縋られて居るやうな風を示した。

「いや、突然、案内もなくこんな所へ上つて參りまして、大變失禮いたしました。……」

かう云つて、青年はやつとその時あたふたと頭を下げてぞんざいなお時儀をした。

「あなたは、――失禮ですがあなたは、S博士でいらつしやいますか。僕は車坂町に住んで居るKと云ふ繪かきなんですが、今、此の先の湯屋へ行つて、その歸り道に此處をお尋ねしたのです。……」

成る程、青年は右の手にタオルとシヤボンの箱とを持つて居た。洋服を着て湯屋へ行くところを見ると、彼は此の一張羅より外に、着換の浴衣をすら持つて居ないのであらう。が、それにしても、例の長い髪の毛の先が、びつしよりと湯氣を含んで居るだけで、手にも顏にも、湯上りらしい晴れ晴れとした色つやは浮んで居なかつたのである。

「……僕は今、是非先生にお目にかかりたくつて、その湯屋から一生懸命に駈けて來たのです。

實は取り次ぎをお願ひしようと思つたんですが、生憎下には誰も見えなかつたものですから、：：それに非常に慌てて居たものですから、つい無斷で此處へ飛び込んでしまひました。失禮の段は重々お詫びを申します。」

青年の言葉は少しづつ落ち着いて來たものの、その眼の中に漂つて居る不安の表情は、決して消え去つては居なかつた。むしろ、彼が落ち着かうと焦れば焦るほど、一層彼の精神の興奮は明かに看取された。彼は右の手に持つて居たシヤボンの箱をポケットに入れて、濡れたタオルを兩手で絞りながら、極めて早口に、どうかすると聞えないくらゐな嗄れた聲で、以上の挨拶を云ひ終つた。

「さうすると君は、何か私に急な用事でもあるのかね。——まあ、其處へ腰をかけて、ゆつくりと話したらよからう。」

かう云つて、博士は彼に椅子を勸めて、ちよいと私の方を顧みながら、

「此處に居る此の人は、私の極く信頼して居る人だから、決して心配する必要はない。何か話があるならば遠慮なく云つて聞かせ給へ。」

「ええ有り難うございます。實は折り入つて先生に聽いて頂きたい事件があるのですけれど、そ

の前に是非ともお願ひ申さなければならないことがあるのです。僕は今夜、事に依ると、人殺しの大罪を犯して居るかも知れません。かも知れませんと云ふのは、自分でも果して人を殺したかどうか、はつきりとした判斷が附かないのです。僕は今しがた、多勢の人々が、僕を指して口々に『人殺し人殺し』と呼んで居る聲を聞きました。僕はその聲を聞き捨てて急いで此處まで逃げて來たのですが、或ひはかうして居るうちにも、後から追手が追ひかけて來るかも知れません。しかし又考へ直して見ると、それ等は全部跡形もない夢であつて、僕の幻覺に過ぎないのかとも思はれます。今夜の人殺しが事實だとするには、あまり辻褄の合はない事だらけですし、それに僕は以前から、たびたび幻覺を見る癖のある人間ですから、今夜の出來事も何處までが本當なのか、自分では全く分らないのです。人殺しがあつたのはほんたうで、下手人は僕でないかも知れません。それとも或ひは初めから、人殺しなんぞ全然なかつたのかも知れません。『人殺し人殺し』とその呼び聲が聞えたのも、後から追手が追ひかけて來たのも、みんな僕の錯覺に過ぎないのかも知れません。僕は決して、自分の罪を逃れたい爲めにこんな事を云ふのではないのです。僕は先生の前で、今夜の事件を何も彼も白狀して、私が果して忌まはしい罪人であるかどうかを判斷して頂きたいと思ふのです。で、もしや今夜の殺人が事實であり、その下手人が僕であつた

場合にも、僕が心からの惡人ではなかつた事を、僕の犯した罪は僕の幻覺の祟りであつたことを、先生によつて證明して頂きたうございます。ですからどうか、萬一此の二階へ追手が追つて來るやうな事があつても、僕の話が濟んでしまふまでは、僕を警官の手へお渡し下さらないやうに、それを前以てお願ひ申して置きたいのです。――僕は、僕のやうな病的な人間が或る不可抗力に脅かされて罪を犯した場合に、その心理を理解して辯護して下さる方は、先生より外にはないと信じて居ます。今夜の事件がなくつても、僕は一遍先生をお訪ねしようかと、とうから考へて居たくらゐでした。そこで、先生は僕の唯今お願ひしたことを聞き屆けて下さるでせうか。話は可なり長くなるかと思ひますが、それが濟むまで僕を此の部屋へ匿まつて頂く事は出來ますまいか、勿論話が濟んだ上で、自分の罪が明かになつた場合には、僕は潔く自首する事を誓つて置きますが。……」

青年は息もつかずに此れだけの事を云つて、溫和なうちにも鋭い眼光を備へて居る老博士の容貌を恐る恐る仰ぎ視るのであつた。その一刹那の博士の顏には、例になく峻嚴な、いかにも頭腦明晰な學者にふさはしい品格と權威とが溢れて居るやうに見えた。さうしてぢつと熱心に相手の樣子を眺めて居たが、たとへその青年は忌まはしい罪人であるにもせよ、彼が兎に

角正直な若者である事だけは、疑ふべくもないと考へたのであらう。博士は間もなく寛大な態度を示して、次ぎのやうに云つた。「よろしい、君の話が濟むまでは、君の體は私が引き受ける事にしよう。君は非常にのぼせて居るやうだから、氣を落ち着けて、よく分るやうに話をするがいい。」

「ああ、有り難うございます。」

と青年は感傷的な口調で云つた。それからやつと勸められた椅子に腰を卸して、私と共に都合三人デスクの周圍をかこみながら、さて徐に左の如く語り出した。

「今夜の出來事を述べるに先づて、僕はどこから此の話の緒を切つてよいか、此の出來事の始まりは何處なのか、いつからなのか、考へれば考へる程それは複雜になつて來て、殆んど際限もなく過去の問題に溯らなければならないやうな氣がします。今夜の事件の性質を、ほんたうに精しく說明する爲めには、恐らく僕の今日までの生涯を、殘らず此處に披瀝する必要があるかも知れません。或ひは僕の生ひ立ちや、兩親の特徵までも、詳細にお話しなければ十分でないと云へるでせう。しかしそんな事をくだくだしく陳述する餘裕もありませんから、僕はただ、自分には氣違ひの血統があると云ふ事と、十七八の時から可なり激しい神經衰弱に罹り通して來た事と、現在では油繪を職業にしては居るものの、職業と云ふのもお恥かしいほど技術が拙劣で、極めて

貧乏な生活を營んで居る事とを、簡單に申し述べて置きませう。それだけを豫め承知して頂いて、僕の此れから話す事柄をよく聞いて下されば、少くとも先生にだけは僕の目擊した不思議な世界や、經驗した苦悶の性質が、どんなものであるかお分りになるだらうと思ふのです。

僕の住居は先もお話したやうに、車坂町にあつて、電車通りの一つ後の、正念寺と云ふ淨土宗のお寺の境内にあるんです。僕は其處の長屋を借りて、去年の暮れから或る女と同棲して居ました。或る女――さうです、親密の程度から云へば、妻と呼んでも差支へはないやうなものですが、しかし彼女と僕との關係は、普通の夫婦關係とは大分違つたものですから、やはり或る女と呼んで置きませう。いや、それより瑠璃子と云ふ彼女の名前で呼ぶことにしませう。此の話が進むにつれて、彼女の事は屢々口に上らなければならないのですから。

有り體に云ふと、僕は瑠璃子のお蔭で、それから瑠璃子は僕のお蔭で、今日のやうな貧困な境涯に落ちたのです。僕はそれを今更悔んでも居ませんが、瑠璃子の方には隨分いろいろな不平があるやうでした。彼女は日本橋の藝者をして居た時分、僕のやうなやくざな人間と駈け落ちなどをしなかつたら、今頃は定めし立派な人に引かされて、何不自由なく暮らす事が出來ただらうと、そんな考へが年中彼女の胸の中にもしやくしやと蟠つて居るのでした。僕は今でも氣違ひのやう

に彼女を可愛がつて居るのですけれど、根が姪奔で多情な彼女は、とうから僕に愛想をつかして居るらしく見えました。彼女は折々わざと喧嘩を吹きかけてぷいと家を飛び出したり、用もないのに男の友達を訪問して夜おそくまで歸つて來なかつたり、それでなくても嫉妬深い僕の神經をいやが上にも昂ぶらせるやうな眞似ばかりしました。そんな時には、僕は殆んど正氣(正銘)の狂人でした。自分でも自分の氣の狂つて行く鹽梅が、恐ろしいほどよく分りました。かッと一時に逆上して彼女の襟髮を掴むや否や、彼女の體を獨樂のやうにぐるぐると引き擦り廻し、打つたり叩いたり、果ては夢中で、何度彼女を殺さうとしたか分りません。ですが瑠璃子はそんな事で怯むやうな弱い女ではありませんでした。どうかすると、僕は彼女の前に手を合せて、額を疊に擦りつけて、和睦してくれるやうに哀願する事もありました。けれども僕のさう云ふ態度は、結局彼女の驕慢と我が儘とを募らせるに過ぎなかつたのです。勿論彼女をそんな風にさせたのには、僕の方にも罪がないとは云へません。僕は去年あたりから神經衰弱の上に重い糖尿病を煩つて居ました。で、その爲めに、彼女の肉體に愛溺する心はありながら、而も彼女の生理的慾望に十分な滿足を與へる事が出來なくなつたのも、二人の不和を增大させる有力な原因だつたに相違ないと思ひます。實際それは、彼女のやうな健康な、さうして多情な女に取つては、堪へ得られない苦

惱であつたかも知れません。さうしていつの間にか、健康を誇つて居た彼女もだんだんと激しいヒステリーになり、矢鱈に怒りつぽく、焦ら立たしくなつて行きました。櫻色に活き活きと輝いて居た瑠璃子の顏が次第に靑白く痩せ衰へて行く樣子を見ることは、僕に取つては傷ましくもあると同時に愉快でもあつたのです。僕の氣分はそれほど廢頽的になり、病的になつて居ました。

瑠璃子のヒステリーは更に二倍の勢を以て、僕の神經衰弱の上に惡い影響を及ぼさずには居ませんでした。先生は多分、糖尿病と云ふ病氣が、神經衰弱とどれ程密接な關係があるかと云ふことを御存じでせう。それからまた、太つた人の糖尿病はさほど恐るるに足らないけれども、僕のやうに痩せた人間の糖尿病は、極めて惡性なものであると云ふ事も御存知でせう。僕の場合には糖尿病が神經衰弱を重くさせたのか、或ひは其の反對であつたのか、孰方が先だか分りませんが、兎に角此の二つの病氣は互ひに連絡を取り足並を揃へて、僕の心身を一日一日に腐らせて行くばかりでした。僕は絕えず瑠璃子の事を思ひ詰めていろいろな妄想を描き、幻覺に襲はれ通しました。寢ても覺めても奇怪な夢ばかり見るやうになりました。中でも一番苦しかつたのは、自分が瑠璃子に殺されはしないかと云ふ恐怖だつたのです。僕は此れでも、まだ藝術に對して全然望みを絕つて居る人間ではありません。現在では瑠璃子の愛に溺れ切つて居るものの、せめて此の世

に生れたかひには、立派な藝術の一つぐらゐは殘して死にたいと、不斷から願つて居たのでした。いかに墮落した、デカダンな生活を送つて居ても、藝術の生命が不朽であると云ふ事だけは固く信じて居る人間なのです。もしか僕が、今不幸にしてあの女に殺されるやうな事があつたなら、僕の此の世の中に存在した足跡は、永劫に葬られてしまひます。僕にはそれが何よりも恐ろしい事でした。『今日殺されるか、明日殺されるか。』さう思つて居るせゐか僕は始終物凄い幻に脅かされました。夜半に眼をさますと、瑠璃子がそつと僕の體へ馬乘りに跨つて、ひやりとする剃刀を喉元へあてがつて居たり、僕の眉間から血がたらたらと流れて居たり、不思議な痲醉藥が夜具の襟に塗りつけてあつたり、そんな光景を實際に見たり感じたりして、卒倒しさうになつた事が屢々でした。其の癖瑠璃子は僕に對して、腕力を以て抵抗することなどは一度もなかつたのです。根性のねぢくれた、邪慳な女ではあるけれど、僕に折檻される時はまるで死人のやうにぐたぐたに疲れ切つて、脣に皮肉な微笑を浮べながら、蹴られ放題打たれ放題身を投げ出して居るのでした。しかしさう云ふ彼女の態度は、一層僕の心を狂暴にさせ殘忍にさせずには置かなかつたのです。彼女がぢつと我慢をして、平氣の平左で擲られて居る不敵な面つきを見れば見るほど、僕は一層恐怖に驅られました。たまたま彼女が例になく優しい態度を示したりすれば、僕は却

つて警戒しました。彼女がすすめる一杯の酒、一杯の湯水さへも、迂濶に口へ入れようとはしませんでした。で、結局彼女に殺されるくらゐなら、寧ろ此方から進んで彼女を殺してしまつた方が安全だとも思ひました。僕が殺されるか彼女が殺されるか。いづれにしても二人の間に血腥い犯罪が釀されつつあることは、それは餘りに明らかな事實のやうに感ぜられました。

僕は此の秋の展覽會に、彼女をモデルにした裸體畫を出品するつもりだつたのですが、そんな工合で仕事は無論捗りませんでした。ちやうど先月の末あたりから二人は毎日喧嘩ばかりして居たので、僕はまるつきり筆を取る暇はなかつたのです。僕の病的な頭には更に仕事の不滿足から來る自暴自棄が加はつて、ますます僕の生活を絶望的なものにしてしまひました。さうして、此の半月ばかりの間、僕の毎日の日課と云ふものはただ瑠璃子を折檻し、愛溺し、崇拜し、哀願する事を繰り返すばかりでした。一日のうちに、彼女に對する僕の感情は、猫の目のやうに幾通りにも變りました。彼女を力任せに擲つたかと思ふと、次ぎの瞬間にはいきなり彼女に武者振りついてさめざめと涙を流します。それでも彼女が聞き入れないと、再び打つたり蹴つたりします。さう云ふ騒ぎがあつた後には、必ず彼女はぷいと姿を晦まして、半日も一日も、どうかすると明くる朝まで、内を明けるのが常でした。僕はひとりぽつ然と家の中に取り殘されたまま、もう

泣いたり怒つたりする元氣もなく、痺れた頭を抱へながら、失心したやうに身を横たへて、うつらうつらと時の過ぎて行くのを見守つて居るばかりなのです。

ちやうど今から四五日前にも、さう云ふ騒ぎが持ち上りました。尤も、その時は又いつもとりは格別な大喧嘩で、僕は此のまま氣違ひになるならなれと云ふやうな捨て鉢な料簡で暴れ廻つたのです。喧嘩が始まつたのは何でも夕方からでしたが、それが晩の九時頃までも續いて、僕は彼女を半死半生の目に會はせました。さうして彼女が髪を振り亂して、ばつたり緣側の板の間に打ツ倒れるのを尻目にかけながら、一目散に往來へ飛び出して、其處らぢゆうを歩き廻りました。なぜ家を飛び出したかと云ふと、今に必ず瑠璃子が飛び出すだらうと思つたので、それを見るのが嫌さに、自分の方から機先を制してやる積りだつたのです。何處をどう云ふ風に歩いて行つたのか、未だにはつきりとは覺えて居ませんが、上野の森の暗い中を拔けて、動物園の後ろから池ノ端の方へ降りて行つた時に、僕は漸く我に復つてほッと溜息をつきました。多分僕は熱した頭に冷たい空氣の觸れるのが快いので、知らず識らず人通りの少い、淋しい方角へ辿つて行つたのでせう。彼處から納涼博覽會の前を通り過ぎて、觀月橋を上野の方へ渡つて來た時分には、いくらか僕も正氣附いて、自分が今どんな場合に立つて居るのかと云ふ事が、ぼんやり分るやうにな

つて居ました。それと同時に、あまり亂暴をしたせゐか、高い所から落されでもしたやうな工合に、體の節々の痛むのが感ぜられました。が、僕の意識は、まだ半分は夢を見て居るやうに朦朧と曇つて居て、頭の中には、何も彼も嵐で吹き飛ばされてしまつたやうに、人間らしい感情は、少しも殘つて居ませんでした。たつた今喧嘩をして非道い目に會はせた女の姿が、折々遠い物音のやうにちらちらと思ひ浮べられはしたものの、その俤をぢつと見詰めても、別段戀しくも悲しくもありませんでした。そのうちに僕は、或る賑やかな、人がぞろぞろと澤山に通つて居る、灯影の明るい往來の方へ出て行きました。はて、已は何處へ來たんだらうと思つて見ると、其處は廣小路の電車通りで、夜店が一杯に竝んで、涼み客の雜沓して居る間を、右往左往に揉まれながら、あてどもなく歩いて居るのでした。——多分あの晩は摩利支天の緣日か、でなければ土曜日の晩か何かで、博覽會の見物人が大勢出歩いて居たのでせう。彼處はいつも賑やかな所ですけれど、しかしあの晩の人ごみは特別のやうに思はれました。——何しろ僕の眼には、あの時のあの町の光景が非常に賑やかに映りました。その賑やかさは多小眼まぐるしくはあるが、決して自分の腦髓を搔き亂すやうなものではなく、何か音樂のシムフオニーでも聞いて居るやうな、花やかな、さうして晴れ晴れとした美しい快感でした。僕は一體に人ごみの町を好かない方の性分なの

ですが、その晩に限つて、神經が馬鹿になつてゐる爲めに、そんな感じを起したのでせう。自分の左右に騷々しく動搖して居る種々雜多な通行人や、色彩や、音響や、光線などが、僕の頭に一つも明瞭な印象を止めないで、ただ幻燈の繪のやうにぱうッと霞んで通り過ぎるのが、僕にさう云ふ滑らかな氣分を抱かせたのに相違ありません。たとへば僕は、自分獨りが恐ろしく高い所に居て下界の雜沓を瞰下して居るやうな心持ちになつて居たのです。子供の時分に、母親に叱られたり何かして泣きながら表を通つて居ると、涙の爲めに往來がぼんやりと曇つて、大變遠い景色に見えることがあるでせう。あの晩僕はちやうど其のやうな光景を見たのでした。

それから、——さうです、それから三十分ばかりも立つた後でせうか、僕は廣小路の通りから次第に車坂の家の方へ引き返して來ました。勿論家へ歸らうと云ふはつきりとした意志があつたのではなく、事に依ればそれから又淺草公園の方へ行く氣があつたのかも知れません。で、あの車坂の停留場の所から右へ曲つて電車通りを五六間も行くと、左側に柳湯と云ふ湯屋があるのを、先生は御存じでせう。僕はあの湯屋の前まで來た時に、風呂へ這入らうと云ふ氣になりました。斷つて置きますが、僕は以前から頭がもしやくしやした時は、湯へ這入る習慣になつて居たのです。僕に取つては、精神の憂鬱と肉體の不潔とは全く一つの感覺でした、心が沈んで居る時は

體中が垢が溜つて惡臭を放つて居るやうに感ぜられました。さうして、心の沈み方の激しい折はいくら湯へ這入つて洗つても、その垢と惡臭とが容易に落ちないやうな氣がするのです。かう云ふと何だか年中湯へばかり這入つて居る、潔癖な人間のやうに聞えますけれど、實は大概湯へ這入る元氣がないほど沈滯しきつて居る時の方が多かつたのです。長い間、精神の憂鬱に慣れ切つてしまつた結果、肉體の不潔をも寧ろ樂しむ樣な心持ち、——何とも云へないだらけた無精な、溝泥の樣に濁つた心持ち、——その心持ちに對して、僕は一種の懷かしみさへ感じて居たくらゐだつたのです。が、その晩恰も柳湯の前まで來た時に湯へ這入つたらば半月以來の暗澹たる氣分が、たとへ一時なりとも少しは明るくなるだらうと、ふとそんな風に考へました。

僕は一體、湯屋にしても、床屋にしても、何處と云つて極つた所はありませんでした。いつでも往來を歩いて居て、その氣になれば見つけ次第に飛び込むのが癖でした。ですからその晩も、ちやうどポケットに十錢銀貨があつたのを幸ひ、ふらりと柳湯へ這入つたのだと思つて下さい。ところで中へ這入つて見ると、僕が今まで一遍も來たことのない湯屋であることが分りました。いや、正直を云ふと、僕はあの晩あすこを通りかかつた際まで、あんな場所に湯屋のある事は、つい氣が附かずに居たのでした。或は氣が附いては居たのかも知れないが、しかし全く其の時ま

で忘れて居ました。ここでもう一つ斷つて置かなければならないのは、僕が先内を飛び出したのは九時時分で、それからもう何時間くらゐ立つたか、少くとも三時間は經過したらうと思はれるのに、なんぼ夏の晩だとは云ひながら、湯殿はまるで宵の口のやうにごたごたとこみ合つて居るのです。非常に夥しい湯氣が一面に濛々と籠つて居るので、風呂場の廣さははつきりとは分りませんでしたが、流しの板や桶などがひどくぬるぬるした、あまり清潔な湯屋ではありませんでした。尤も大分夜更けの事で、多勢の人が這入つた跡ですから、そんなに汚れて居たのかも知れません。何にしても餘り客がこんでゐる爲めに、小桶を一つ手に入れるのさへ、なかなか手間がかかつたほどでした。さうして、湯船の中の混雜と來たら、更に一層甚だしく、まるで芋を洗ふやうにぎつしりと詰まつて居る裸體の浴客の、肩と肩との隙間を狙ひながら、何とかして割り込まうと待ち構へて居る連中が、僕の周圍に五六人も並んで湯船の縁に摑まつて居ました。僕は暫らくあつけに取られて、貸し手拭でざぶざぶと湯を掻い出しては背中へ浴びて居ましたが、そのうちにやつと眞ん中の方に少しばかり空きが出來たのを見附け出して、そこへ無理やりに割り込みました。漬かつて居ると湯は生溫く唾吐のやうにのろのろして居て、垢じみた、臭い匂ひがぷーんと鼻を打つのでした。僕の前後に居る浴客の顏や肌は、ちやうどカリエールの繪を思ひ出させ

るやうにぽうッと霞んで、何だか無數の幻影か、其處に漂つて居るやうな感じを僕に起させました。今も言つた通り、僕の割り込んだ場所は恰も湯船の眞ん中だつたので、僕には濛々たる湯氣より他には、殆んど何も見えませんでした、天井を見ても湯氣、前を見ても湯氣、右も左も湯氣、さうして纔に近所に居る五六人の輪郭が、幽靈のやうにぼやけて見えただけなんです。若しもあの場合、女湯と男湯の兩方の湯殿に充ち滿ちて居るがやがやと云ふ人聲や、それが水蒸氣の立ち罩めた高い天井のドームに反響する擾音や、ならびに僕の五體を包んで居る生暖かい湯の感覺や、それ等の物がなかつたら、僕は深山の谷間の霧の中に這入つて居るのと少しも變りはなかつたでせう。實際僕は、その時も廣小路の人ごみをうろついて居た時と同じやうに、妙に孤獨な、而も夢のやうに快い、不思議な氣分に誘ひ込まれました。

此處の風呂場が不潔であることは、湯船の中に漬かつて見ると、一層其の感じが強くなりました。湯船の緣も湯船の底も、さうして其處に湛へられて居る湯も、凡べてがぬるぬると、口でしやぶつた物のやうにどろついて居るのです。かう云ふと、僕がいかにも其れを不愉快に感じたやうですけれど、實はそれ程いやな氣持ちはしませんでした。ここで僕は、僕の異常な性癖の一端を白狀しなければなりませんが、どう云ふ譯か僕は生來ぬらぬらした物質に觸られることが大好

きなのです。たとへばあの蒟蒻ですね、僕は子供の時分から馬鹿に蒟蒻が好きでしたが、それは必ずしも味がうまいからではありませんでした。僕は蒟蒻を口へ入れないでも、ただ手で觸つて見るだけでも、或ひは單にあのぶるぶると顫へる工合を眺めるだけでも、それが一つの快感だつたのです。それから心太、水飴、チューブ入りの練齒磨、蛇、水銀、蛞蝓、とろろ、肥えた女の肉體、――それ等は凡べて、喰ひ物であらうが何であらうが、皆一樣に僕の快感を挑發せずには措かなかつたものです。僕が繪が好きになつたのも、恐らくはさう云ふ物質に對する愛着の念が、次第に昂じて來た結果だらうと思ひます。僕の畫いた靜物を見ればお分りになるだらうと思ひますが、何でも溝泥のやうにどろどろした物體や、飴のやうにぬらぬらした物體を畫く事だけが非常に上手で、その爲めに友達からヌラヌラ派と云ふ名稱をさへ貰つて居るくらゐなんです。で、ヌラヌラした物體に對する僕の觸覺は特別に發達して居て、里芋のヌラヌラ、水洟のヌラヌラ、腐つたバナナのヌラヌラ、さう云ふ物には、眼を潰つて觸つて見ただけでも、直ぐに其れを中てる事が出來ました。ですからその晩も、その薄穢ないぬらぬらした湯に漬かつて、ぬらぬらした湯船の底に足を觸れて居ることが、寧ろ一種の快感を覺えさせたのです。そのうちにだんだん自分の體までが妙にぬらぬらして來て、僕の近所に漬かつて居る人たちの肌までも、みんな此

の湯のやうにぬらぬらと光つて居るらしく思はれ、何だかちよいと觸つて見たいやうな氣になりました。すると、さう思つたとたんに、僕の足の裏は何か知らぬが生海苔のやうにこつてりとした。鰻のやうににによろしした、一層濃いヌラヌラの物體をぬるりと踏んづけたやうでした。ちやうど古沼の中へ足を突つ込んで蛙の死骸を踏んだやうな氣持ちでした。そのぬらぬらを足の先で探つて見ると、それが斯う、海の藻が絡みつくやうな鹽梅に兩方の脛へ粘り着いて來て、やがて今度は更に一層こつてりとした、流動物の塊らしいものが、不意にくちやりと足の甲を撫でたのです。僕は最初、皮膚病患者の膏藥とか練藥とか云ふやうなものが、繃帶と一緒に湯船の底に沈んで蕩けて居るのだらうと思ひましたが、暫らくさうして搜つて居るうちに、そんな小ひさな物でない事が分つて來ました。のみならず、その流動物を踏んづけながら二た足三足歩いて行くと、ぬらぬらの度はますます濃くなつて來て遂にはゴムのやうにもくもくした重たい物體がぬらりぬらりと足の下に持ち上つて來るのです。そのゴムに似た物體の表面は、一面に痰のやうな粘液に包まれて居て、力まかせに踏んづけようとしても、つるりと滑つてしまひます。それでも構はず踏んづけて行くと、もくもくとした物は一層高く膨れ上り、ところどころにぽくんと凹んだ部分があつて、それから又もくもくと持ち上り始め、何でも一間ぐらゐな長さにうねうねと

のたうちながら、湯水の底にどんより漂うて居るのです。あまり樣子が變なので、僕は手で以て其の物體を引き上げて見ようと思ひましたが、その一刹那、突然、ある物凄い聯想がふいと腦裡を掠めたので、覺えず慓然として手を引つ込めてしまひました。ひよつとしたら、僕の脛に絡み着いて居る藻のやうな物體は、女の髪の毛ではあるまいかと云ふ考へが、急に其の時僕の胸に閃めいたのです。……女の髪の毛？　さうです、それはたしかに長い女の髪の毛がもつれ合つて居るのです。さうしてあのゴムのやうにもくもくとした重たい物は、人間の肉體に違ひないのです。……湯船の底には女の死體がただよつて居るのです。

いや、そんな馬鹿な事がある譯はない。現に此の湯船の中には、自分以外にも多勢の人が漬かつて居るぢやないか。さうして皆平氣な顏をして居るぢやないか。と、考へ直して見ましたけれど、依然として脛にはぬらぬらした物が絡み着き、足の下にはもくもくした物がぷつくり膨れ上つて居ます。僕の異常に鋭敏な觸覺は、たとへ足の裏に於ても、どうして其の物體の判斷を誤りませう、――それが人間の、而もある女の死骸である事は、最早や僕に取つて一點の疑ふ餘地もないのでした。それでも僕はもう一遍、念の爲めに頭の方から爪先まで踏み直して見ましたが、やはりさうに違ひありません。首のやうに圓い形をした物の次ぎには、細長く凹んだ頸部があり、

その次ぎには又高く高く、さながら丘のやうに持ち上つて居る胸板の先が、乳房になり、腹部になり、兩脚になり紛ふ方なき人間の形を備へて居るのです。僕は當然、自分は今夢を見て居るのぢやないだらうかと思ひました。夢でなければこんな不思議な事がある筈はない。自分は今何處に居るのだらう、布團を被つて寢て居るのぢやないか知らん。さう考へて周圍を見廻すと、其處には相變らず湯氣が濛々と立ち罩め、がやがやと云ふ人聲がうるさく聞えて、自分の前後には二三の浴客の輪郭が、ぼうッと霞んで幻の如く浮かんで居ます。そのもやもやした湯氣の世界がぼんやりと淡くかすれて居る工合は、全く夢のやうにしか思はれませんでした。夢だ、夢だ、きつと夢に違ひないんだと、僕は思ひました。いや、實を云ふと多少は半信半疑だつたのですが、僕は狡猾にも、無理やりに夢にしてしまつたのです。夢ならば覺めないで居てくれろ。もつと夢らしい不思議な光景を見せてくれろ、もつと面白い、もつと途方もない夢になつてくれろ、さう云ふ風に僕は心に念じました。夢ならば覺めよと祈るのが人情ですけれど、僕の場合は反對でした。僕はそれ程夢と云ふものに價値を置き、信頼を繫いで居る人間なんです。極端に云へば現實よりも夢を土臺にして生活して居る男なんです。ですから其れが夢であつたと悟つたからと云つて、急に實感を失ふやうな事はありません。夢を見ることは、うまい物を食つたり、いい着物を

着たりするのと同じやうな、或る現實の快樂なのです。

僕は、夢の面白さを貪るやうな心持ちで、猶も其の死骸を足でいぢくり廻しましたが、不幸にも其の面白さは決して長くは續きませんでした。なぜかと云ふのに、僕はやがて、それを一場の夢だとするには餘りに恐ろしい事實を發見したからです！　僕の足の裏の鋭敏なる觸覺は、――あ、何と云ふ呪はしい、フエエタルな觸覺でせう！　啻に其れが女の死體である事を感付いたばかりでなく、その女が誰であるかと云ふ事までも、僕に敎へずには置きませんでした！　あの昆布のやうにぬらぬらと脛に卷き着いて居る髮の毛、――恐ろしく多量な、ふつさりとした、而も風のやうにふわふわした髮の毛は、彼女の物でなくて何でせう？　僕が彼女を愛するやうになつたのも、最初は實に此の髮の毛の爲めだつたのです。それを僕がどうして忘れる事が出來るでせう。そればかりか、あの綿のやうに軟弱な、蛇體のやうに滑かな全身の肉づき、――たとへば其れは葛湯を塗りつけたやうに粘つこく光つて居る肌ざはり、――それが彼女の物でなくて何でせう？　やがて僕の足の先には、鼻の恰好、額の形、眼のありどころ、脣の位置までが、見るが如くにありありと感ぜられて來るのでした。さうです、何と云つても、いかに護摩かさうとしても、それは瑠璃子に違ひないのです。瑠璃子が此處に死んで居るのです。

その時僕には、此の湯の不思議が一時に解決されました。僕はやつぱり夢を見て居るのではなかつたのです。僕は瑠璃子の幽靈に會つて居るのです。普通、幽靈と云ふものは人間の視覺を脅やかすものですが、それが僕の場合にあつては觸覺を脅やかして居るのだ。僕は彼女の幽靈に觸れて居るのだ、てつきりさうに違ひないと思ひました。僕は先、家を飛び出す時、彼女を半死半生の目に會はせました。僕はきつとあの時に誤つて彼女を殺してしまつたに相違ない。彼女は緣側にぐつたり倒れたきり起き上らうとしなかつたが、實はもうあの時に死んで居たのだ。さうして今、此の風呂場の中へ幽靈になつて現はれたのだ。幽靈でなければ客がこんで居るのに、誰も氣が付かないと云ふ筈がない。僕はとうとう人殺しをした！　いつか一度はなければならない犯罪が、とうとう今夜行はれたのだ！——此の考へが湧き上ると同時に、僕は辣然として湯船の中を飛び出すや否や、體もろくろく洗はずに往來へ逃げ伸びました。外は依然として賑やかでした涼みの客がいまだにぞろぞろと其の邊を繫がり歩き、電車が幾臺も幾臺も威勢よく走つて居ます。僕以外の世界には何等の變化もないことを證するやうに、——

僕の頭には、緣側にぐつたりと倒れて居る瑠璃子の姿と、湯船の底に澱んで居たぬらぬらの死體の觸感とが、一つに結び着いてまざまざと燒き付けられて居ました。それから二三時間の間、

深夜の往來がひつそりと寢鎭まつてしまふ頃まで、僕がどんな慘憺たる氣持ちを抱いてあてどもなく路上をうろうろとさ迷うて居たか、それは精しく說明する迄もなく、大概お分かになるだらうと思ひます。僕は兎に角、一旦自分の住居へ歸つて此の忌はしい事件の眞相をたしかめた上、いよいよ殺人罪を犯したと極まつたら、明日にも潔く自首して出ようと決心しました。僕以外の世界には何等の變化がないにもせよ、少くとも瑠璃子だけはもう此の世に生きて居ない事を、僕は信ぜずには居られませんでした。實際、その時の僕には、さう信じることが極めて自然だつたのです。瑠璃子が生きて居るとしたら、湯船の底に沈んで居た死骸が彼女の幽靈でないとしたら一層それは不自然になつて來るんです。

然るに、其の晩おそく家へ歸つて見ると、不思議にも瑠璃子はちやんと生きて居ました。いつもならば、喧嘩の跡で家を飛び出すのが彼女の癖ですのに、その晩はあんまりひどく擲られたので體を動かす氣力すらなかつたのでせう。やはり先と同じやうに緣側へ突つ伏して、正體もなく體を投げ出しながら例の房々した髮の毛を振り亂したまま、——しかし立派に生きて居たのです。實はそれさへも幽靈ではないかと思ひましたが、その夜が明けて、朝になつても瑠璃子はちやんと僕の傍に控へて居ます。勿論僕は湯屋の事件を彼女にも誰にも話しませんでした。若し

も世の中に生靈と云ふものがあるならば、昨夜のはきつと生靈に違ひない。僕はさうも考へました。僕も隨分今までに奇怪な幻覺を見るには見ましたが、ゆうべの死骸を、單なる幻覺だと極めてしまふのには餘りに不思議過ぎたからです。全く僕以外に嘗て一人もあんな不思議な幻覺に出會つた人があるでせうか？

僕はそれから今夜まで、此れでちやうど四晩つづけて、同じ時刻にあの柳湯へ行つて見ました。ところがどうでせう！　その死骸は毎晩毎晩あの湯船の眞ん中あたりに、いつもぬらぬらと漂うて居て僕の足の裏を舐めるのです。さうして常に人ががやがやとこみ合つて居て、流しには湯氣が濛々と籠つて居ます。それだけならばまだいいのですが、とうとう僕は我慢し切れなくなつて、今までは足の先だけで觸つて居たのに、今夜は一と思ひに兩手を死骸の脇の下に着つ込みぐうッと湯船の底から引き上げて見ました。すると——やつぱり僕の想像は誤まつては居なかつたのです。それは正しく彼女の生靈だつたのです。ぬるぬるとした水垢に光りながら、眼と口とをぽかんと開いて、濡れた髪の毛を荒布のやうに引き擦つて湯の面へ浮び出た死に顏は、紛ふ方なき瑠璃子の俤だつたのです。・・・・僕は慌てて再び死骸を湯船の底へ押しやりました。さうして殆んど無我夢中で湯から上ると、大急ぎで着物を着換へて表へ逃げ伸びようとしました。その

瞬間に、俄かに湯殿の方が騷々しくなつたかと思ふと、それまで平氣で體を洗つて居た多勢の浴客が總立ちになつて「人殺し、人殺し！」と叫び始めたやうでした。「彼奴だ彼奴だ、今洋服を着て出て行つた奴だ。」さう云ふ聲も聞えました。僕は驚いて、横丁をいくつもいくつもぐるぐると曲つて、やうやう此處まで一目散に駈けて來たのです。・・・・

僕の話は此れだけですが、僕は決して謊を云ふのではありません。僕はその死骸を最初には夢だと思ひ、次ぎには幽靈かと疑ひ、最後には生靈だと信じて居ましたのに、今夜多勢の連中が騷ぎ出したところを見ると、やつぱり生靈でも幽靈でもなく、ほんたうに彼女の死骸なのでせうか。僕は皆が云ふやうに「人殺し」をしたのでせうか。さうだとすると、僕はいついかなる手段で彼女を殺したのでせう。僕は夢遊病者のやうに、自分で知らない間にそんな大罪を犯してしまつたのでせうか。それにしても彼女の死骸が、湯船の底に沈んで居るのはどう云ふ譯でせう。その死骸は此の間から彼處にあつたのに、どうして其れが今夜まで、外の人には分らなかつたのでせう。それとも此の間から今夜までの出來事は、悉く僕の幻覺に過ぎないのでせうか。僕は立派な氣違ひなのでせうか。——先生、どうぞ此の不思議な事實を僕の爲めに說明して下さい。僕が罪人であつた場合にも、僕の申し立てが僞りでない事を、裁判官に證明して下さい。僕は今夜湯

屋から飛び出した瞬間に、先生ならばきつと僕の不思議な立場を了解して下さるだらうと、ふいと考へついたので、かうして突然お願ひに上つた譯なんです。」

その青年の告白は此れで終つたのである。S博士は其れを聞き取ると、兎に角青年を連れて柳湯へ行つて見なければ眞相が分らないと云ふ事を答へた。が、そんな面倒を見るまでもなく、やがて青年の行くへを探索して居た數人の警官がどやどやと事務所へ追跡して來て、直ちに彼を引き立てて行つた。警官が博士に語つた所に依ると、その青年は其の柳湯の湯船の中で、不意に一人の男の急所を摑んで死に致らしめたのださうである。殺された男は、あッと云ふ間に聲をも立てず絶息して、湯船の底に沈んで行つた。その死に方があまりあつけなかつたのと、湯殿が非常に混雜して湯氣が籠つて居たのとで、人々は暫らく其れに氣が附かなかつた。さうして青年が死骸を引き擦り上げた時に、一人の浴客が眼を附けて、其れから追ひ追ひに騷ぎ出したのださうである。

青年の情婦の瑠璃子は、勿論殺されては居なかつた。彼女は其の後證人として法廷へ呼び出されたが、その事件の辯護に任じたS博士から私が聞いたところでは、法廷に於ける彼女の陳述は青年が奇怪の狂人であることを證明するに十分な根據となつた。

即ち、彼女は青年の平素の行動に就て次のやうに語つた。

「私があの人を嫌つたのは、決してあの人に働きがないからではなく、さうかと云つて外に男が出來たからでもありません。實は年々に激しくなるあの人の狂氣が恐ろしかつたのです。あの人は此の頃、私に對して無理な奇體な要求ばかりをしました。さうして、ありもしない事を事實に見たと云つて私を困らせ、虐待し、折檻しました。その折檻の仕方が又非常に妙でした。たとへば私を壓さへつけて置いて、ゴムのスポンジへシヤボンをとつぷりと含ませて、それで私の目鼻の上をぬるぬると擦つたり、體中へどろどろした布海苔を打つかけて足蹴にしたり、鼻の孔へ油繪の繪の具をべつとりと押し込んだり、始終そんな馬鹿げた眞似をして私をいぢめました。私がぢつと大人しく玩具にされて居ると機嫌がいいのですけれど、若し少しでも嫌がつたり何かすれば忽ち腹を立てて亂暴を働きました。そんなこんなで私はあの人と一緒に居るのが厭で厭で溜りませんでした。」——

彼女は青年が考へて居たほど婬奔な、多情な女ではないらしかつた。S博士の觀察では、寧ろ少しくお人好しの、ぐづで正直な女らしいと云ふ事であつた。

青年は間もなく、監獄へ入れられる代りに瘋癲病院へ收容された。

或る少年の怯れ

少年の名は田島芳雄と云つた。芳雄は自分の兩親がどんな人であり、どんな顔をして居たかはまるきり知らない。彼の兩親は、彼が生れて四つになるまでの間に死んでしまつたのである。彼は物心が附いてからは兄の幹藏の家で育てられた。幹藏は彼が五つの歳の時に二十四だつた。幹藏の下に二十になる祿次郎と云ふ弟と十六になる柳子と云ふ妹とがあつた。さうして柳子と末子の芳雄とは歳が十一も違つて居たのに、其の間には兄弟が一人もなかつた。いや、實は一人か二人あつたのださうだけれど、生れると直ぐに死んでしまつたのだと云ふ事を、芳雄はずつと大きくなつてから知つた。

だから芳雄は四人の兄弟の一人ではあつたやうなものの、自分だけがひどく幼い爲めに何となく除け者にされて居るやうで寂しかつた。芳雄はよく、「芳雄さんは一番可哀さうですね。」と云ふことを親類の人たちから云はれた。それは彼が二た親の顔を知らないと云ふことが哀れみの原だつたのである。しかし芳雄は二た親の顔を知つて居たところで、自分が今の兄弟たちに對する心持ちと格別變りはないだらうと云ふ氣がした。外の三人の兄や姉たちは友達のやうに對等に話し

合つて遊んで居ながら、彼だけは子供だからと云つて相手にされない。それは何も虐待されると云ふのではなかつたけれども、殊に姉の柳子などは彼を自分の子のやうにしてはくれたけれども、其の「子のやうにされる。」のが何だか彼には不服だつたので、「子のやうに」されないでも「兄弟のやうに」されて欲しいのだつた。そんな事を芳雄が折々感ずるやうになつたのは彼が七つになつた歳の頃からである。三人の兄や姉のうちではもちろん總領の兄がいくらか威張つて居るらしい樣子だつたが、さうして芳雄に取つても其の兄が一番恐いには違ひなかつたが、それでも其の兄は外の兄弟に對しては、芳雄を叱る時のやうには叱る事は出來なかつた。その癖外の兄や姉たちも總領の兄と一緒になつて芳雄を叱る權利は持つて居た。彼等は芳雄に對する時だけ、いやに兄貴ぶつたり姉ぶつたりして居るやうに思はれた。總領の兄が、外の二人と違つて居るところは、三人の兄弟の名前を呼ぶのに「祿次郎」とか「柳子」とか「芳雄」とか云ふ風に一樣に呼び捨てにする事だつた。さうして彼は三人の誰からも「兄さん」と呼ばれて居た。それから祿次郎と柳子とは互に「祿ちやん」だの「柳ちやん」だのと云ひ合つて居た。ただ芳雄だけが二番目の兄や姉に對してまでも、「祿次兄さん、」だの「姉さん」だのと呼ばなければならなかつたのである。

芳雄が七つの歳の夏に、總領の兄は大學を卒業して醫學士になつた。で、今迄は毎朝角帽に金ボタンの制服を着て出て行つたのが、間もなく紳士の着るやうな洋服を着て、毎日午前八時ごろから夕方の五時ぐらゐまで、大學病院の方へ通ふやうになつた。その時分親類の叔父だの叔母だのが内へやつて來て、

「幹藏さんもとうとう立派な學士になつたんだから、こんなめでたい事はありません。お父様やお母様も草葉の蔭でさぞ喜んでおいでなさるだらう。」

と云つて、口々に甥の出世を喜んだことを芳雄はうろ覺えに覺えて居る。が、それよりもはつきり覺えて居るのは、明くる年の三月に兄が結婚した折のことである。式を擧げたのは日比谷の大神宮で、晩には上野の精養軒でおひろめの宴があつた。芳雄は牛込の廣澤と云ふ親類の叔母や「祿次兄さん」や柳子と一緒に自動車に乘つて、日比谷から上野へ廻つた。自動車の中で叔母が、

「ほんたうに好ささうなお嫁さんだこと。——今度は祿ちやんの番ですね。」

と、そんな事を云ふと、

「なあに、僕よりも柳ちやんの方が先ですよ。」

と、「祿次兄さん」が云つた。さうしたら姉は眞赤な顔をして、

「いやな祿ちやん」

と云つたやうだつた。

その日から芳雄には新らしい姉が一人殖えた。新らしい姉の方をただ「姉さん」と呼んで、今迄の姉の方を「柳子姉さん」と呼ぶやうになさいと、廣澤の叔母はわざわざ後に注意してくれた。ただの「兄さん」にただの「姉さん」、「祿次兄さん」に「柳子姉さん」、かう二つづつあるのがをかしいと云つて芳雄が笑つたら、「兄さんや、姉さんが大勢あるのは結構ぢやありませんか。」と云つて、叔母も笑つた。新らしい姉が出來たと云ふ事は、芳雄も何だか物珍らしいやうな氣持ちで、嬉しくないことはなかつた。新らしい姉は「柳子姉さん」より二つ上の二十で、喜多子と云ふ名前だつた。「喜多子」、・・・・「喜多子」と、婚禮の明くる日から總領の兄は呼び捨てにした。それが耳馴れないせゐか、暫らくの間芳雄には新らしい姉に氣の毒なやうな感じがした。

精養軒のおひろめの席に連なつた晩に、芳雄は新らしい姉と今迄の姉と孰方がいい女だらうかと思つて、そつと顔だちを見くらべたりしたものだつた。しかし其の晩は孰方も派手なきらきらした御祝儀の着物を着て、お白粉を濃く塗つてきちんとして居たので、顔が同じやうに綺麗に見えてよく分らなかつた。新らしい姉の方が今迄の姉よりも別嬪だと云ふ判斷が、いつの間に

かはつきりと頭にあるやうになつてしまつて居たのは、その後二た月か三月過ぎた時分だつたらう。とにかく新らしい姉は柳子よりも優しい顔や姿をして居た。さうして芳雄を親切に可愛がつてくれることは柳子と同じだつた。晝間は外の兄や姉は病院や學校へ行つて内に居ないことが多かつたから、芳雄は自然新らしい姉に早く馴染むやうになつた。いつたい彼は赤ん坊の頃から病身な子供だつたので、大きくなつてからも月に一度か二度はきつと熱を出したり胃腸を悪くしたりしたので、そんな折に新らしい姉は氣を揉んで自分が醫者へ附いて行つてくれたりした。姉は芳雄にばかりでなく、外の兄弟や親類の人たちにも評判がよかつた。取り分け柳子には仲がよくて血を分けた姉と妹のやうだつた。でも、柳子は弟があまりたびたび病氣で寢たりなんかして姉に面倒をかける事が多いので、をりは氣の毒がる樣子で、芳雄が姉に甘えたりして居ると、

「芳ちやん、お前なるたけ姉さんにお世話を燒かすんぢやありませんよ。」

かう云つてたしなめることもあつた。

それは今でも半分は夢のやうな工合で芳雄の記憶の中に殘つて居る。――姉が赤ん坊を生んだこと、そのことは結婚の明くる年の正月時分だつた。芳雄は一度その赤ん坊の顔を見たやうに覺

えて居る。それから生れる時のおぎやあおぎやあと云ふ泣き聲も、お產のあつたのが宵の口のことで芳雄はちやうど二階座敷に居た時だつたから、たしかに聞いたやうに覺えて居る。けれど其の後赤ん坊は居なかつた、生れたと思つたのは芳雄の思ひ違ひであつたかのやうに。――しかしそれから二三年も立つて或る時芳雄が柳子から聞いたのに、生れたやうに覺えて居るのは芳雄の思ひ違ひではなく、やはりほんたうだつたのだが、生れると間もなく二三日して死んでしまつたのださうで、そこの所の記憶が芳雄の頭からはぽつりと拔けて居たのである。子供の時分に見たり聞いたりした事はどうも不思議で、ところどころをはつきりと覺えて居るけれど、その後先がぼうッと霞んで繫がりが付かない事が多い。で、芳雄は其の赤ん坊が死んだのは知らずに居たがその後姉が二度お產をして、その時の赤ん坊たちも皆同じやうに直ぐ死んでしまつたのは、明かに覺えて居るのである。姉のお腹が大きくなる度ごとに今度こそは大丈夫だらうと云つて、内中の者が樂しみにした效もなくて、いつもお產はうまく行かなかつた。芳雄にしても赤ん坊が出來れば自分も兄になれるのだから、可なり熱心に其れを願つて居たのだけれど。

家の間數のわりあひに家族が多數だつたので、内の中は赤ん坊が生れないでも隨分賑かだつた。四人の兄と姉とが集まつて、その外に男や女のお友達などもやつて來て、骨牌をしたりトラ

ムプをしたり音樂會をしたりして夜おそくまで騷いで居ることが間々あつた。芳雄は晩の八時になると先へ寢かされたが、騷々しくて寢つかれないくらゐだつた。彼は子供の癖に神經質で眼敏い性分だつたから。トラムプの時はやり方が分らないので見て居ても詰まらなかつたけれど、音樂會の時は皆がいろいろ冗談を云ひ合つて面白さうなので、芳雄も傍へ置いて貰ふのが常だつた。

「芳ちやん、今度はお前の番よ。さあ、何か唱歌を歌つて御覽。」

みんなが一としきり歌ひ疲れてがつかりした折なぞに、芳雄がぼんやりと手持ち不沙汰で居ると、柳子はよくこんな事を云つた。

「さあお歌ひなさい。今御馳走が來ますから歌つたら芳ちやんにも上げますよ。」

と、上の姉も一緒になつてすすめた。芳雄は大きな人たちの仲間へ入れて貰へるのは嬉しくない事はなかつたが、兄や姉のお友達も居るので、何となく斯う羞かしくつて歌はうと云ふ氣にはなれなかつた。すると柳子は、

「ほんとに芳ちやんははにかみ屋だねえ。歌はなければお菓子を上げなくつてよ。」

などと云つてからかつたものだつた。

上の姉は三味線が好きだつた。柳子はいつも姉の三味線で長唄を語つた。兄たちはトラムプだ

と得意だつたが音樂會では何がうまいと云ふことはなしに、英語の唱歌をうたふとか勸進帳をやるとか芝居の聲色を使ふとか、好い加減な節で出鱈目に怒鳴るばかりだつた。芳雄には、彼に對してはいつも眞面目な顏つきをして居る上の兄が、義太夫を語つて女の聲で臺辭を云ふ時が一番をかしかつた。餘所から遊びに來るお客の中には隨分いろんな藝人が居て、ヴイオリンやマンドリンを彈く者もあつた。上の姉の從姉にあたる女學生で、みんなが「瑞枝さん、瑞枝さん」と云つてた人——芳雄だけは其の時分、「瑞枝さん」とは呼ばないで、「痲布の姉さん」と呼んで居た——その人は會のあるたびにやつて來て、非常に高い好い聲で西洋の歌をうたつた。ハイカラな女だつたから日本の物はあまりやらなかつたけれど、ヴイオリンが上手なので、瑞枝の番が來れば皆が耳を澄まして聞いて、曲が終ると盛んな拍手だつた。「ソプラノ」だとか「バリトン」だとか「獨唱」だとか云ふ音樂に關係した言葉が、をりをり瑞枝の口から出ることがあつたので、芳雄もいつの間にか其れを聞き覺えるやうになつたくらゐである。瑞枝はその外にも意味の分らない英語を、べらべらと話の間へ交ぜて語る癖があつた。柳子も可なりお轉婆の方だつたが、瑞枝にはかなはなかつた。男の人たちに冗談を云はれなどしても、瑞枝は負けずに云ひ合ひをしてやり込めたりする。ほかの女たちはトラムプは下手だのに瑞枝は其れもなかなか强かつたので、ど

んな會の時でも彼女が一番持て囃されて居た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

兄は大學病院に二年ほど勤めた後、其處をやめて、銀座の裏通りへ「田島醫院」と云ふ看板を出して町醫を開業した。しかし家族が大勢でもあつたし、醫院の方は狹かつたものだから、内中其方へ引越す譯には行かないので、やはり兄は今まで通り本郷の彌生町の家から毎朝通つて居た。そんな譯で家庭の空氣は相變らず暢氣で賑やかだつた。ただ、開業と同時に内の方へも電話が引かれて、夜おそくなどに兄が呼び出されることはあつたけれど、それも極たまだつたのである。

或る時――それは芳雄が十歳の年の暮れで姉がちやうど二度目の赤ん坊を生んだ折のこと、――その赤ん坊は前にも云つたやうに生れると直ぐ死んで居たが、姉はお産のあとの疲れが出て半月ばかり床の上に寢たり起きたりしながら退屈がつて居たので、それを慰める爲めに夕方からいつものやうな音樂會が彼女の枕もとで催されることになつて居た日に、芳雄は學校から歸つて來ると柳子に云ひ附かつて銀座の十字屋へ蓄音器のレコードを買ひにやらされた。彼は臆病な子供だつたから獨りでなんぞそんな遠くへ使ひに行くのは厭だつたけれど、十字屋なら所が分つても

居たし、柳子や女中は晩の會の支度で忙がしくて手が放されなかつたから、どうしても彼が行かなければならなかつた。京橋で電車を降りて十字屋で買ひ物をしてから、まだ表はうす明るかつたので、芳雄はレコードの包みを壞さないやうに大事に抱へながら、こんな遠い所まで子供が獨りで使ひに來たのを誰かに見せてやらうと思つて、直き近くにある兄の醫院へ寄つたが、這入つて行くと、兄はもう本郷へ歸つてしまつた跡らしく、玄關や藥局室はがらんとして誰も居なかつた。たびたび來て勝手を知つて居たから、梯子段を上つて二階の部屋のドーアを明けると、兄は歸つてしまつたのかと思つたら、もう一人思ひもかけない人と――瑞枝と二人ぎりで其處に居た。芳雄ははッとして、見てはならないものの所へ來たやうな氣がして、でも又すぐ其の部屋を出てしまふのは惡いやうにも考へられて、ちよいとの間、ぢつと立つたままだつた。瑞枝と兄はちらと芳雄を見て眼を外らして、――少し顏色を變へたやうだつたけれど――別に驚ぐやうな風はしないで、ぢつと暫らく動かずに居て息が詰まつたやうな工合に默りつづけた。瑞枝は寢ころんで居て、兄は其の首のところに坐つて下を向いて顏を寄せつけるやうにした形のままで居た。

「いいえ、其處のところぢやございませんわ。……もつと此方、ここの胸の所が痛いんでございますの。――」

ふいと、瑞枝がさう云つて、襟をひろげて自分の胸の上をこつこつ叩いた。

「ここですか、ここが痛いんですか。」

兄もさう云ひながら、藥局室から膏藥を取つて來て彼女が指で叩いて居る所へ其れを貼つてやると、瑞枝は立ち上つて、

「芳ちやん、あなた一人でいらつしつたの？」

と、芳雄を見てにつこりして着物の襟を直して居た。

「ええ、僕は銀座へ蓄音器のレコードを買ひに、お使ひに來たんです。」

なるたけ兄の方を見ないやうにして、芳雄は瑞枝にだけさう答へた。何でもないんだ、飛んだ思ひ違ひだつたんだ、と云ふやうな氣も半分はしながら。

「あら、お使ひにいらしたの？　それは感心ね。——あたし此れから兄さんと御一緒にお宅の音樂會へお伺ひする所なのよ。芳ちやん先へ行つて姉さんにさう云つて置いて下さいな。直きに參りますからうんと御馳走を拵へて置いて下さいッて。」

瑞枝は其のあとで何か冗談を云つて芳雄にふざけたやうだつた。

晩になつてからの音樂會は、姉が半病人のやうな姿で布團の上に坐つて居るのが陰氣だつたけ

れど、外の人たちが思ひきりはしやいでくれたので其の陰氣さは忘れられてしまふくらゐだつた。兄も機嫌がよかつたし、兄と一緒にやつて來た瑞枝も、みんなを相手にいつもの通り元氣にしやべつたり遊んだりした。

田島の一家に陽氣な空氣が充ち亙つて居たのは、其の時分が絶頂だつた。其の時分は誰も彼も幸福だつたし、臆病な芳雄も寂しいと云ふ心持ちを餘り味はずに濟んで行つたのである。姉は床上げがあつてから後も、暫らくの間は音樂會や骨牌會が催されて、みんながつまらない事にきやッきやッと云つて轉げて笑つたりするほど氣輕な心になつて居て、始終集まつて來る瑞枝を始め多くの定連の人たちもよく氣が揃つたものだが、芳雄の十一の歳の秋に工學士になつた二番目の兄の祿次郎が神戸の造船會社の方へ行つてしまつたのが、家の中の寂しくなり出した始めだつた。でもまだお轉婆な柳子が居て瑞枝と負けず劣らず騒いで居る間はそんなでもなかつたのに、柳子も其の年の暮れに澁谷の宮本と云ふ内へお嫁に行つたので、それからは急に家の中が陰氣になつて、今迄のやうに會を催すこともなくなつてしまつたのである。姉は、二度もお産をやりそくなつた上に、貧血症になつて、時々眼まひがしたり氣が遠くなつたりして寢て居ることが多かつたから、人が尋ねて來ることを嬉しがつて、音樂會の定連のうちで今では瑞枝一人だけが相變

らずちよいちよい話に來てくれるのを、たいへん懷かしく思つて居るらしかつた。さうして、病氣が直ると瑞枝を誘つては兄と三人で芝居を見に行つたり、芳雄も連れて日比谷公園へ出かけたりすることがあつた。けれどどうしても以前のやうに面白くなれなかつたのは、――其れは一つには、その時分から兄が妙に重々しい、いつもむッつりと寒ぎ込んで居るやうな人間になつてしまつたせゐでもあつたに違ひない。兄はもともとぢつと沈んだところのある、愛嬌の乏しい無口な性質だつたのに、今までは家庭の空氣に釣り込まれて派手な人間に見えて居たのだけれど、祿次郎や柳子が居なくなつてからいつとなしに自分の元の性質に復つて居たのだつた。それに不愛想なわりには鷹揚で曖かみのある人だつたから、姉の病身の事や、子供の出來ない事や、いろいろそんな事で人知れず氣を使つて居たのかも知れない。ただ瑞枝と二人ぎりで居る時に、兄が例になくにこにこ笑ひながら話をして居たのを、芳雄はたつた一度、――或る日小石川の植物園へ行くと向うの木かげを二人が手を曳いて歩いて居たのを、――そつと見たことがあつた。二人の方では氣が付かなかつたやうだつたが、……

柳子が結婚した明くる年の三月に、姉は三度目の流産をして又床の上に寢たり起きたりする體になつた。瑞枝はもちろん柳子もをりをりは丸髷に變つた姿で澁谷から尋ねて來ては、

「瑞枝さん、ほんたうにあなたには濟みませんことね。毎日毎日お見舞ひに來て頂いて。」と、心から禮を述べて、瑞枝のやうにしげしげとは出歩く譯には行かなくなつた自分の今の身の上をかこつ事もあつた。

「いいえ、あたしなんか暇な人間なんですから毎日でもお伺ひして、柳子さんの代りに姉さんのお相手をいたしますわ。どうせ遊んで居るんですから何でもありませんの。」

瑞枝はいつも柳子にさう答へて、夜おそくまであとに殘つては例の花やかな笑ひ聲を響かせながら面白さうな世間話を姉に聞かせて居た。兄も大概の日には、醫院の方を早く濟ませて枕もとに附き添ひながら、それほどにする病人でもなかつたのに、隨分やさしく親切な言葉をかけてやると云ふ風だつた。

「瑞枝さんや柳ちやんが遊びに來て下さるので、あたしちつとも退屈なんかしやしませんから、そんなにして頂かなくてもようございますわ。今日はあなたお忙がしいんぢやなかつたの？」

姉はさう云つて兄の親切を氣の毒がることもあるくらゐだつた。姉は氣だてのいい人には違ひなかつたから、兄からそんなに大事にされるのはあたり前だつたけれど、それでも芳雄は、自分が病氣の時などに兄があの半分も自分にやさしくしてくれない事を思ふと、姉を仕合せな人だと

云ふやうに考へずには居られなかつた。さうしてさう考へることが芳雄には羨ましいよりは嬉しい感じを起させたには違ひなかつたが、しかし兄だの瑞枝だのがあんまり姉を大事にし過ぎると云ふことは、其處には何か氣づかはしい譯があるやうな暗い心地のする折もあつて、痩せて青ざめた姉の顏をぢつと見て居る事は、なぜか芳雄には堪へ難かつた。

産後の疲れと云ふだけで大した病ではなかつたが、みんなが心配して看病したり、姉も妙に寂しがつて人懷つこいことを云つたりしたのは、やはりよくない出來事のある前兆だつたのかも知れない。――姉はその後一旦床上げをしたのだけれど、前からの貧血症がだんだんひどくなつて、流産をしてからちやうど三月目の五月の末に、ふとした事で死んでしまつたのである。死ぬ二三日前までは別に不斷と變つた樣子はなくて、ただ折々眼まひがしたり氣が遠くなつたりするだけで、ふらふらしながらも寢るほどではないと云つて起きて居たのに、或る日の夕方、いつも時々するやうに兄に注射して貰ふと、明くる日の朝あたりから急に容體が悪い方へ向いて行つた。それも、まるでコレラにでもかかつたやうに幾度も幾度も激しい下痢をして眞白な牛乳のやうなものを口から吐きつづけて、三日目の晩には危篤と云ふ事になつてしまつたのだつた。いよいよ息を引き取らうとする時には、電報を見て神戸から歸つて來た祿次郎や、前の晩からずつと

看病して居た柳子や、牛込の廣澤の叔母や、姉の實家にあたる麻布の荻原家の親たちや瑞枝などが、兄や芳雄と一緒にぐるりと枕もとを取り圍んで、「姉さん」だの「喜多子」だのとてんでに姉の名を呼びながら、しまひにはみんなが鼻を詰まらせてしくしくと泣いた。女の人たちは子供のやうに聲を上げてまで泣いて、ほんたうにどうかしてもう一遍姉をよみ返らせたいと願つて居るやうだつた。だが、最初に兄が、それから祿次郎、柳子、芳雄と云ふ順序に、其處に居る殘らずの者が末期の水を脣へ濡らしてやつて居る間に、姉の淨い眼の中から魂が遠くの方へだんだん消えるやうに立ち退いて行く樣子が、芳雄にもよく分るやうな風になつて、さうして姉はとうとう死んで行つたのである、眼瞼を閉ぢてやつたり、胸の上へ兩方の掌を組み合はせてやつたりしてから、暫らくの間はみんな一度にがつかりしたやうに遺骸の傍に坐つたまま默つて居た。立ち退いてしまつた魂が、まだそんな遙かな所へは行き切れずに、此の部屋の中にさまようて居るのを恐れてでも居るやうな工合に。

「僕は電報を見てびつくりしちまつたが、どうして斯う急にいけなかつたんでせう。」

その時、祿次郎がふいとそんな事を、隣に居る兄の方へ囁くやうに云つた。

「……急性の腸加多兒を起したんだ。普通の人なら助かるんだが何しろ衰弱して居たもんだか

ら、……」

さう答へた兄の顔つきが芳雄には氣になる事があつたので、こつそりと其の方を窺ふと、兄は――死んだ姉よりも眞青な顔をして居た兄は、芳雄と眼を見合はせたと思つたらどんと衝かれたやうな風に首をちぢめて項垂れてしまつた。芳雄も其の時は顔が眞青だつた。

お通夜や、葬ひや、初七日の法事や、そんな事が引きつづいてある間は元の音樂會の人たちだのいろいろの顔觸が集まつて來て、わりあひに賑かだつたけれど、それが濟んでから後、祿次郎は神戸へ歸つてしまふし、たまに柳子と廣澤の叔母とが佛壇へお線香を上げがてら兄や芳雄を慰めに來る外には、めつたに尋ねてくれる人もないやうになつて、あれほどしげしげとやつて來た瑞枝も、――寂しい時にはああいふ人の花やかな笑ひ聲が何よりも戀しいものだのに、どう云ふ譯かふツつりと姿を見せなかつた。兄は毎日、朝早く起きて染井の墓地へお參りに行つて、そのままずつと銀座の醫院の方へ廻つたが、姉が生きて居る時分には必ず日の暮れには戻つて來たのに、その頃は夜おそくまで歸つて來ない晩が多くなつて、芳雄は一日兄の顔を見ないで暮すことがあつた。芳雄は尋常六年生だつたので午後の二時頃にはいつも學校から戻つて來たけれど、お若と云ふ飯焚きの女とお元と云ふ年寄の女中と二人しか居ない家の中に這入つて居る氣にはなれ

なくて、夕方明りのつく時分まで表に遊んで居るのが常だつた。でも、晝間のうちはさう云ふ風にしていくらか紛れて居たやうなものの、夜になつてからの味氣ない心持ちは、――ほんたうに獨りぼつちの、頼りのない心持ちはどうしていいか分らなかつた。

「坊ちやん、さあもう八時でございますからお休みなさいましよ。夜更かしをしていらつしやると今に兄さんがお歸りになつてお叱りになりますから。」

晩飯を濟ませてからしよざいなさに女中部屋へ來て、女中たちの針仕事をして居る傍でひつくり返つて居たりすると、ぢきにお元はさう云つて少し離れて居る書生部屋の四疊半へ、布團を敷いて蚊帳を釣つてくれるのだつた。柳子が嫁に行つてからは其處へ獨りで寢る習慣になつて居た芳雄は、姉が死んでしまつた今になつてまでさうする事は厭だつたけれど、――成るべくなら二階の兄の部屋へなり女中たちの間へなり一緒に寢かせて貰ひたかつたけれど、獨りで寢るのが恐いと云ふ事を兄に訴へるのが何となく氣鬱せで、兄に對して惡いやうな氣持ちがしたりして、つい其のままに辛抱しなければならなかつた。芳雄は、あの姉が亡くなつた晩の事があつて以來、面と向つては兄の眼の中を見ないやうに努めて居たが、それにも拘はらず兄が自分をどう思つて居るのだかが氣に懸つた。あまり年が違つて居たので昔からさう打ち解けた仲でもなかつたし、

お互ひの氣心はよく分らなかつたが、兄の方でもあの晩の事があつてから妙に芳雄を氣味惡く感じて居るのではないだらうかと云ふ考へが、芳雄の胸の奥深くにあつて、その爲めに、猶更兄と親しめないやうな工合だつた。

「兄が自分を氣味惡く感じて居ると云ふ事、それがほんたうだとすればなぜだらうか。」――芳雄は其の考へを押し詰めて行くと、はッとするやうなものに行きあたらなければならなくなつて芳雄は兄を恐ろしいと思ふよりは、自分を恐ろしい子供だと云ふ風に感じるのだつた。兄を疑ひの眼で見る事はならないと心にきめて居ながら、しかしやつぱり其の考へから逃れる譯には行かなくつて、毎晩毎晩、兄の歸りがおそい折などには殊に、寢床へ這入つてまんじりともせずぢつと其ればかりを思ひ詰める。――姉が亡くなつてから後は電燈をつけて寢るやうにはして居たけれど、葱の蚊帳が釣つてある部屋の中はもやもやと煙るやうに薄ぐらく、一つ所をあまり永く見て居ると見えないものまで見えさうになつて來て、若し姉が幽靈になつて出て來る事があるとすれば、きつと誰よりも自分の所へ出て來るに違ひないと思つて居た芳雄は、それが隨分ありさうな事のやうにも思はれたので、其の爲めに一層神經が昂つて睡られなくなり、何度も何度もてうづに立つたり布團の上へ怯えたやうに起き上つたりするのだつた。兄は、時計が九時を打ち、

十時を打ち、十一時を打つてもまだ歸らない晩が屢々で、どうかすると十二時が鳴つてから餘程過ぎた時分などにお酒に醉つて戻つて來ることがあつた。

或る晩、芳雄が寢床で眼を覺ますと電燈が消えて居て部屋の中は眞暗だつた。今何時だらう？……兄は歸つて來たのか知らん？……ふとさう思ひながら、いつもの四疊半に自分が居ることをたしかめる爲めに、手を伸ばして蚊帳の裾に觸つたり枕もとの障子のありかを搜つたりして、それでもいくらかは安心したやうに頭から夜具を被つてしまつたけれど、いつもなら二三分も待てば直き電燈がつく筈だのに、其の晩はいつ迄立つてもつきさうもなくて容易に寢られなかつた。闇がそんなにも長くつづいて居ると云ふこと、さうして寢ようとすればするほど眼が冴えて來るやうな心持ち――それが芳雄には、電氣の故障のせゐだとばかりは思へないで、其處から何か芳雄の眼に見え耳に聞えて來るものが、今にこつそりと忍び寄るのではないだらうかと云ふやうな豫感がしたが、なぜか其れは其の時は不思議に恐くも何ともなくて、姉がきつと、自分を恐がらせないでくれるのだと云ふやうにも考へられた。姉が其處へ出て來たところで自分を怯えさせたり怨んだりする譯はない。姉は何か、尋ねたいこと、でなければ聞いて貰ひたいことがあるにしても、きつと芳雄だけは生きて居た時分のやうに優しい姿をして情深い言葉をかけてくれる。そ

んな事を思ふと、芳雄は急に懐しくてたまらなくなつて、

「姉さん・・・・」

と、小さな聲で呼んで見たかつた。もしさう云つたら其れに應じて闇の中から、

「芳ちやん・・・・」

と云ふ細く悲しく透き徹る聲が、直ぐと聞えて來さうな心地がした。それに、芳雄の寢て居る四疊半の次ぎの間は、姉が達者で居た時分に彼女の居間としてあつたので、其處には今も鏡臺だの箪笥だのが昔のままに置いてあつたのだから。

芳雄はふいと、自分でも分らない或る怪しい興奮が自分を不斷の臆病な子供とは全く別な自分にさせてしまつたことを感じながら、もしや姉の聲が聞けるかと云ふ戀しさで胸一杯になりながら、それをどうにも制する譯に行かなくなつて、布團を拔け出してふらふらと闇の中を次ぎの間の方へ手さぐりに辿つて行つた。此頃は晝間でもあんまり人が出這入りをしない其の部屋は疊が黴臭く濕氣て居て、べとべとと足の裏へ粘り着くやうなのを、芳雄は夢の中をさまよふのに似た心持ちで氣味惡く踏みしめて、箪笥の置いてある隅の方へ暫くしーんとして彳んだまま暗い眼の前を扉のやうに視詰めて居た。瞳を圍んで居る濃い闇の何處か知らで明るい泡がぼんやりと浮か

んで其處からひらひらしたものが見えさうになつて來るやうな、さうして其れが「あれ」と云ふ間もなく消えてしまつたかのやうな、そんな氣持ちが二三度はしたけれどもただ其れだけに過ぎなかつたので、またべとべとと疊の上を歩いて箪笥の横の方の壁にぴつたりと添ひながら蜘蛛が這ふやうにして行くと、思ひがけなく芳雄の手に觸つたものがあつた。――それは姉の三味線が、今もなほ其處の壁に懸けてあつたのである。芳雄は、其の時は魔がさしたやうになつて、或る恐ろしい經驗を我から味はつて見たく思ふ根強い好奇心から、その絲の一すぢを摘んでびんと鳴らした。ぞうッとして、身の毛が竦つやうになつて、闇の底にふるへて消える餘韻の果てから姉の聲が響いて來るのを想像しながら、ぢつと耳を澄まして居たがそれでもそんなものは聞えて來ない。びん・・・・と、もう一遍彼は鳴らして、さうしてまたぢつと耳を澄まして息を凝らして居ると、眞暗な中にぱうッと明るくなつた所が現れて、今まで見えなかつた障子の桟が眼に映つて來て、外の廊下を出來るだけ忍びやかに歩いて居るらしい足音がみしみしと近寄つて來るのだつた。と、その障子は幽靈が這入つて來でもする時のやうに靜かに明いたが、寢間着を着て片手に手燭を持つた兄が、蠟燭の穂先に顔の眉間のあたりをてらてらと赤く照り返されながら、默つて部屋の閾際に立つた。

その顔は、ちらちらと瞬きをつづけて居る蠟燭の灯の向う側に、燈明に照らされて居るお厨子の奥の佛様のやうに其れだけが一つ闇に浮き出て、高い鼻の影を片方の頰ッぺたへ眞黒くくつきりと落として、物云ふ術を忘れたやうに脣を固く閉ぢたまま凍り付いたやうな凝視を芳雄の上に据ゑて居た。芳雄は簞笥と壁との隅の方へ身をちぢめて、生れたばかりの赤ん坊がするやうにしつかりと握りしめた兩手の拳を頤の下へ入れて、たとへやうのない戰慄に體中を任せながら、――姉の幻を見たにしても恐らくこれほどではあるまいと思はれる凄じい兄の形相を、あの、姉が死んだ晩以來決して見ようとはしなかつたもの、――兄の眼の中を、動物的な恐怖を以て睨み返した。が、兄の眼の中には芳雄のそれに劣らない氣違ひじみた恐怖が充ちて光つて居たかのやうに思はれた。

「芳雄、……お前は其處で何をして居るんだね？」

その聲は、しかし其の眼よりももつと露はな恐怖の爲めに嚴かにわなないて居た。兄はさう云つて芳雄の姿と其の傍にある三味線とを見比べるやうにして、それから斯う、叱ると云ふよりは哀願してでも居るやうな或る奇妙な優しさを帶びた調子になつて、

「え？　何をして居るんだ？　今何かお前はしなかつたか。」

「いいえ。」

と云つて芳雄は何處までもさう云ひ切る心でまだ兄の眼を執念深く睨んで居た。それは反抗的にではなく、恐怖が彼の視線を其處へ釘着けにしてしまつたやうに、――

「何もしない？　ほんたうに何もしなかつたかね？」

兄は、いかにも疑惑に脅やかされた顔つきで重ねてさう云ひながら芳雄を見る、次ぎにはまた恐る恐る三味線の方を見て、それを云はうか云ふまいかと云ふ事を暫らく考へて居る風だつたが、

「お前は今、その三味線をいぢつて居ただらう？　え？　さうだらう。」

と云つて、片手に蠟燭を持ち變へてもつとよく彼の方へ芳雄が見えるやうにした。部屋の中に何本もの線を伸ばして居た物の影が其れと一緒に一時はゆらゆらと入り交つて、やがて又前と違つた形にぢつと落ち着いて、兄の頰ッぺたにあつた眞黒に尖つた鼻の影はもう其處に映らなくなり、顏は今迄よりも平べつたく明るくなつて見えた。でも、いまだにてらてらと赤く照つて居る其の色つや、どんよりと濁つた異樣に潤んで燃えて居る瞳の輝やき、――それが芳雄には、その時やうやう、兄が恐ろしく泥醉して居るのだと云ふ事をありありと發いて見せたのである。

「いいえ、……」

芳雄は、今度は前とは違つた意味の、醉拂つた兄が何か想像もつかない物凄い眞似をしやしないかと云ふやうな怯えを感じながら、ぐつと體中を角立てるやうに引きしめてまた强情に同じ文句を繰り返すのだつた。

「だけどお前は、こんな夜半に此の部屋へ這入つて何をしようとしてたんだね。大分先から此處でごとごとやつて居たやうだつたが、何か夢を見て寢惚けて居たんぢやないのかね？」

「ええ。」

と、口の内で微かに云つて芳雄が頷いたのを、その曖昧な様子を兄はどうも信じられないと云ふやうに、忌ま忌ましいのを堪へて居るらしい顏つきでじろじろと胡散臭く眺めてから、

「よし、よし、そんならもうお休み、そんなところにうろうろしないで。」

と云つて、まだ執拗く追ひかけて睨めて居る芳雄の視線を少し極まり惡さうに避けて、廊下を二階の方へ戻つて行つた。

その晩はそれで濟んでしまつても明くる日になつたら芳雄は改めて叱られるのではあるまいかと思つて居たのに、兄はそれきり幾日立つてもう其の事を云ひ出さうとはしないのだつた。た

だ、それまで裸で懸けてあつた姉の部屋の三味線には、いつの間にか鬱金の切れの袋が被せられたけれど。さうして兄は默つては居ても腹の中では變な子供だと思ふやうになり、あの晩の事をいつまでも疑ひ深くねちねちと考へて居るらしいのが餘所目にも分るやうな氣がして、芳雄はどうしても兄と親しめないやうになつて行くばかりだつた。

「そりやあさうでずけれどね、氣に入つた家と云ふものは容易に見付からないもんですし、そんな事を云つて居たら切りのない話ですから、やつぱり引つ越してしまはうかと思つて居るんです。——」

芳雄がちらとそんな話を聞いたことがあつたのは、それはちやうどあの晩の事件があつてから四五日立つた時分、姉の三十五日の日に廣澤の叔母と柳子とが彌生町の家へ寄つて兄と何か相談をして居る折だつた。

「まあお前さんが其の氣ならさうしたらいいでせう。此の節の若い人はそんな事を何とも思ひはしないだらうけれど、よく佛様は四十九日の間は家の棟を離れないなんて云ふものだし、私なんぞは舊弊な人間だもんだから、成るべくならもう少し待つた方がいいと思つて居るけれど。」

「ほんたうに叔母さんは舊弊よ。」

と、傍から柳子が兄に加勢をして云つた。

「……ここの内も先には狹過ぎたくらゐだつたけれど、今ぢや兄さんと芳ちやんぎりでがらんとしてしまつて、何だか斯う陰氣臭いやうな氣がしますわ。ここに居ると兄さんだつていつ迄も姉さんのことをお忘れになることが出來ないでせうから、いつそもつと陽氣な所へお引つ越しになつた方がよござんすわ。」

叔母もそれには強ひて反對もしなかつた樣子で、とうとうそれに話がきまつたのだつたらう。

――間もなく一家は慌しい兄の云ひ附けで小石川の原町の方へ引き移つて行つた。その家は南向きの高臺にある新築の借家で、彌生町の家より部屋の數はずつと少なかつたが、眼のさめるやうに明るい晴れ晴れとした間取りの住居だつた。今までは始終姉の幻に追ひかけられて居るやうだつたけれど、それからは芳雄も救ひ出されたやうになつて、夜も安心して眠ることが出來た。あの姉の三味線だの琴だの鏡臺だのは、引つ越す時に兄がそれらをどう云ふ風にしてしまつたのだか、新しい家のどの部屋にももう置いてはないのだつた。

みんな、――兄と芳雄との外には誰も、――此の二人の兄弟の仲が新らしい住居に移つてから後も次第に鬱陶しく餘所餘所しくなつて行くのを、氣が付いて居る者はないらしかつた。それは

あまりに年齡の違つて居る兄がまだ尋常科の生徒で居る弟に構つて居られないのは當り前の事だつたし、姉の生きて居る時分からさうだつたのだから、それを當り前でなく考へるのは何か自分の僻みであるやうに時々芳雄自身にも思はれる。――けれど、さう思ふ下からいつの間にか僻みが根を張つて來て、心の奥でぢいッと兄のする事を視詰めて居るやうな氣になつたりした。

その頃になつて、或る日、それまでは久しく顏を見せなかつた瑞枝が、ちやうど芳雄が學校から歸つて來た時にふいと尋ねて來てくれたことがあつた。

「まあ、ほんたうに御無沙汰をしてしまつて濟みませんでしたわね。一度お伺ひしようと思つて居たんですけれど、忙がしかつたもんですからついつい無精をしてしまつて、――」

と、いつものりんりんとしたよく響く聲で馴れ馴れしさうに云つて、芳雄を抱きかかへるやうにして懷かしさうに頰擦りをしたり頭を撫でたりしながら、

「芳ちやん、あなたどうなすつて？　姉さんがいらつしやらないで寂しかないこと？　あたしきつと芳ちやんが毎日寂しがつて居るだらうと思つて居ましたわ。」

と、しんみりした調子で云ふのだつた。芳雄はさうされると直ぐほろほろと涙が湧いて來る眼の中へ、うつむいて自分を覗き込んで居る瑞枝の房々した前髪のほつれ毛が薄暗く蔽ひ被さるやう

に垂れかかるのを惱ましく覺えながら、何と答へていいか分らずに、その眞黑な大きな庇髪の中にある彼女の顏を、悲しさのあまり顫へ着きでもしたいやうな眼つきで見上げて居るばかりだつた。

「あら、あたし惡かつたわね、折角芳ちやんが忘れて居たのに、姉さんの事を思ひ出させたりなんかして。ほんたうに濟まなかつたわね。御免なさいね。」

さう云つたけれど、瑞枝の美しい眼の球も櫻ん坊のやうに薄紅く光つて來て、つやつやと涙に濡れて來る眞實な樣子が、とてもそれを疑ふことは出來ないやうに力强く芳雄の胸に迫るのだつた。

「兄さんは此の頃どんな御樣子？　いつも何時ごろにお歸りになつて？」

「何時ごろですか。…僕は早く寢ちまふからよく知らない。」

「あら、ぢや兄さんはそんなにお歸りがお遲いの？」

瑞枝は驚いて眼を睜つて、

「さう？　そしてどんな御樣子？」

と、さもさも其れが心配な事らしく繰り返し尋ねた。

「兄さんは何だかいつも默つて居て、僕と話なんかする事はないの。」

氣むづかしく眉根を寄せて恨めしさうに芳雄が云ふのを、瑞枝はにこにこ笑ひながら見守つて居たが、急に眼もとを擽つたさうに細くしてからかふやうな言葉つきで、

「ぢや芳ちやんは兄さんが恐いのね？　え？　さうぢやないこと？」

さう云つて、そんな時にはよく昔さうしたやうに、芳雄の兩手を摑まへて其れを柔かい彼女の掌の中へ揉むやうにした。

「恐いことはないけれど、…でも時々兄さんはお酒に醉つて歸つて來ることがあるんだもの。」

「まあ！　お酒に醉つて？　惡い兄さんだこと！　だけどね、兄さんは姉さんがお亡くなりになつたんで寂しくつて溜らないもんだから、それで氣晴らしにお酒をお飲みになるんだわ。きつとさうに違ひなくつてよ。芳ちやんには分らないかも知れないけれど、…」

瑞枝の、長い睫毛の生え揃つた眼瞼が、凸面鏡のやうに圓くむつくりと飛び出て居る黑眼がちの瞳の上を忙しなくぱたぱたと瞬いて過ぎたと思ふと、その度毎に其處からまた少しづつ涙が粘膜のやうに光つて濕り出して來て、それを怪しげに見上げて居る芳雄の額を撫でながら彼女は情深い調子で敎へ諭すが如くに云つた。

「兄さんはね、あんなに姉さんを可愛がつていらしつたんですから、いつ迄もいつ迄も忘れることが出來ないでほんたうに力を落していらつしやるのよ。だから芳ちやんも兄さんを氣の毒だと思つて上げなければ惡くつてよ。ね、分つたでせう？……あんな事があれば誰だつてぼんやりしてしまふのは當り前だわ。あんな、姉さんのやうないい人はなかつたんですもの。……」

さう云ひかけて直ぐ氣が付いて涙を拂ひ落しながら、

「あ、またこんな事を云ひ出して惡かつたこと！　堪忍して頂戴よ。もう止しませうね。さうして何か唱歌でも歌ひませうね、此れから私きつとちよいちよいお伺して芳ちやんと一緒に遊びますわ。だからもう寂しがらないでも大丈夫よ。ね、きつと來るわ。」

などと云つて、佛壇へお線香を上げたりして、其日は芳雄の部屋で一時間ほど話をしてから歸つて行つたが、それからほんたうに折々尋ねて來てくれるやうになつた。瑞枝はしかし大抵午後の二時か三時ごろにやつて來て、芳雄をつれて活動寫眞を見に行つたり、本郷通りを散歩して少年雜誌を買つてくれたりして、兄には會はずに歸つて行くと云ふ風だつた。

「芳ちやん、又この頃に兄さんにさう云つて音樂會を開かうぢやありませんか。――さあ、あたしがいい唱歌を教へて上げるから一緒に歌つて見ない？」

そんなことを云つて、いつの間にか昔の快活な彼女に復つて元氣よく歌をうたふ瑞枝、――その生き生きとした色づやのいい頰の肉を眺めながら、彼女と仲よく遊ぶと云ふことは亡くなつた姉に惡いやうな心地はしたけれど、でもいろいろ親切にしてくれて優しい言葉で慰められたりすることは、芳雄に取つて滿更嬉しくないのではなかつた。それに、瑞枝とさうして睦まじく遊んで居たら、いつかは兄も自分を優しくしてくれるのだらうかと思はれたので、――

神戸の祿次郎から折々芳雄に繪葉書を送つて來ることがあつた。

「此れは楠木正成を祭つた湊川神社の寫眞です。僕は二三日前ここへ遊びに行きました。東京では誰も變りはありませんか。僕は十二月にお土產を持つて行きますから樂しみに待つておいでなさい。さうしてよく勉强をしなければいけません。兄さんは姉さんがなくなつてから寂しがつておいでですから、みんなで慰めて上げるやうに賴みます。」

などと書いてあるのを讀むと、芳雄はいつも返辭をするのに困るやうな氣持ちだつた。

「祿次兄さん、たびたびお葉書を有り難うございます。今度の家は新しくつていい家です。十二月には樂しみにして居ますからどうかきつと歸つて來て下さい。さうして一しよにお正月を迎へませう。うちの兄さんは寂しがつていらつしやるやうです。僕は慰めて上げたいと思ひますが、

子供ですからどうしていいか分りません。」

けれども芳雄は、なぜか瑞枝が來ることは一度も書いてやらなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ついぞ兄の笑ひ顏を見たことのなかつた芳雄が久し振りでそれを見たのは、明くる年の正月に、神戸から歸つて來た祿次郎や柳子や瑞枝などが集まつて、みんなで百人一首をした折の事、それも兄は成るたけ芳雄には其の笑顏を見られないやうにして外の人たちとばかり強ひて浮き浮きと話合つて居るかのやうに、――氣のせゐか芳雄には思はれたのである。柳子や瑞枝が、何かの時に芳雄をおもちやにしてからかつたりしてどつと賑やかな笑ひ聲が一座を搖がすことがあると、そんな場合には兄も仕方なく笑つてくれたけれど、それがいかにもわざとのやうで却つて氣の毒な氣がして來て、芳雄も兄の居る前ではさうでない時ほど元氣にはなれなかつた。

「まあ、芳ちやんは此の頃どうかしてるんぢやないの、先にはそんなでもなかつたのに厭にひねこびた兒になつたねえ。」

と、柳子がそれを不思議がるくらゐに、芳雄はだんだん無邪氣なところのなくなつた、遠慮深

い、疑ぐり深い子供に變つて行くやうになつて居た。

或る時、――それはもう正月も過ぎて祿次郎が神戸へ歸つてしまつてから、一と月か二た月も立つて芳雄が直き其の四月には中學へ這入らうとした時分、――日曜の日に柳子がわざわざ迎ひに來て、「子供のくせにさういぢけてばかり居ないで、ちつと私の方へでも遊びに來たらいいぢやないか。」と、氣が進まないでもぢもぢして居る芳雄を無理に引き立てるやうにして、澁谷の宮本の家へ誘つて行つたことがあつた。姉が達者で居た頃に一二度つれられて訪ねた覺えがあるきりで其の後は久し振だつたから、行つて見ると宮本の兄や母親などが珍らしさうに「芳ちやん、芳ちやん」ともてなしてくれるのが嬉しかつたし、其處には柳子の義理の妹や弟たち、――芳雄とは三つ違ひの姉だの一つ違ひの兄だのいくつか年下の弟や妹が大勢居たので、原町の家よりはずつと廣い其の家の座敷で芳雄は其の子供たちと一日賑やかに騷いで暮した。日あたりのいい緣側にはハムモックが釣つてあつて、それへみんなして代る代る乘つて傍から搖す振つて貰つたり、兄がいろいろの鳥を好くので飼つてあると云ふ鸚鵡やカナリヤをからかつたり、ベエビー・オルガンを鳴らしたり、庭へ出て藤棚の下の池に居る鷺鳥の泳ぐのを眺めたり、それは近頃の芳雄にはめつたに味はれない夢のやうに愉快な一日だつたが、だんだん日が暮れて來ると、

ふと自分だけが此の賑やかな兄弟たちの仲間に別れてあの寂しい原町の家へ獨り歸らなければならないことを思ひ出して、何だか急に悲しいやうな心地になり、出來るならいつ迄も此の家の子にして置いて貰ひたく、さうして自分も此處に居る幼い兒たちと同じやうに年上の兒を「姉さん」だの「兄さん」だのと呼ぶことが出來たらどんなに幸福だらうかとさへ思ふのだつた。

「芳ちやん、それぢや又遊びにいらつしやいな。もう暗くなつたから誰かに送らせて上げようか。」

「いいえ……僕獨りでも歸れます。」

さう云つて柳子の顏を見上げた時は、芳雄はしみじみと遣る瀨ない氣持ちになつて、而白かつた一日がこんな心細い事になるなら一層始めから來ない方がよかつたと、それが今更恨めしくなつたくらゐだつた。――でも、それから日曜になると矢張り時々招かれて遊びにも行つたし、さうでない日には瑞枝が尋ねて來てくれたりするので、その人たちの親切で一としきりよりはいくらか氣が紛れて居られることもあつた。

お茶の水の附屬中學へ這入つてから間もなくの日曜日に、芳雄は學校の制服を着て、それを見せたさに澁谷へ行つたことがあつたが、其の日は生憎子供たちは兄につれられてお花見に行つた

とかで內には母親と柳子だけしか居なかつたので、姉の部屋の緣側にうづくまりながら庭に咲いて居る連翹の花をぼんやり視詰めて居ると、

「芳ちやん、今日はほんたうにお氣の毒をしたことね。その代り姉ちやんがたんと御馳走して上げるからゆつくり遊んで行くといいわ。」

さう云ひながら柳子が其處へやつて來て柱に凭れたまま同じやうに庭先の黃色な花を眺めて居た。が、暫らくして、ふいと、

「芳ちやん……」

と云ひかけて、何か面白い事があるらしく急ににこにこと笑ひ出して、芳雄の眼の中を判じるやうな顏つきで覗き込むのだつた。

「芳ちやんはね、此の頃でもやつぱり原町の內が寂しいと思つて居て？」

「ええ、」

芳雄には不意にそんな問をかけられた譯が分らなかつたので、不思議さうに彼女の笑顏を見返して居ると、柳子は一層にこにこと眼元に皺を寄せながら、

「それぢや芳ちやんは大分此處の內が氣に入つたやうだから、若し內の子になれと云つたらなる

だらうか？」

——それは勿論冗談に違ひないと思つたけれど、ふだんからそんな事を夢のやうに考へて居た折なので、芳雄ははッと圖星を刺されたやうな工合でにやにやと極まりの悪い笑ひ方をしながら默つて居たが、若しさうなつたら嬉しいと思ふ心持ちが自然と顏に表はれるのをどうにもする事が出來なかつた。

「今云つたことは冗談だけれどね。…」

さう云つて、柳子はほんの一時の戯れが案外強く芳雄の心を動かしたのを看て取つて、氣の毒なことをしたと云ふ風に少し慌てたらしい樣子で打ち消してから、

「でもね芳ちやん、此處の內の子になるよりか芳ちやんはもつともつと嬉しい事が近いうちにあるかも知れないのよ。」

と、ふざけて居るやうな言葉のうちにも今度は多少眞面目らしい調子を含めて云ふのだつた。

「うれしい事つて、なあに姉さん」

「近いうちにね、お前の內にも新しい姉さんが出來るんだよ。芳ちやんはまだそんな話を聞かなかつたかも知れないが、兄さんがまたお嫁さんをお貰ひになるの。」

「お嫁さんを？」

さう云つた芳雄の聲の中にある微かな戰慄には心付かずに、柳子は其れがどんなに樂しい出來事ででもあるかのやうに、歡びに輝く瞳を子供のやうに無邪氣にぱつちりと睜いて云つた。

「ああ、——そのお嫁さんと云ふのはね、しかもお前のよく知つてゐる人よ、お前がほんたうに大好きな人、——誰だか中てて見なくつて？」

「僕の知つてる人だつて…、」

芳雄はその時に、柳子の氣輕なのに對して自分の心の奧に湧いて來る祕密な恐れを見破られまいとする苦しさを感じながら、もう大凡は分つて居るその人の名を云はうか云ふまいかに就いてちよいとの間迷はなければならなかつた。もし其の人の名を云つて中つた時、どうして分つたのかと次第次第に問ひ詰められるやうな事だつたら、——それは何でもない筈のことだけれど、——芳雄は其の問に平氣では答へられない譯があつて、それを柳子に訝しまれるやうな場合がないとは限らない。けれどもまたあまり明かな事柄なのを空惚けた爲めに却つて疑ぐられるやうな心配もないではないので、斯う、急にぱつたり行き詰まつたやうな工合になつて默つて居ると、——若し其の時間がいつ迄も續いたら芳雄はしまひには顫へ出したかも知れなかつたのに、好い鹽

梅に柳子は程よく言葉を繋いだ。

「芳ちやんの大好きな人でよく知つて居る人だと云つたら、もう大概は分つただらう？——兄さんはね、今度あの瑞枝さんをお嫁さんにお貰ひになるのよ。」

「瑞枝さんて、——麻布の姉さんのこと？」

芳雄は、何處か遠いところを視詰めながら、わざとそんなことは何の意味もなく獨り語のやうに云つた。

「ああさうよ。麻布の姉さんがもう直きお前の姉さんにおなりになるの。ねえいいだらう？　知らない人が來るよりか瑞枝さんなら兄さんにも芳ちやんにもどんなに仕合せだか知れやしないし、さうなればお前の内だつて又きつと賑やかになつて、兄さんの氣持ちもお直りになるだらうから、もうほんたうに寂しいことなんかありやしないわ。」

それを知らせてやつたらば飛び着くやうにして喜ぶだらうと豫期して居たらしい柳子に對しては、芳雄は是非さうして見せなければならなかつたし、瑞枝を姉に持つことだつてもただそれだけならば隨分うれしいやうな氣がしたので、

「そりやほんたうなの？　姉さん。」

と、聲に元氣を出して云つて、異様にどきどきと胸が慟悸を打ち出したのを感じて居ると、その慟悸は嬉しいためなのか其れとも外の理由のためなのかやがて分らなくなつて來て、今、自分が瑞枝の來ることを喜んだ瞬間に、亡くなつた姉の眼に見えぬ姿が、——悲しく恨めしく訴へるやうな其の人の細い聲音が、ちらと自分の傍を通り過ぎはしなかつたかと云ふ風な恐怖に襲はれて、顔の色が直ぐと青白く總毛立つて來るのを隠し切れなくなつて行つた。

「どうしたの芳ちやん？」

「どうもしやしないんです。……」

さう云つたけれど、護摩かしてしまふ事はとても出來なくなつて、

「……麻布の姉さんが來てくれるのは嬉しいには嬉しいけれど、先の姉さんのことを想ひ出したら何だか急に悲しくなつたもんだから、……」

「まあ、お前は厭な兒だつたらないね。くよくよとそんな事ばかり考へて居て、まるで女みたいね。ちつとも男の兒らしいところはありやしない！」

柳子は惘れて眼を圓くしながら、どうして此の兒は斯うまでひねくれた性分なのだかと云ふやうに、いぶかしさうに芳雄の様子を眼瞬きもせず見守るのだつたが、さうされればされるほど芳

雄は頑固に口を噤んで眼に涙を溜めてうつむいてしまつたまま、病人らしく痩せた指の先で新しい制服の上衣のボタンをしよざいなささうに神經質にいぢくつて居た。

兄が瑞枝と結婚する。――それは大人の柳子までがそれほど無邪氣に喜んで居ることだのに、自分はなぜ子供の癖にそれをしつッこい疑惑の眼を以て見なければならないのだらうか？　芳雄は其の譯を此れ迄にまだ一遍も奥の奥まで突き詰めて考へたことはなかつたが、今に瑞枝が兄の後妻になりはしないかと云ふ想像は、あの先の姉が或る不思議な慌しい死に方、――少くとも芳雄にはさう思はれたところの死に方をした時から、ぼんやりと彼の頭の中に描かれて居て、それが彼の心に霧のやうに淡い暗い影を落して居た。芳雄は時々自分だけがそんな邪推をしてゐることを考へると、兄に對しても瑞枝に對しても濟まないやうな氣持ちがして、自分はまだ歳が行かないせゐでそんな根も葉もない妄想を氣に病むのだと云ふ風に思つて見て、どうかするともう其の事をひよいと忘れかけて居る折もあるくらゐだつたのに、それが今になつて見ればやはり自分の想像がだんだんと事實になつて來て居るのだつた。――

自分は柳子姉さんがいろいろ心配をしてくれるにも拘はらず斯うして次第に疑ぐり深く片意地になつて行く。兄を疑ひ、亡くなつた姉の死に方を疑ひ、自分にあんなに優しくしてくれる麻布

の姉さんまで疑つて、しまひには自分で自分の心さへも疑ふやうになつて來て、それを誰にも云ふことが出來ずに、みんなからは子供らしくない子供だと思はれて今に可愛がられなくなつてしまふ。上の兄さんばかりでなくみんなが自分を嫌がるやうになつてしまつたら、自分はほんたうに獨りぼつちになる。さうしたら死んだ姉さんが自分を蔭ながら守つてくれるだらうか知ら？……」

そんなことを胸のうちに繰り返して思ひ煩ひながら、芳雄はまだ眼に涙を浮べて、柳子が傍に居るのを忘れてでもしまつたやうにしよんぼりと連翹の花を眺めた。

五月になつて、先の姉の一週忌があつて、その時にまた神戸から出て來た祿次郎が居るうちに、上の兄はいよいよ瑞枝と結婚することになつて法事が濟んでから五六日すると日比谷の大神宮で式を擧げた。芳雄は今までは「麻布の姉さん」と呼んで居たその人を、急に「姉さん」とは呼びにくいやうな氣がして居たけれど、祿次郎や柳子までがもう結婚の明くる日から瑞枝を「姉さん、姉さん」と云つて大事にするのでそれほど極まりが惡くなく自分もさう呼ぶことが出來た瑞枝は柳子よりも三つ歳下で其の時は二十一だつたのに、前には友達のやうにして居た人たちからさう呼ばれても別段羞かしがるやうな樣子はなく、それをすつかり覺悟してでもゐたやうにお

轉婆なところもあまり見せないでしつとりと落ち着いた品のいい姉になつて居た。それを芳雄が殊にさう感じたのは、兄と「姉」とが箱根へ新婚旅行をするので中央停車場から立つ時に、みんなしてそれを送つて行つた晩のことである。

「芳ちやん、直きに歸つて來ますから寂しがらないで待つていらつしやいよ。たんとお土産を買つて來て上げますから、――さうしてね、今夜はもう遲いんですから歸つたら直ぐに寢なければいけませんよ。」

新しい姉は、汽車の窓から首を出して、プラットフォームに立つてゐる芳雄を見て嫌のいい顏をしながら何となくさう云つたのだつたけれども、いつもは束髮に結つてゐるのに其の晩は圓髷だつたせゐか別の人のやうに面變りがしてずつと老けてしまつたやうに見えて、そんな言葉にいかにも、姉らしい品格が備はつて聞えるのだつた。

「それぢや御機嫌よう。……いづれまたそのうちに。」

と、その直ぐ次の列車で神戸へ歸ることになつてゐた祿次郎が、彼女の窓の下へ來てさう云つて帽子を取つた。

「祿ちやんもほんたうに御機嫌よう。今度またいつ東京へいらつしやるの？」

「さうですね、まあ今年の暮でせうかね。――どうです、箱根もあまり平凡だからいつそ後の汽車で僕と一緒に神戸まで行つたら？」

「それも面白いでせうね、神戸でなくつても京都から奈良の方へお廻りになるとようございますわ。」

と、柳子も傍でそんなことを云ふのだつた。

「……でも何でせう、僕なんぞが一緒ぢやあいけないでせう。」

祿次郎は、内を出る時から少し醉つてゐたので、低い聲で姉の耳へ囁くやうな風に云ふと、

「知らなくつてよ。」

と云つて、姉は俄に顏を赧くしてうろたへた樣子だつたが、それは初ひ初ひしく妙にはにかんだ風情だつたので、芳雄は男のやうに活潑だつた其の人のそんなところを見ることは始めてで不思議なやうな心地がした。

「うちの兄貴も新しいラヴが出來たんだから兎に角まあ仕合はせさ、此れでちつとは元氣になるだらう。」

――兄の夫婦が立つてしまつてから神戸行きの列車の出るのを待ちながらプラットフォームを

三十分ほど散歩して居る間に、祿次郎はそれを柳子と語り合つてゐた。

「ほんたうね。あれでいつまでも先のことばかり考へて居られちや今度の姉さんが可哀さうだわ。……」

柳子はさう云つて、暫く默つてゐて、又ぽつりと思ひ出した事があるやうに云ひ足した。

「でもね、瑞枝さんだつて仕合はせでないことはないわ。兄さんのやうに奥さんを大事にする人はないんだから。」

「つまり兄貴の其處に惚れ込んだんだらうね。」

と云つて、祿次郎は上を向いて大きな聲で笑つた。

* * * * * * *

新しい姉は箱根へ行つて居る間にも始終繪葉書を送つてくれたし、旅行から歸つて來てからは先の姉だつてもこれ程ではなかつたと思はれるくらゐ親切にしてくれて、兄と二人暮しで居た時分には誰もそんなに氣を附けてくれなかつた小遣ひのことや着物のことや食べ物のことや、何かにつけて細かく面倒を見てくれて、芳雄の方から甘えてねだつたりする折があると其れを一度で

も承知してくれないことはないのだつた。兄も結婚をしてから後は一と晩でも遲く歸つて來るやうなことはなくて、大概は四時か五時ごろに戻つて來て、姉が芳雄と遊んだりなどしてゐると、

「瑞枝さん、……」

と云つて、――先の姉は「喜多子」と呼び捨てにされて居たのに、さん附けにして彼女を呼んだ。

「はあい」

姉はさう云つて、

「芳ちやん、それぢや又あとでね。」

と愛想よく云ひながらいそいそと立つて、兄と一緒に二階の居間へ上つて行つて、長い間其處に二人きりで睦まじく話合つて居ると云ふ風だつた。兄は暇さへあればいつでも影のやうに姉の身に添つて居て、ちよいとでもお互に離れたくはないやうな樣子だつたので、隨分仲のいい夫婦だと云ふことは芳雄の子供心にも眼にあまるやうに感じられる折があつて、先の奥さまの時分にはどんなに仲がよくつてもこれほどではなかつたのにと、女中たちまでがさう云つて蔭口をきくくらゐだつた。

芳雄は、それほど姉を可愛がつて居る兄の心の内では、自分のやうな疑ぐり深い弟のあるこ

とをどんなにか邪魔にしても居るだらうと云ふ風に氣を廻してゐて、姉があんまり自分をちやほやしてくれることを兄に對して濟まないやうに感じて居たが、兄はそれを別段不愉快には思つて居ないで、此の頃はだんだん芳雄とも親しくすることを望んで居ると云ふ樣子で、それを芳雄に分つて貰ひたいやうに手振りに出して見せるのだつた。夕方から夫婦が散歩に出かけようとする折などに、姉が、

「芳ちやん、あなたも一緒に來なくつて？」

と、そんなことを云つたりすると、

「芳雄お前一緒に來たらどうだね、お前が來れば淺草へ行つて活動寫眞を見てもいいが、……」

さう云つて、兄はいくらか餘所餘所しいところを隱し切れずに、それでも何となくにこにこ笑つて見せたりした。

三人で表を歩く時には姉が二人の間に這入つて居て、彼女の兩側を行く兄と弟とは成るべく直接には言葉を交さずに、姉を通じて話をすると云ふ風にしながら少しづつ親しみを感じ合はうとするやうに見えた。

「芳ちやん、あなた何か欲しい本があるんぢやなかつたの。あるなら兄さんに買つてお頂きなさいな。」

などと云つて、姉の方からそんな機會を作つてくれるので、

「何だね、欲しい本と云ふのは？　買つてやるからさう云ふがいい。」

と、兄もわりあひに不自然でなく愛情のある言葉を云ふことが出來るのだつた。

そんな時に芳雄は自分でも齒痒いやうな不思議な氣後れを感じながら、兄を失望させるのは惡いと思ふ心づかひから出來るだけは嬉しさうな樣子をして兄の顏を見上げたりすることはあつたが、それでもあの兄の眼の中を長く長く視て居ると、その眼の奥に情愛を裏切るやうなものが光つて居るやうな心地がして、兄の方でもはつとそれに氣が付いたやうな工合になつて、二人が慌ててうつむいてしまふ場合があつた。兄は、どうかして自分の眼の中にさう云ふものの現はれるのを防ぎたい、芳雄にいくら見守られても平氣で居られるやうになりたいと思つて其れを始終心がけて居るらしかつたが、いつも其れほど大膽にはなれないで眼と眼を見合はせさへすれば直きにそうッと横を向いて、口もとではやはり機嫌よく笑ひながらそ知らぬ風を裝つて居るやうにして居た。

姉は、――兄から其れを云ひ附かつて居たのかどうかは分らないけれど、――兄が非常に芳雄

のことを思つて居て、學校の成績だの體の工合だのを心配したり、どんな物が好きだとか嫌ひだとか云ふやうなことまでも氣にかけていつでも姉に尋ねたりするくらゐだと云つて、それを恩に着なければ惡いと云ふ調子で芳雄に話した。

「兄さんはね、ああ云ふ口數の少ない方ですから芳ちやんには何とも仰しやらないけれど、それはほんたうに始終なのよ、だから芳ちやんが他人らしく遠慮なんかしたりすると却つてお氣持ちを惡くなさるわ。芳雄の爲めになることならどんなことでもしてやるからつて、兄さんはいつもさう仰つしやつていらつしやるの。――」

さう云ふとき、芳雄は何とも答へずに上眼を使つて姉の顏をまじまじと讀むやうにするのが癖だつた。彼女の顏にはただ美しく眩い笑ひが花やかに輝いて居るばかりで、其處からはいかなる祕密をも搜り出すことは出來なかつたけれど、……

かうして、兄とはうはべだけは以前よりもずつと親しくなつて居て、或る所までは兩方から近づいて行つて其處へ來てぱつたり行き詰つたまま動けなくなつて居るやうなちぐはぐな心持ち、――それは芳雄には以前の關係とさう變らない氣がねと重苦しさとを覺えさせるに過ぎなかつた。それを何處までも何處までも追ひ詰めて考へて行くと、今まではぼうッと遠くに霞んで居た

或る物がだんだんはつきりした形で芳雄の心に映つて來るやうになつて、芳雄が次第に頑是ない子供ではなくなつて來るに隨つて、月日と共にそれが根も葉もない想像から實際の世界の方へじりじりと歩み寄つて來る、或る物の影、――ちやうど眞暗な夜路などを歩いて居る時に向うの間からお化けのやうなものが近づいて來るのを、あれはお化けではない、人間だ人間だと思つて居るうちにずうッと傍へやつて來るのを見るとやつぱり恐ろしいお化けだつたりするやうな薄氣味の惡い物の影――が、とうとう芳雄に追ひ着いて來てそれを成るたけ見ないやうに見ないやうにとすればするほど見ずには居られないやうな氣分に誘はれて行くのだつた。さうして其の誘惑は兄が自分にわざとらしい親切を盡してくれればくれるだけ餘計に强くなつて行くやうに芳雄には感じられる。――兄が自分に親切を盡す。以前には年の行かない弟に對してあんなに冷淡だつた兄が、此の頃になつて俄に情合を持ち始めていろいろとやさしくしてくれる。それは、芳雄の成長して來たことに或る恐れを抱くやうになつて、敵意を持たれてはならないと思ふ弱味を感じ出したのではないだらうか？

「お前はもう中學生だしそろそろ分別がついて來たのだから、あの時分に已と瑞枝とが何をして居たのかと云ふことは、だんだんお前にもよく分るやうになつて來たかも知れない。しかし此れ

からは已もお前を子供だと思つて馬鹿にしない代りにお前の方でもよく物事を考へて、詰まらないことを思つたりしやべつたりしないやうにして貰ひたい。」

――芳雄は、兄のさう云つて居る心の聲を聞くやうな思ひがした。

先の姉が達者で居た時分、芳雄が十だつた歳の暮れに銀座の醫院の二階の部屋で見た今の姉と兄との樣子、――その時の二人の體のこなしだの驚いた顏つき、――姉は襟をひろげて居たので兄に診察をして貰つて居るやうに見せはしたものの、その部屋は診察室ではなかつたし、今になつて考へればそれがどう云ふことだつたかはもう疑ひの餘地はない。兄も姉もそれに就いて別に口止めはしなかつたけれど、兄は内々其の時から芳雄と云ふ者のあることが氣にかかるやうになつて居て、あの先の姉の亡くなつた晩に芳雄が妙な顏をしたのでそれからほんたうに彼を疎んずるやうになつたのではないだらうかと、さう云ふ風に芳雄には推量されるのだつた。芳雄はしかし、兄と今の姉とが二人ぎりで人に見られては惡いやうにして居るところを、その後一年も立つてからも小石川の植物園で見たことがあつて、兄は其の頃ひどく陰鬱なむつつりした人間になつて居たのを、ちやうど先の姉が病氣で寢て居た時分だつたのでその心配の爲めだらうと云ふやうに多くの人は思つて居たが、芳雄には其の時から兄を陰險な人だと思ふ心持ちが湧いたのだつ

た。さうして間もなく先の姉のあの突然な怪しい死に方、――それを祿次郎に尋ねられた折の眞青になつた兄の表情、――姉の病氣は兄がいつでも診察をして居て、死ぬ前の日に注射をしたのも兄だつたと云ふやうなこと、……さう云ふやうに一つ一つ三四年前からの出來事を想ひ浮べて細かく根掘り葉掘りして行くにつれて、芳雄の頭に根ざして居た疑ひが或る纏まつたものになつて恐ろしい形に見えて來るのを、兄もうすうす感づいて居て其れを默つて置く事が出來なくなつて居るのではないか知らん？

兄は、自分の過去の罪が芳雄の心に或る證據を殘して居て、それが芳雄の大きくなるのと共に育つて來るのを薄氣味惡く感じて居る。――自分が瑞枝と一緒になつて先の妻をうまく欺して居たことや、芳雄を除いた兄弟たちの眼までも巧みに晦まして先の妻を愛して居たと云ふ風に見せかけて居たことや、――それ等の事情が現在の芳雄の智慧で次第に見透かされるやうになつて來てゐるのを、兄の方でも今では明かに知つて居るに違ひない。けれども兄の犯した罪がただそれだけに過ぎないのならば、芳雄は兄からこんなにまで餘所餘所しく疎んぜられはしなかつたらうと云ふやうに考へられる。いつぞや姉が亡くなつてから間もなくの晩に、夜半に電燈が消えて眞暗になつた時、芳雄がふと眼を覺まして姉戀ひしの心からふらふらと妙な氣になつて彼女の部屋

に迷つて行つた折のこと、闇の中で三味線の絲に觸れて其れを鳴らしたと思つたら、兄がいつの間にか手燭を持つてうしろの廊下に立つて居た――その時の兄の顏つき、それはお酒に醉つて居たせゐでもあらうけれど、どんよりと濁つて、或る物の影を一直線に睨んで居るやうに動かなくなつて居た瞳の樣子、其處には幽靈をでも見たやうな怯えた色がありありと露はれて居たのを、芳雄は今でも其の通りに想ひ出すことが出來るほどまざまざと覺えて居るのである。兄はあの時、亡くなつた姉の部屋の中でひとりでに三味線の音がしたと思つて、恐ろしさに堪へられずに降りて來たのではなかつたらうか。さうして事に依つたら兄の耳には三味線の音ばかりでなく其の外の聲までも聞え、その瞳には見えない筈の幻までが見えたのではなからうか。兄が其の頃毎晩のやうにお酒に醉つて歸つて來たことも、それから程なく彌生町の家を引き拂つてあの三味線を何處かへ隱してしまつたことも、兄の胸の奥に良心の苛責があつて、犯した罪を忘れよう忘れようと悶えて居たのだと云ふやうに取れるのだつた。

そんな事を芳雄がいつもくよくよとしつくどく考へてばかり居たと云ふのは、それは幼い時分から病身な子供だつたのが中學へ這入つてからも、よく風を引いて寢て居ることが多かつたし、十三の歲の冬から十四の春へかけての頃は、氣管支加答兒だのインフルエンザだので一週間も二

週間もつづけて床に就いて居たので、さういふ折に自然とそれを考へさせられるやうになつたのだつた。夕方、熱が四十度近くもあるやうな時などに、芳雄は若しひよつとしてそれを譫言に云つたりして、傍に看病して居てくれる姉に聞かれはしなかつたかと云ふ心配の爲めに、すやすやと眠りかかつたと思ふ頃に急に「あッ」と云つて叫ぶやうな口つきをして眼をぱつちりと睜いたり枕もとをきよろきよろと見廻しながら體中に冷汗を掻いてふるへて居たりすることがあつた。

「芳ちやん、……どうかしたの？　恐い夢でも見たんぢやなくつて？」

さう云つて姉に尋ねられる場合があると、芳雄は「恐い夢を見た」と云ふだけでも姉に知れては惡い樣に感じられて、

「いいえ、何でもないんです。」

と、さう云ひながら、眞青になつた顏の色を姉に見付けられないやうに氷囊の下に隱して、又すやすやと寢入るやうな風を裝はねばならなかつた。

しかし芳雄は、實際には屢々恐い夢を見た。夢の中に出て來る兄はいつも大概はほんたうの兄と變りなく心配さうにふさぎ込んで居て、芳雄とただ二人ぎりで何處か分らない寂しい暗い通り路をすたすたと歩いて行くのである。

「芳雄……」

と、兄は其の路を歩いて行く最中に、胸に重苦しい蟠りがあつてそれをどうしても云はずには居られなくなつたやうに突然聲をかけるのだつた。

「芳雄、己はお前が己を疑つて居ることを知つて居る。もう隠すには及ばない、己はよく知つて居るのだから、……」

さう云つてから、又長いこと黙つてすたすたと歩いて行つた時分に、

「……己はお前がなぜ己を疑ぐつて居るのだといふ譯も知つて居る。先の姉さんが死んだ時に、あの晩に己はお前に顔を見られて眞青になつたことがあつた。さうしてお前はあの時から己を疑ぐるやうになつたのだ。ねえさうだらう、さうに違ひない。……」

さう云はれて芳雄は兄の顔色を窺ふと、背の高い兄は上の方から芳雄の姿を見おろしてにやにやと笑つて居るのだつた。

「お前は己があの時あんな眞青な顔をしたので、己が姉さんを殺したのぢやないかといふ風に思つたのだらう。だけれど己は姉さんを殺した爲めに眞青な顔をしたのぢやない。己が眞青になつたのは、お前がきつと己を疑ぐつて居るだらうと思つて其れが恐かつたからなんだ。己は成る程

お前に疑ぐられるだけのことはして居る。己はあの時分先の姉さんが死んでくれればいいと思つて居た。だからお前が疑ぐるのは無理もないのだが、お前に疑ぐられて居ると思ふと己は薄氣味が悪くなつてそれで眞青な顔をしたのだ。」

さう兄がぶつぶつ口の中で獨り語のやうに云ふ。……

「兄さん、どうか堪忍して下さい。僕が兄さんを疑ぐつたのは惡うございました。先の姉さんは殺されたのにしろさうでなかつたにしろもう死んでしまつたんですから、僕は今更そんなことを穿鑿しようとは思ひません。僕は兄さんを罪人にさせたつて何にも愉快なことはありません、ですからどうか兄さんも安心して下さい。」

「お前はそれがよくないんだよ。お前は兄さんに安心をしろと云ひながら、心の内ではまだ兄さんを疑ぐつて居る。兄さんは決して先の姉さんを殺した譯ぢやないんだから、それを信じてくれなけりやいけない。先の姉さんはあの通り腸加答兒で死んだんぢやないか。」

そんなことを云つて兄は夢の中でしきりと芳雄に言ひ譯をする。芳雄は心のうちで、自分はまだ子供だし大人のすることは大人になつて見なければ分らないのだから、自分が今まで兄を疑ぐつて居たのは濟まなかつたといふやうに考へさせられて來て兄を慰めてやる氣になつたり、また

或る時には子供だからといつて大人のすることに欺されはしないといふつもりで、兄を何處までも問ひ詰めてやつたりするのだつた。問ひ詰められると兄はだんだんあの三味線を鳴らした晩の時のやうな凄まじい眼つきになつて、氣を失つて倒れさうな工合になつてよろよろとよろけながら、

「芳雄、もう其の事はいつてくれるな。後生だから堪忍してくれ。己が姉さんを殺したのは惡かつた。」

と、一生懸命に賴むやうな口調で繰り返し繰り返しさういふので、眼がさめてから後までも、其の言葉は芳雄の耳に附いて居ることがあつた。

芳雄が一番恐れたのは、かういふ風にして毎日そんな夢ばかり見て居るうちに、今に亡くなつた姉が出て來て自分がどういふ方法で殺されたかといふやうな話をこまごまと說明して聞かせたりしやしないかと云ふこと、――さうして眼が覺めてからだんだんと事實を調べ上げて見ると夢の話にぴつたり合つて居たりするやうなことだつた。芳雄はそれでなくてさへ自分が此の頃のやうに始終病氣になつて寢てばかりゐて、明け暮れいやな夢を見るやうな境遇に置かれたのも、みんな亡くなつた姉がさせて居るのだといふ風に考へて來て、兄の罪が世間へ露顯しないうちはいつ

までも斯うして祟られるのではないだらうかと思つたりするのだつた。

「芳ちやんや、姉さんはほんたうに兄さんに殺されたんですよ。それを知つて居るのはお前だけなのに、どうして芳ちやんは默つて居るの？　お前はまあ、あたしが生きてゐる時分にはあんなに可愛がつてやつたのに、何といふ薄情な子なんだらう。……」

と、姉はいつでも草葉の蔭からそんな泣き言を云つて居る。――さうして芳雄が彼女の味方につくまでは何處までも何處までも芳雄にいやな夢を見させる。――

「今の姉さんがいくらお前の看病をしてくれても、あたしのいふことを聞かないうちはお前の病氣は直る筈はない。今の姉さんは親切らしくして居るけれど、それはお前を味方につけたい爲めにああして猫を被つて居るので、心の內は鬼のやうな人なんだ。……」

しまひにはさういつてあのものやさしい今の姉をまでも呪ふ言葉が聞えて來る。――

ほんたうに今の姉さんはそんな陰險な人なのだらうか。先の姉さんがああいふ不思議な死に方をしたのは、それは兄さんばかりの知つたことではなく、今の姉さんもその相談にあづかつてゐたのだらうか。兄さんは自分の犯した罪の爲めに始終良心の責め苦を受けてゐるらしくも見えるけれど、姉さんの方はそんな樣子が少しも見えないところから思へば、やつぱり姉さんは兄

さんの罪を知らずに結婚したのだらうか。——だけれど又、今の姉さんがほんたうに鬼のやうな心を持つてゐる人だとしたら、兄の罪を知りながらも平氣で結婚してああいふ風に猫を被つてやさしい顔つきをしてゐないとは限らない。——芳雄はさう思ひながら、枕もとに坐つてゐる姉の姿をつくづく眺めてゐると、さうして此の人が兄と一緒に先の姉を欺したのだといふ風に考へて來ると、いつもは自分を我が子のやうにいたはつてくれる情愛の深い彼女の眼つき、雪のやうに白くほつそりしたしとやかな襟つき、先の姉よりはずつと優れて美しい器量の顏だちが、兄に比べても幾層倍か物凄い悪魔のやうに其處に現はれて來るのだつた。

「姉さん・僕はもう此の頃では親切にして下さる姉さんまで疑ふやうになりました。姉さんはあのことを御存じないのではないでせうか。さうして兄さんに頼まれて僕の様子を探るために傍に着いていらつしやるのではないでせうか。」

若しそんなことをむきつけにでもいつて尋ねでもしたら、愛嬌のある姉の面持ちが見る間に鬼のやうに恐らしく變つて來るのではないだらうかと、芳雄はそれをただ氣味が悪いとばかり思ふのではなく、お伽噺を讀んででもゐるやうな物好きな心持ちで空想したりすることもあつた。

毎日毎日高い熱がつづいてぢつとして寢て居ながら直きにうつとりと遠い所へ持つて行かれさ

うな氣分になるやうなことがよくあつて、ひよつとするともう死ぬのではないだらうかと思つて居たのに、三月の初旬ごろから漸う芳雄は學校へ出られるやうになつたのだつた。あんまり長く休んでゐたから成績がいい筈はなかつたけれど、四月には兎に角及第することが出來てそれから暫らくの間は珍らしくつづけて學校へ通つてゐたのに、其年の五月に先の姉の三回忌があつて一週間ばかり立つた或る日に、夕方から急にまた熱が出て來て、血を澤山喀いたことがあつた。いい塩梅に四五日すると熱が七度臺に下つて少しづつ直つては來るやうだつたが、兄が學校を休んで成るべく靜かにして居なければならないといふので、さうしてゐると、やつぱり先の姉の祟といふやうなことが思ひ出され、そればかりでなくまた別のいろいろな恐ろしい想像が頭に湧いて來るのだつた。自分がこんなにちよい病氣に罹つたりするのは、兄がいつでも診察をして藥を飲ましてくれるからではあるまいかといふやうなこと、先の姉をさうしたのと同じ方法で兄は芳雄をもさうしようとしてゐるのではあるまいかといふやうなこと、それはいつから芳雄の胸にそんな考へが起つたのだつたかは分らないが、その疑ひは亡くなつた姉の祟だと思ふことよりも遙かに事實らしく芳雄の神經を脅かさずには推かなかつた。先の姉もやつぱり斯ういふやうな工合に半年も一年も前からじりじりと煩らつて行つて、貧血を直す爲めだと云つて兄が時々注射

をしてくれるのを其の通りにされてゐると或る日俄に容體が變つて死んだのだつた。芳雄はまだ注射をされたことはなく病氣の姉のとは違つて居る樣だけれども。兄がいつ藥の中へさう云ふ仕掛けをしなかつたものでもない。兄さんではいやだから外のお醫者に見せてくれろなどといへば其れはもう兄に向つて其の罪を發くのも同じことだし、そんなにしてまた此の上も兄から疎まれるやうになるのも恐ろしかつたし、もしかうしてゐて死ぬやうなことがあるならそれも運命だといふ風に芳雄はあきらめて見るのだつたが、いよいよ死ななければならないやうな時が來たやうだつたら自分は兄さんの爲めを思つて何もいはずに大人しく死んで上げるのですといふ意味を一と言兄の耳へ入れたいといふやうにも考へるのだつた。

……或る日芳雄はこんな夢を見た。……

彌生町の先の家のうしろのところが高い崖になつてゐて、其處を降りられる樣に出來てゐる、細い急な坂路の足場の惡いでこぼこな石だらけな段々を降りて行くと、東京の町の中とは思はれないやうに草がぼうぼうと繁つてすすきなどの一面に生えてゐるのが風になびいてさやさやと鳴つたりしてゐる、うら淋しい、ちよいとした廣い原ッ場の窪地があつた。其處へ或る雨の降る晩に、――それは六月の半ば時分のことだつたから、鬱陶しい梅雨の時節の雨でしよぼしよ糠ぼ

のやうに細かくしめやかに降るのだつた、――芳雄は何を考へたのか小石川の家を抜け出して獨りで傘もささないでちやうど眼に見えぬ幽靈にでもおびき寄せられて行くやうにぼんやりと歩いて行つた。自分はまだ病氣がよくならない。それだのに斯うして寢間着のままでゞんなお天氣に表へ出たりしてきつと後で惡くはないかとは思つたが、その細かな雨に濡れるともなく顏が濡れて汗のやうにぬらぬらしてゐるのを手の甲で氣味惡くべつとりと拭き取りながら引き返す譯には行かないやうな氣持ちになつて歩くのだつた。彌生町の家のうしろ――彼處には死んだ姉さんの魂が迷つてゐる。彼處に行けばきつと姉さんに會へるのだ。姉さんは自分に何か話たい譯があつて自分をあの原ッ場へ呼び寄せるのに違ひない。――芳雄は歩いてゐる途中で、自分にはそんな考へがあるので斯うやつて内を抜け出して來たのだらうといふ風に思つた。

今は知らない人が住んでゐる先の家の門の前へ出て、塀の外から庭の椎の木の向うに部屋の庇が見えてゐるのを「ああ彼處に今でも彼の部屋があるんだな。幼い時分に死んだ姉さんとよく話をしたり音樂會を開いたりしたあの部屋が今でもちやんと彼處にあるんだな。」と芳雄は胸の中でさう獨り語をいひながら構への外側を裏口の方へ廻つて崖の緣へ出て、すすきが着物の裾へからまるほども生え茂つて人が笑ふやうな工合にゆらゆらと搖れて動いて居る坂路のだんだんを降り

て、何だか遠い山奥へでも來たやうに其の晩は特にさう思はれた原ッ場のまん中まで辿つて行つて、もう十分か二十分待つと姉さんに會へるんだと、堅い約束をして置いたつもりで其れを信じながら立つてゐると、兄が後から、

「芳雄」

といつて呼ぶのだつた。

跡をつけられたんだなと思つて芳雄は兄を振り返つて見てさう驚かずにゐたので、其れが兄には物凄かつたやうに二三歩たぢたぢとなつてから、

「芳雄、お前は體が惡いのに何だつて今時分こんなところをうろついてゐるんだね。」

さういつて、成るたけ芳雄に疑ぐり深い眼で見ることを止して貰ひたさうに機嫌を取るやうな笑顔を作つて、

「さあ、こんなことをしてゐて又病氣が惡くなると大變ぢやないか。ね、兄さんと一緒にもう歸らう。さうしておくれ。それでないと兄さんは心配で困るんだよ。」

「僕は今ぢき歸りますから、どうか兄さんは一と足お先へいらしつて、——」

芳雄は其の時に自分の聲には死んだ姉の幽靈が乘り移つてゐて、何となくいふ言葉のうちにでも兄には身の毛が竦つやうに聞えるものが潜まれてゐはしないかといふ風におぼろげに感じながらいつたのだつたが、それがやつぱり其の通りだつたと見えて、兄はその言葉を聞くとひとしく鬪ひを挑まれた獸のやうな眼つきになつて、暫らくの間默つて芳雄を睨まへてゐた。

「兄さんに先へ歸れといふならそりや歸つてもいいけれど、……」

と、兄は程へてから考へ考へ物をいふらしいおづおづした口調でいつて、あんまり恐らしい態度を取るのは損だと云ふことに氣が付いた風で、それから少しやさしい低い聲になつて、

「しかしお前はこんなところに獨りで立つてゐてどうしようといふのかね。何かそれには譯があるのだらう。え？　その譯を兄さんに云つてお聞かせ。」

「別に譯なんて云ふほどのことはないんですから、どうかそれを聞かないで下さい。兄さんにそんなことを云はれると僕は悲しくなるんです。」

さういつた芳雄の心は、兄さんの罪は僕にはよく分つてゐる、だがそれを兄さんの前で云はせられるのは辛いから赦してくれろといふのだつた。

「お前がその譯をいふのがいやなら兄さんが云つて見よう。……」

と、兄が云つた。

「・・・兄さんは今迄お前にその譯を聞くのが恐かつた。だけど斯うしていつまでもいつまでも其の譯を聞かずに放つて置くと、己とお前との仲がだんだん氣まづくなつて兄弟の間に妙な隔たりが出來るやうになる。それではお互によくないと思ふから今夜兄さんの方から其の話をして見よう。――お前が今日ひとりでこんなところへやつて來たのは、此處へ來れば先の姉さんに會へると思つたからぢやないのかね。」

「兄さん、――どうかもう止して下さい。――僕は恐くなつて來ましたから。」

「いいや何も恐がるには及ばない。恐いことがあると思ふのはそれはお前が間違つてゐるんだよ。お前は先の姉さんが幽靈になつてまだ此の世に迷つてゐると考へてゐるやうだけれど、先の姉さんは此の世に思ひが殘る樣な死に方をしたんぢやないんだから、決してそんなことがある筈はありやしない。兄さんはそれをお前によく話して置きたいと思つてゐる。」

「でも、兄さんがいくらさう仰しやつても僕の心の奥にある疑ひは消すことが出來ませんから、――」

と、芳雄はさう口へ出していつたのではなく、ただ胸の中で考へただけだつたが、其れが聞えたやうに直ぐと答へるのだつた。

「それぢやお前はどうしても其れを疑ふと云ふのだね。あの死に方の何處に怪しいところがあるといふのだね。お前の心に疑念があるならどうぞ正直に云つておくれ。それを云つてくれさへすれば己はお前にわかるやうにくはしく説明して上げるから。ね、お互ひにさういふやうにして胸の中を打ち明けてしまふ方が却つて勘違ひをするやうなことがなくなつていいんだよ。さあ、芳雄、遠慮しないで何處がをかしいと思ふのかそれを云つておくれ。先の姉さんが腸加答兒で死んだのではないとお前が思ふ譯は？」

「ああ。」と、芳雄は其の時さう心の奥で叫んだ。――先づ姉さんが自分を今夜此の原ッ場へ呼び寄せたのは、かうして此處へやつて來た兄をつかまへて自分に姉さんの代りになつて其の罪を問ひただしてくれろと云ふのではないのか知ら？　それともまた自分が此れ迄疑ぐつて居たことはみんな根も葉もない妄想に過ぎないので、そんなつまらない勘違ひのないために兄弟の仲が割れてゐるのを姉さんは心配して下すつて、自分と兄とを和解させようとして此處へ落ち合はせたのでもあらうか。どつちにしても自分には姉が附いてゐてくれるといふ氣がしたので、

「兄さん、――そんなことを疑ぐつては濟みませんけれど、僕が不思議に思ふのは姉さんが死ぬ前の日に兄さんが注射をなすつたことなんです。あれから姉さんの容體が急に惡くなつたんですも

の。」

と、さういふと、兄は口で笑ひながらぎよつとしたやうに瞳を光らせて、斯う、暗い夜の中にゐる芳雄の姿をずうッと奥深く見究めるやうにして立つてゐた。

「……あの注射が何でをかしいことがあるんだね、注射をしたのはあの時が始めてだつた譯ではなし、あれは貧血の病人を直すのに普通のお醫者は誰でもさうする事なんだからちつとも不思議はないんだよ。成るほどあのあとで直きに死んだには違ひないけれど、それは先もいつた通り急性の腸加答兒を起したんで何も注射をしたからといふ譯ぢやない。……」

「いいえ、姉さんは腸加答兒ではないんです。あれはあの注射をした藥の中に這入つて居た砒素の中毒だつたんです。」

いつかはさういはういはうと思つてゐたことをとうとう云つてやつた、といふやうな小氣味のいい氣持ちと、兄がそれを聞かされた場合に何か尋常では濟まないことが持ち上りはしないかと云ふ豫感とで、芳雄は眼の前がごちやごちやと見えなくなつて來るやうな混亂した心になりながら其れを投げ出すやうにいつた。

「砒素の中毒？」

といつて兄はもう其の時に氣絶をしさうな工合になつて、

「お前はそんなことを誰から聞いた。――そりやあの中には砒素が這入つてゐたには違ひない。だけども砒素といふものは貧血の藥なんだからそれを使つたつて別に怪しいことはないんだよ。」

「でも、人を殺さうと思つて砒素をわざと澤山使へば殺すことも出來るといふ話を僕は藥局の書生に聞いたことがあるんです。そしてそれで死ぬ人は、ちやうど姉さんのやうに下痢を起して眞白な牛乳のやうなものをもどすんだつて云ふぢやありませんか。」

芳雄は、その一言の爲めに兄が不意に鐵砲の玉か何かで額を射抜かれでもしたやうな形をして仰向けに反つて倒れてしまひはしないだらうかと思つてゐたのに、兄はそれをぐつと堪へてやり過してしまつたやうな樣子で、

「ふん、さうか。……」

と云つて、俄に肩をゆすぶつてせせら笑ふのだつた。

「お前が其處まで知つてゐるなら兄さんももう何もいふまい。しかしお前だつて兄さんを罪人にしたくはないだらうから、まさかそんな事を誰にもいひはしないだらうね。それを祕密にして置いてくれれば兄さんは此れからお前をいくらでも可愛がつて上げる。ねえ、その方がお前の爲め

にもどんなに得だか知れないぢやないか。さうしてほんたうに兄弟仲よく暮すやうにしようぢやないか。」

「ええ、僕もさういふ風になりたいと思つてゐるんです。――ただ兄さんが心の底から後悔して下すつて先の姉さんに詫まつてさへ下されば。」

「そりや後悔してゐるとも。兄さんは毎朝毎朝佛壇へお線香を上げる度毎にいつでも死んだ姉さんにお詫びをいつてゐるんだよ。」

「それぢやほんたうに後悔していらつしやるんですね。」

芳雄は胸が晴れ晴れしてうれしかつたのでさう云ひながら兄の體へ飛び着きさうにしたとたんに、――兄は自分を欺してゐる。かうして油斷させておいて此の寂しい原ッ場の中で自分を殺さうとたくらんでゐる。――と、そんな考へが外から囁く人があつたやうにふいと湧き上つて來て、その心で兄の顏色を窺ふと、其れを悟られてはならないとして居るやうに兄は一と入機嫌よく笑つて見せて、

「ああさうだとも、ほんたうに兄さんは惡いことをした。その爲めにお前にもそんな心配をかけたりなんかして濟まなかつたね。だがもう此れで分つたんだからお互ひに仲好くしようぢやないか。さうしてね、こんなところにいつ迄もぐづぐづしてゐるとお前の體にも觸るしるからさつさと内へ歸らうぢやないか。ね、分つたらうね。――さあ、兄さんが手を曳いて上げるから此方へおいで。」

兄が芳雄を殺さうとしてゐる證據には、原町の家へ歸るのには反對の方角なる以前の崖縁のだんだんのある足場の惡い坂道の方へ、兄はさう云つて甘やかすやうに誘ひながらそのくせ手には力を入れて芳雄の手首をしつかりと握りしめて歩いて行くのだつた。だが、いよいよさうに違ひないと芳雄に思はれたのは、だんだんの上り口へ來た時に眞つ暗の中で「おほほ」と笑ふ聲が聞えて坂道の上の方に今の姉が二人の上つて來るのを待つてゐるのだつた。

「芳ちやん、あなたは兄さんと仲直りをなすつたんですつてね。ほんたうにいい塩梅でしたこと。あたし心配だつたもんだからお迎ひにやつて來たんですの。――そこは足場がわるうござんすから轉ばないやうに氣を付けてね。」

姉がそんなことを云つてゐるうちに、兄は芳雄を先へ立てて自分は後から上つて來たがそれはいざといふ場合にどつちへも逃げられないやうに芳雄を自分たち夫婦の間へ挾んで歩かせる積りであるらしく、さうして此の坂を登りつめるまでのうちに後から危害を加へようとする計略なの

だと芳雄はさう感づいてしまつたので、ああもう自分の命も此處で終るのか、先の姉さんは自分を守つてくれないのか、もうとても仕様がない、と、考へてゐる間にもでこぼこの石のある路は一と足一と足にちぢまつて行つて、いまだにしよばしよぼと降つて居る糠雨にびつしよりと濕つた着物の裾が脛へべとべとと粘つこく絡みついて、それでなくてさへ歩きにくいのだからいざといふ時にはとても逃げることは出來ないのだと觀念しながら、今殺されるか、ほら、もうやられるかと、眼を潰つて歩いてゐると、路ばたの露に濡れたすすきの葉が折々ひやりと襟を撫でるのにも「あッ」と云ひさうになつて生きてゐる空はなく、もう一と足で坂の頂邊まで登り詰めるところまで來た時に、

「あなたもう此處で坂がおしまひになるんですよ。」

と、上から姉がさう云つて兄に合圖するのだつた。芳雄は急に足が疎んで恐ろしさで一杯になつてしまつて、今迄の覺悟も何も忘れたやうになつて、

「あッ、姉さん助けて下さい！　僕は殺されるのはいやです！」

と、一生懸命にさう叫んだ拍子に、夢を見てゐるんだと氣が付いて、でもまだ眼をあくことが出來ずにゐると、自分はやつぱり熱が高くつて起きも上れずに布團の上に寢てゐることや、頭の

方が壓さへつけられるやうに重くなつて居ることや、「芳ちやん、姉さんは此處にゐるんですよ。」といひながら姉がしきりに自分を搖り起してくれてゐることやが次第にはつきりと分つて來て、ぱッと救はれたやうな心地で眼を開いた。

「芳ちやん、何うなさつてゐたの？」

姉のその聲がかかると芳雄は電燈のあかりを眩しさうに避けてぱちぱちと二三度眼瞬きをしてから、

「ええ？」

と、わざと驚いたやうにいつて、極まりが悪かつたので、枕もとの電燈を背にして坐つてゐる姉の頭の大きな暗い影の中へ自分の顏を入れながら、とうとうその人に譫言を聞かれてしまつたと思ふその人の樣子を謎を讀むやうな工合に恐々と見上げると、姉は別に氣に留めてゐるらしい風はなくにつこりして、

「どうしたの芳ちやん、あんなにうなされて、何を夢に見てゐたの？」

と、――その顏は明りの蔭にありながら花やかな笑ひの爲めに、顏の後ろにある心の祕密がとても外からは覗けないやうにぎらぎらとかがやきながら、――いふのだつた。芳雄はほッとして、

未だにどぎどぎと體中へ響く動悸が鳴つてゐる胸の上へ手を當ててゐたが、姉から餘りしみじみと注視されるのがいやだつたので其れを避けようとして右を下に横向きになるやうに寢返りを打つと、枕にぴつたりと附けてゐる片方の耳から動悸が前よりも一層強く傳はつて、腦髓が槌を打ち込まれつつある地面のやうにがんがんと響いて痺れて來たので、ぢーいッと我慢しながら眉間の方へずり落ちさうになつて居る氷嚢の下から布團の外に平べつたく海のやうにひろがつた壘の目を越して、部屋の衝きあたりの唐紙の方へ視線をやつたとき、――其處に、ゆかたを着て腕を組んで體をコチコチに堅くさせて坐つたまま、狙ひを附けるやうな眼つきで此方を睨んでゐる兄がゐた。と、芳雄は自分がもう死んでしまつたのぢやないかと云ふ風に思つたのだつた。なぜかなら其の折の兄の顏色がちやうど先の姉の死骸を見た時のあの晩のそれと少しも違はないくらゐに眞青だつたから。――さうして其の瞳は猫のそれのやうに眞白くなつて動かずにゐたから。

「芳雄」

と、兄はやがて呪ひから解かれたやうな風つきで、兩腕をだらりと肩から垂らしてしまつた後、落ち着いた聲でさう云ひながら蓐の傍へ擦り寄つて來て、

「どうだね工合は？」

と云つて、又腕を組んで下腹をぐつと落すやうな鹽梅に深く息をついてから何か次ぎに云はうとすることを考へてゐるらしくも見えた。……

「どうだね、工合は？……」

さうもう一遍云つた時にたつた今夢の中で會つた通りの底氣味の惡い無理に押し出したやうな薄笑ひが兄の口もとに浮き出して、それが木へでも彫つたもののやうに微動だもせずに兩頰に凍り着いてゐたが、ふいと見ると、芳雄がそれまで氣が付かなかつた兄の右手の指の間には、小さくぴかぴか光る注射の針が持たれてゐて、それが手と一緒に細かく顫へて蜘蛛が天井から絲を引きながら吊る下つて來るやうに芳雄の顏の上に垂れ懸つてゐるのだつた。

「芳雄、今夜は一つ注射をして見よう。……さうしたら多分よくなるかも知れないから、……」

それを聞くと、芳雄は血がぞうッと頭の方へ上つて來て、かッかッと火照つた火の氣のやうに熱いものが皮膚の上にゆらめいて燃えて通つたあとで、今度は反對に氷の如く冷たい感じがひたひたと手足へ一面に寄せて來るのを覺えながら、自分でも意外だつたほどの敵意を含んだ恐ろしい眼つきをして、

「兄さん、御免なさい、僕は注射なんぞされるのはいやです。」

と、一生懸命な調子で云つて憎々しく兄の顔を睨み返した。

「なぜだい？　なぜいやなんだい？」

兄は凄じく怒つてやらうとしても顔の筋がお面のやうに硬張つてしまつたかの如くに依然としてその頬には例の薄笑ひを刻みつけたまま瞳だけを落ち窪ませてぎろりと殺氣立てて光らせながら、皺嗄れた、陰氣に重々しく響く聲で云つたが、その聲の下から芳雄は一層反抗的な氣分になつてまだうなされて居るやうな工合に物狂はしく身悶えしながら云ふのだつた。

「兄さん、後生だから止して下さい。僕は死ぬのはいやですから、……」

それからちよいとの間、あたりはしーんとした靜かさで、その時やつと兄の頬にある笑ひの線がびくびくと動き出すらしい樣子が見えて、馬鹿げて大きくぱつちりと開かれた瞳の坐つた眼の中から、何か氣違ひじみた稲妻がぴよいと飛び出したやうだつたが、突然、

「馬鹿！」

と云つて、兄は猛惡な相になつて芳雄を怒鳴りつけたと思ふと、その反動で自分自身が氣を失つてしまつたやうに見る見るうちに脣を土氣色にして、注射の針を指の股からぱたんと落して仰向になつた。——

＊　＊　＊
＊　＊
＊

その明くる日から一と月ばかりの間は兄は芳雄の病室には姿を見せないで、姉や看護婦に云ひつけて藥を飲ませるやうにするだけだつた。でも、七月の月はなになつて、芳雄の衰弱がだんだん目に見えて加はつて來るのを捨てて置く譯にも行かないのでそれから又をりをり診察してくれたけれど、用の外は殆んど口もきかないで默つて脈を見たり熱を測つたりして直ぐに病室を出て行くのだつた。姉も兄からさうしろと云はれてゐるのかどうか以前ほどには親切にしてくれないでただ時々お役目のやうに附いて居たが、夕方兄が醫院から戻つて來た後には殊にさうして芳雄の傍にばかり居るのは兄に對しても惡いと云ふ風に考へて居るらしかつた。

兄は、姉が芳雄の部屋に行くのを實際いやがつて居る樣子で、少しの間でも彼女が見えなかつたりすると病室の外の廊下に來て、

「瑞枝さん」

と、いくらか急かちな調子で襖の向うから呼ぶのだつた。さうして内に居さへすれば姉の跡ばかり追ひ廻して居て、彼女を可愛がる度は芳雄を疎んずるにつれて日增しに激しくなつて來るらし

く、御飯をたべるのにもお湯へ這入るのにも、何から何まで一緒でなければ承知が出來ないと云ふ風になつて行つた。

長らくじめじめと降りつづいた梅雨がもう二三日で明けると云ふ頃のこと、――それは蒸し暑い靜かな晩で、芳雄の病室には兄の夫婦や神戸から電報で呼ばれた祿次郎や宮本の柳子や廣澤の叔母などが多勢集まつては居たけれどひつそりと水を打つたやうになつて居て、芳雄はただ自分の額の上に載つてゐる氷囊の中の氷のぢとぢとと溶けて行く微かな音を、遠く遙かな物の響きにでも耳を傾けつつあるやうな心地で聞いて居るのであつた。芳雄にはその氷の溶けるのと同じやうに自分の命がもう終りに瀕して居る危篤な狀態にあるのだと分つてゐても、それが今では悲しくも恐ろしくもなくて、自分は僅か十四の歳で死ななければならないことや、此れと云ふ面白い思ひもせずに人を疑ぐつてばかりゐて苦しい氣持ちを味はひ通した短い一生の間のことや、そんないろいろな不運を考へ合はせても、もつと生きたいと云ふ氣にはならないで、成る程死ぬときには人間は斯う云ふ工合にだんだんとあきらめが附いて來て、樂に此の世を立ち去ることが出來るのだなと云ふ風に感ぜられた。

「芳ちやん、お前ね、まだ何んでもないんだからね、決して力を落すには及ばないんですよ。……」

柳子がさう云つて傍近くへ寄ると、芳雄は却つて彼女の言葉を憐れむやうに笑ひながら、

「ええ有り難う。だけど姉さん、死ぬなんてちつとも苦しくも何ともないんですから、そんな心配して下さらないやうに。」

と云つて、それから直ぐに笑ふのを止めて蠟のやうに白い色をした顏に淨く嚴かな表情を浮かべて、今死なうとして居る自分だけにしか分らない或る貴い神聖な物をぢつと視詰めるやうな眼つきで、やや長い間瞳を大きく朗らかに睜いて居た。――それは其處に居る總べての人が誰しも其の神聖な物が芳雄にだけはつきりと見えてゐることを疑ふ譯には行かないやうな、さうして其の人たちも其の時の彼の瞳を通してそれを堅く信じるやうになるくらゐな神々しさの充ち溢れて居る眼つきを以て。――

「芳ちやん、ほんたうに大丈夫なんですから氣をたしかにしていらつしやいよ。氣さへたしかにして居ればきつと直るつて、兄さんも仰つしやつていらつしやるんですから。」

姉が慰めるやうにさう云ふと、彼女に並んで坐つて居た兄も恐る恐る言葉を添へた。

「芳雄、氣をしつかりするがいいぞ、まだ大丈夫なんだから。」

さう云つたとき、芳雄の眼はやはり以前の神々しさを一杯に湛へたままで徐ろに兄の方へ向いた。――ちやうど芳雄の視詰めようとして居る貴い神聖な物が其の兄の顏の奥にでもあるかのやうに。兄はその威に打たれたかの如くはツとして下を向いて、いまだにまだ心の祕密を讀まれまいとするやうだつたが、芳雄はその氣の毒な空しい努力を嘲けるよりも兄をそんなに氣の毒にさせた自分の今迄の狹い心が淺ましくなつて、先の姉の死ぬ時にはきつと現在の自分のやうに凡べての人を許してやつただらうと思ふと、ああほんたうに兄には濟まなかつたんだと云ふ感情がむらむらと湧き上つて來て、

「兄さん、兄さん。」

と、痩せた手頸を伸べて兄を呼んだ。

「兄さん、今迄は僕が惡うございました。僕は兄さんの仕合せを祈つて居ます。どうか此れからいつ迄も姉さんを可愛がつて上げて下さい。さうして仲よくお暮しなすつて下さい。」

「ああ有り難うよ。」

と、さう云ふ兄と姉との聲が、今は眼を閉ぢてうつらうつらと眠るやうになつて行く芳雄の耳に聞えた。芳雄は、先の姉が嘗て通つて行つた煩らひのない安らかな道を自分も今通りつつあるのだと云ふ心地がして、今度こそはほんたうに憧れてゐた彼女の靈にもう直き其處で會へるのだと固く固くそれを信じた。・・・・

人面疽

歌川百合枝は、自分が主人公となつて活躍して居る神祕劇の、或る物凄い不思議なフイルムが近ごろ、新宿や澁谷のあまり有名でない常設館に上場されて、東京の場末をぐるぐる廻つて居ると云ふ噂を、此の間から二三度耳にした。それは何でも、彼女がまだアメリカに居た時分、ロス・アンジエルスのグロオブ會社の專屬俳優として、いろいろの役を勤めて居た頃の、寫眞劇の一つであるらしかつた。見て來た人の話に依ると、寫眞の終りに地球のマアクが附いて居て、登場人物には日本人の外に、數名の白人が交つて居る。日本語の標題は「執念」と云ふのだが、英語の方では「人間の顏を持つた腫物」の意味になつて居る。五卷の長尺で、非常に藝術的な、幽鬱にして怪奇を極めた逸品であると云ふ評判であつた。

勿論、百合枝のアメリカで寫したフイルムが、日本の活動寫眞館に現はれたのは、今度が始めてではないのである。彼女が歸朝する以前にも、グロオブ會社から輸入された五六種の映畫の中に、をりを彼女の姿が見えて、歐米の女優の間に伍してもをさを劣らない、たつぷりとした滑らかな肢體と、西洋風の嬌態に東洋風の淸楚を加味した美貌とが、早くから同胞の活動通に注

意されて居た。寫眞の面に出て來る彼女は、日本の婦人には珍らしい活潑で、可なり冒險的撮影にも笑つて從事するだけの、膽力と身輕とを備へて居るらしく、女賊とか毒婦とか女探偵とか、妖麗な、さうして敏捷な動作を要する役に扮するのが、最も得意のやうであつた。殊に、いつぞや淺草の敷島館に上場された、「武士の娘」と題する一篇などは、キクコと呼ばれる日本の少女が、某國の軍事上の祕密を探るべく間諜となつて東亞の大陸を股にかけ、藝者だの貴婦人だの曲馬師だのに扮裝すると云ふ筋で、女主人公のキクコを勤める百合子の花々しい技藝は、一時公園の觀客を沸騰させたものであつた。彼女が去年、東京の日東活動寫眞會社の招聘を受けて、前例のない高給を以て抱へると云ふ條件の下に、四五年ぶりでアメリカから戻つて來たのも、あの寫眞が內地人に多大の人氣を博した結果なのである。

しかし百合枝には、「人間の顏を持つた腫物」などと云ふ戲曲を、嘗て一度も演じた覺えがないやうに感ぜられた。その寫眞を見たと云ふ人から、劇の內容や一々の場面に就いて、精しい說明を聞かされても、彼女は自分が、いつそんなものを揭影したのか、全く想ひ浮べる事が出來なかつた。仕組まれて居る事件の發端は、或る曖い、厚重の繪のやうになまめかしい、南國の海に面した日本の港の、——多分長崎か何處かであらう。——入江に沿うた街道の遊廓に住む、菖蒲太

夫と云ふ華魁の話から始まつて居る。町中で第一の美女と歌はれて居る華魁が、夕暮になると何處ともなく聞えて來る尺八の音に誘はれて、灣内の景色を望む青樓の三階に、龍宮の乙女のやうなあでやかな姿を見せながら、欄干に凭たれて恍惚と耳を傾ける。尺八の主は、とうから彼女に戀ひ憧れて居る賤しい穢い、青年の乞食なのである。せめて男と生れた效には、一夜なりとも彼の華魁の情を受けて、心置きなく此の世を去りたい。——さう云ふ願ひを、人知れず胸の奥に祕めて居る青年は、自分の貧しい境涯を喞ち、醜い器量を恥ぢる餘り、いつもたそがれの闇に紛れては、海岸の波止場の蔭にさまよひでて、一竿の笛を便りに、よそながら華魁の顏を垣間見るのを樂しんで居る。此の哀れな乞食の外にも、彼女に魂を奪はれる者は多勢あるが、遂に一人も彼女から眞に熱情を報いられた客はない。それもその筈、彼女は去年の春の末に、此の港に碇泊したアメリカの商船の船員と、假りの契りを結んでから、明けても暮れても其の白人の俤を忘れかねて、再會の約束をした今年の秋を待ち詫びつつ、乞食の尺八が聞える度に、ぼんやりと沖の帆を眺めて、物思ひに沈んで居る。

此れが映畫の序幕であつて、やがてアメリカ船員が港へ戻つて來る事になる。蒼蒲太夫の愛に溺れた白人は、如何にしても彼女を故郷へ連れて行かうと焦りながら、莫大な身請けの金を工面

する道がないので、彼女を遊里から盜み出した上、商船の底へ隱してアメリカへ密航させようとする。彼は此の計畫を遂行する爲めに、例の笛吹きの乞食を說いて、相棒になつて貰ふのである。或る夜ひそかに華魁が妓樓の裏口から忍んで出ると、其處に待ち構へて居る白人が彼女を大きなトランクに入れて、荷車に積んで、其れを乞食に預けたまま、自分は何食はぬ顏で、商船へ歸つてしまふ。乞食は町はづれの寂しい濱邊の、彼が每晩雨露を凌いで居る古寺の空家へ、荷車を曳いて行つて、華魁を入れたトランクを本堂の須彌壇の傍に匿つて置く。數日を經て白人は夜の深更に及んだ頃、一艘の艀舟を寺の崖下の波打ち際に漕ぎ寄せて、乞食の手からトランクを受け取り、首尾よく本船へ積まうと云ふ策略である。乞食は喜んで白人の賴みを諾したが、仕事が成功した曉には、どうぞ自分に金錢以上の報酬をくれろと云ふのであつた。彼は今迄誰にも語らなかつた切なる胸の中を打ち明けて、「華魁の爲めに働くことなら、私はたとへ命を捨てても惜しいとは思ひません。かなはぬ戀に苦しんで居るより、私はいつそ華魁がそれ程までに慕つて居るあなたの爲めに力を假して、お二人の戀を遂げさして進せませう。それが私の、華魁に對するせめてもの心づくしです。けれどもあなたがたが此の見すぼらしい乞食の衷情を、若し少しでも可哀さうだと思し召して下すつたら、幸ひ華魁をあの古寺へ匿つて置く間だけ、或はたつた一と晩

だけでも、どうぞ體を私の自由にさせて下さい。後生一生のお願ひでございます。……」かう云つて、涙を流して、あまたたび額を地に擦りつけて、涙を流して拜むのである。「……去年の春、あなたの船が此の港を立ち去つてから、毎日毎日お部屋の欄干の下に彳んで、笛を吹いては華魁の心を慰めて上げたのも私でございます。乞食にしては身の程を知らぬ、勿體ないやうなお願ひでございますが、お聞き屆けて下すつたら、私は死んでも本望でございます。萬一惡事が露見しても、罪は私が一人で背負つて、何處へでもあなた方をお助け申しませう。」かう云つて搔き口説かれて見ると、白人は願ひをにべなく拒絶する譯にも行かない。自分の大事な戀人ではあるが、どうせ此れ迄多くの男に肌を許した華魁の事であるから、乞食の親切に報いる爲めに、一と夜か二た夜の情を賣つても差支へはなささうに考へられた。——けれども、その話を聞かされた本人の菖蒲太夫は、欞子格子の隙間から、乞食の樣子を一と目見たばかりで、身顫ひをしたのである。お客と云ふお客に媚び諂らはれて、我が儘一杯に振る舞つて來た驕慢な彼女には、あの垢だらけな、鬼のやうな顏つきをした青年に、體は愚か袂の端にでも觸られるのは、死ぬよりも辛く感ぜられた。そこで彼女は白人と牒し合はせ、兎も角も乞食を欺いて、トランクを荷車へ積ませてしまふのである。

白人は乞食に別れて本船へ歸つて行く。乞食は荷車を古寺へ曳き込んでから、華魁の姿に會ひたさに、うす暗い本堂の佛像の前でトランクの蓋を明けようとする。が、蓋には嚴重な錠が下りて居て、どうしても開かない。彼は鞄にしがみ附いて、中に隱れて居る華魁を相手に、夜中白人の不信を恨み、悶々の情を訴へる。「あの白人は、黑氣があつてお前を欺した譯ではない。きつと慌ててお前に鍵を渡すのを忘れたのだらう。今にあの人がやつて來たら、此の鞄を明けさせて、必ず約束を果して上げる。」かう云つて、彼女は頻りに乞食を宥め賺して居る。さうするうちに二三日過ぎて、夜の明け方に寺に駈け附けた白人は、乞食に向つて、鍵を忘れた事を幾度か謝罪した後、「もう直き商船が錨を上げて港を出帆しようとして居る。とてもお前の賴みを聞いて居る暇はないから、どうぞ此れで勘辨してくれろ。」と、若干の紙包みを投げ與へる。乞食は無論、そんな物を快く受け取る筈がない。「此の後長く華魁の姿を見ることの出來ない世の中に、生きて居ても仕樣がないから、私は望みがかなつたら、海に身を沈めて死なうと迄決心して居た。それだのにあなた方は、酷くも私を欺したのだ。さほど華魁が私をお嫌ひなさるなら、無理にとはお願ひ申しますまい。その代り、どうぞ今生の思ひ出に、一と眼なりともお顏を拜ませて下さいまし。せめて華魁の、黃金の刺繍をしたきらびやかなキモノの裾になりとも、最後の接吻をさせて

下さいまし。」彼は繰り返して頼むのであるが、どうしても華魁は承知しない。「何と云つても此の鞄の蓋を明けてくれるな。早く其の乞食を追ひ拂つて、私を船へ載せてくれろ。」と、彼女はトランクの中から聲を上げて、白人を促すのである。「お前には氣の毒だが、ああ云つて居る彼女の言葉を、私は背く譯には行かない。それに殘念ながら、今日も私はトランクの鍵を持つて來なかつた。」と云つて、白人も當惑さうに辯解する。「よろしうございます。さう云ふ譯なら、私は今、あなたの眼の前で、此の海岸から身を投げます。ですが私は、死んでも華魁にあはずには置きません。會つて恨みを言はずには置きません。」と、乞食が云ふ。「死ぬなら勝手にお死に。」と、彼女が再び鞄の中で叫ぶ。（寫眞では鞄の中の縱斷面が、映し出されて肩を逆立てて、癇癪を起して居る彼女の表情が、自由に撮影されて居る。）「私が死んだら、私の執拗な妄念は、私の醜い俤は華魁の肉の中に食ひ入つて、一生お傍に附き纏つて居るでせう。その時になつて、どんなに後悔なすつても及びませぬぞ。」と云ふかと思ふと、乞食は寺の前の崖の上から、飛び込んでしまふ。すると白人は漸く安堵したやうに、急いでポケットから鍵を取り出して、トランクの蓋を開いて華魁をいたはりながら、互ひに謀の成就したのを喜び合ふ。——此れ迄が一卷と二卷との內に收めてある。

第三卷以下は日本を離れた船の中から、白人の故鄕のアメリカの事になつて居る。先づ現はれる場面は、彼女を入れたトランクが種々雜多な貨物と一緒に、船艙の片隅へ放り込まれる光景とそのトランクの縱斷面とである。彼女は、最初から貯へられてある水とパンとで命を繋ぎながら窮屈な鞄の中に、兩膝を抱へて膝頭の上に頂を伏せて身を縮めて居る。二日立ち三日立つうちに右の方の膝頭に妙な腫物が噴き出して、恐ろしく膨れ上つて來る。さうして、如何にも柔かさうに、ふわふわとふくれた表面には、更に細かい、四つの小ひさな腫物の頭が突起し始める。不思議な事に、その腫物は一向痛みを感じないらしく、彼女は脹れ上つて居る局部を、手で壓して見たり叩いて見たりする。あまり邪慳に壓し潰さうとしたせゐか、柔かであつた表面は、日を經るまにこちこちに固まつて、其の代り四つの小ひさな腫物の頭がだんだんくつきりと、明瞭な輪郭を示すやうになる。四つのうちの上の方にある二箇は球のやうに圓くなり、中央の一箇は縱に細長い形を取り、最下部にある一箇は横にうねうねと、芋蟲が這つて居るやうな無氣味なものになる。トランクの中は眞暗な筈であるが、空氣を通はせる爲めに、豫め作つて置いた僅かな隙間からさし込む明りが、彼女の身邊を朦朧と闇に浮べて、殊に右の膝頭の周圍には、やや鮮やかな月の暈のやうな圈を描いた光線が、一滴の水をたらした如く、ぽつたりと滲んで居る。彼女は或

る時、其の疾患部をつくづく眺めて居ると、上方にある二箇の突起が、何となく生物の眼玉のやうに思はれて仕方がない。すると今度は、中央の細長いのが鼻のやうでもあり、下方の芋蟲の形をして居るのが、脣のやうでもあり、脹れ膨らんだ表面全體が、俄然として、紛ふ方なき人間の顏になつて居る事を發見する。「心の迷ひではないか知らん。——彼女は斯うも考へたが、やはり人間の顏に相違ない。而も一層厭なことには、それは恰も子供の畫いた戲畫のやうな、簡單な線から成り立つては居るけれど、どうやら彼の乞食の俤に似通つて居る。さう氣が付いた瞬間に、彼女は名狀し難い恐怖に襲はれて、ぐつたりと、俯向きに卒倒してしまふ。……

氣を失つて項垂れて居る彼女の頭は、ちやうど例の膝頭の上に伏さつて居る。——その間に腫物は刻々と生長して、簡單な線に過ぎなかつた眼だの、鼻だの、口だのは、次第に生命を吹き込まれたやうな精彩と形體とを帶び始め、遂に全く、乞食の顏を生き寫しにした、本物の人間の首になつて居る。(尤も、大きさは實物より幾分か小ひさく、ほぼ膝頭へ當て篏まる程度に縮寫されて巧妙に燒き込まれて居る。)其れは、嘗て笛吹きの青年が今や身を投げようとして呪ひの言葉を放つた折の、あの幽鬱な、執念深い表情を、すばらしい巨匠の手に依つて彫刻された如く、寂然と、默々と湛へて居るのである。

此れから以後は、その人面疽が彼女にさまざまな復讐をする、凄慘な物語りで充たされて居る。船がアメリカに着くと、彼女は腫物の事を堅く戀人に祕して、サン・フランシスコの場末の町に二人で間借りをして暮して行く。彼女と世帶を持ちたさに、船員を罷めて或る會社の事務員に雇はれた白人は、彼女が近頃ひどく陰氣になつたのを訝しみながら、それとなく注意をして居るうちに、或る晩偶然な出來事から、とうとう忌まはしい祕密を發見して、彼女を捨てて逃げ去らうとする。彼女は戀人を逃がすまいと激しく搏闘する拍子に過つて咽喉を緊めて彼を殺してしまふ。(彼女の體には、もう怨靈が乘り移つて居て、無意識の間にそれ程の腕力を出させたのである。)戀人の死體を前にして彼女は暫らく失心したやうに、惘然と彳立して居る。——その時、搏闘の結果ずたずたに裂けた、彼女のガウンの裾の破れ目から白人の死體を覗いて居る人面疽が、凝然たる顏面筋肉を始めて動かしてにやにやと底氣味の惡い笑ひを洩らす。(爾來人面疽は盛んに表情を動かすやうになつて、喜んだり悲しんだり、眼を瞋らしたり、舌を出したり、どうかするとさめざめと涙を流し、脣を歪めて涎をたらしたりする。)此れが最初の復讐であつて、その後彼女の運命は、絶えず人面疽に迫害され威嚇される。彼女は戀人を殺してから、急に性質が一變して恐ろしく多情な、大膽な毒婦になると共に、美しかつた容貌が以前に倍する優婉を加へ、一段

の嬌態を發揮するやうになつて、次ぎから次ぎへと多くの白人を欺しては、金を卷き上げ、命をも奪ひ取る。折々、犯した罪の幻に責められて夜半の夢を破られる彼女は、何とかして改心しようとするけれど、いつも人面疽が邪魔をして、彼女の臆病を嘲り惡事を咬かす爲めに知らず識らず墮落と悔恨とを重ねて行く。或る時は賣春婦になり、或る時は寄席藝人になり、(此の劇の女主人公は、洋裝にも日本服にも極めてよく調和する、都合のいい顏立ちと體格とを持つて居て、其れが寫眞に遺憾なく應用されて居る。)彼女の境遇が變轉するに從つて舞臺は桑港から紐育に移り、歐洲の各國から入り込んだ貴族や、富豪や、外交官や、身分の高い紳士が幾人となく彼女に魅せられて生血を吸はれる。彼女は壯麗な邸宅を構へ、自動車を乘り廻して貴婦人と見紛ふばかりの豪奢な生活を送るやうになるが、孤獨の時は相變らず良心の苛責に惱まされる。而も惱まされれば惱まされる程却つて彼女の肉體は水々しく膩漲り、血色はつやつやと輝きを增す。最後に彼女は、某國の侯爵の青年と戀に落ちて、首尾よく結婚してしまふ。しかし、そのまま侯爵の若夫人として、平和な月日を過す事が出來たら、此の上もない好運であるけれど、決してさううまくは行かなかつた。或る晩、新婚の夫婦が多勢の客を招いて、大夜會を催した折に、彼女はとうとう、夫をはじめ誰にも深く隱して居た人面疽を滿座の中で暴露してしまふのである。彼女は始

終腫物にガーゼをあてて、上から固い襪をぴつたりと穿いて、人の前では如何なる場合でも膝を露さなかつたのに、その夜、彼女が舞踏室で夢中になつて踊り狂つて居る最中、突然眞赤な血が、純白な彼女の絹の襪に縷を引いて、點々と床にしたたり落ちる。それでも彼女はまだ氣が付かずに跳ね廻つたが、平生から夫人が膝に繃帶するのを不思議がつて居た侯爵が、何げなく傍へ寄つて傷を檢べて見ると、——人面疽が自ら襪を齒で喰ひ破つて、長い舌を出して、目から鼻から血を流しながら、げらげらと笑つて居る。

彼女は其の場から發狂して、自分の寢室へ駈け込むと同時に、ナイフを胸に衝き通しつつ、寢臺の上へ仰向きに倒れる。斯うして彼女は自殺してしまつても、人面疽だけは生きて居るらしく未だに笑ひつづけて居る。——

此れが「人間の顏を持つた腫物」の劇の大略であつて、一番最後には、人面疽の表情が「大映し」になつて現はれるのださうである。

大概、此の種の寫眞には、映畫の初めに、原作者竝に舞臺監督の姓名と、主要な役者の本名と役割とを書いた、番附が現はれるのを普通とする。ところが此の寫眞に限つて作者や舞臺監督の名は何處にも記載してない。ただ、菖蒲太夫に扮する女優の歌川百合枝だけが、れいれいしく紹

介されて、開巻第一に、候爵夫人と華魁との衣裳を着けて挨拶に出る。さうして、百合枝よりも寧ろ重大な役を勤める笛吹きの乞食になる日本人は、一體誰なのか、どう云ふ素性の俳優なのか、今迄嘗て見覺えのない顏であるにも拘らず、全然閑却されて居るのである。

以上の話を、百合枝は、自分を贔屓してくれる二三の客筋から聞いた。それが當の本人の、活きた形を捉へて居る活動寫眞であるからには、彼女は必ず、いつか一遍、何處かで撮影した事があるに相違ない。けれどもどうしても、彼女にはさう云ふ劇を演じた記憶が殘つて居なかつた。尤も、フイルムへ寫し取る爲めに劇を演ずる場合には、普通の芝居のやうに、戯曲の發展の順序を追うてやるのでなく、その時の都合に因つて、臺本の中から手あたり次第に場面を選んで、前後を構はず寫して行くのである。どうかすると、或る一つの場所で、全然異つた戯曲の中の或る光景を、二つも三つも同時に撮影する事さへあつて、活動俳優は自分の演じて居る芝居の筋を知らないで居る例が多い。殊に百合枝の雇はれて居たグロオブ會社では、舞臺監督が、俳優には絶對に、戯曲の筋を知らせない方針を取つて居た。俳優は豫め本讀みや稽古をする必要がなく、役の性根などはまるで分らずに、ただ出たところ勝負で、舞臺監督の示す動作を見倣つて、その型の通りに泣いたり笑つたりしながら、一と場一と場と拵へ上げて行くのであつた。かうすると

俳優の間違つた解釋を防ぎ、彼等の技藝から、芝居じみた不自然さを除いて、演出に活氣を生ずると云ふ考へから、アメリカの會社では一般に此の方法を取つて居るのである。それ故百合枝は、グロオブ會社で働いて居た四五年の間に殆んど無數の場面を撮影して居るけれど、其れ等の場面が如何なる劇の要素となり、幾種類の戯曲を組み立てて居るのか、當時は自分でも想像することが出來なかつた。云はば、彼女は或る大規模な機械に附屬する、一局部の齒車だの彈條だのを製造して居る職工のやうなものだ。成る程彼女は今迄に何回となく、華魁や、貴族の婦人に扮裝した覺えはある。女賊や女探偵を得意にして居たのであるから、トランクの中へ隱れたり、男を飜弄したり殺害したり、そんな光景を演じた經驗は、頻々として數へ切れない程の回數に達して居る從つて、そのうちの孰れと孰れとが、人面疽の劇の一部となつて居るのか、彼女に見當が付かないのも、一應無理はないのである。おまけに此の寫眞劇には、熟練な技師のトリックが行はれて腫物になる乞食の顏を彼女の膝へ燒き込みにしてあるのだから、本人に記憶がないのは、猶更當然であるかも知れない。

しかし、さうは云ふものの、後日完成された一卷の映畫を見るなり、若しくは筋を聞くなりすれば、大抵あの時寫したのが此れであつたと、思ひ當るのが常である。況んや長尺物のうちでも

特に傑出した立派なフイルムを、彼女が今日迄、見たこともなく、存在さへ知らなかつたと云ふやうな、馬鹿馬鹿しい事實がある譯はない。それに彼女は、アメリカに居た時分、自分の演じた寫眞劇を見物するのが何よりも好きで、たとへどんな短いフイルムでも、一つ殘らず眼を通して居る筈だ。日本へ歸つてからも、ロス・アンゼルスの昔が戀ひしいのと、東京の會社で拵へる寫眞の出來榮えが思はしくないのとで、たまたまアメリカ時代の映畫が、公園あたりへ現はれる度に、暇を盜んでは見に行くやうにした。だから、全く心當りのない人面疽の寫眞が、いつの間にかグロオブ會社で製出されて、日本へ渡つて來て居ると云ふ事實は、「人間の顏を持つた腫物」以上に、百合枝には不思議に感ぜられたのである。

不思議と云へば、一體それ程藝術的な、優秀な寫眞が、長く世間に認められずに居て、此の頃ふいと、場末の常設館などを廻つて居るのも不思議である。いつ其の寫眞は日本へ輸入されたのであらう、さうして何と云ふ會社の手によつて、何處で封切りをされたのであらう。東京の場末に現はれる前は何處をうろうろして居たのだらう。彼女は試みに、同じ會社に勤めて居る俳優や、二三人の事務員に尋ねても、誰もそんな物は知らないと云ふ。折があつたら、彼女は一遍見に行きたいと思つて居ながら、何分遠い場末の町に懸つて居て、今日は青山明日は品川と云ふや

うに、始終ぐるぐる動いて居る爲めに、いつも機會を逸してしまふ。

自分で目擊する事が出來ないとなると、その寫眞に對する彼女の好奇心はますます募つた。グロオブ會社には、ジェファソンと云ふ「燒き込み」の上手な技師が抱へてあつて、盛んにトリック寫眞を製作した位であるから、人面疽の劇も恐らく、彼の技倆を持つて、出來上つたものやうに察せられる。あの快活な剽輕なジェファソンの性質から考へると、彼女をびつくりさせる積りで、思ひ切つて大膽な細工を施したかも知れない。腫物の箇所以外にも、豫想外な、微妙なトリックを、全篇到る處に應用したのかも分らない。——だが、さうだとすれば、いよいよ彼女はその寫眞を見せられなければならぬ筈である。彼女は又、笛吹きの青年になると云ふ日本人の俳優に就いても、深い疑惑を抱かずには居られなかつた。グロオブ會社に雇はれて居た日本人の男優は、當時僅かに三人しかない。その三人の內の一人が、長崎のやうな港灣を背景に使つて、少くとも乞食に扮して、彼女と一處にカメラの前へ立つた事は斷じてないのである。彼女の、白繻子のやうな美しい膝頭へ、醜い俤を永劫に殘して居る日本人は、抑々何者であらう。——空想を逞しうすればする程、百合枝は何だか、自分が實際の菖蒲太夫であつて、怪しい一人の日本人に呪はれて居るやうな心地がした。

此の、解き難い謎の寫眞の來歴を、日東寫眞會社の内に、誰か知つて居るものはないのだらうか。斯う思うた彼女は、ふと、會社に古くから勤めて居る、高級事務員のHと云ふ男に氣が付いた。その男は、外國會社との取引に關する通信や、英語の活動雜誌だの、筋書だのの飜譯に從事して居る人間で、日本に渡つて來たアメリカのフイルムの製作年代や、輸入の經路や、中に現はれる俳優の素性に就いて、精しい知識を持つて居るらしかつた。その男に尋ねれば、何等かの手がかりは得られさうに考へられた。或る日彼女は、日暮里の撮影場の傍にある、事務所の二階へ上つて行つて、其處に執務して居るHの肩を、輕く叩いた。

「……ああ、あの寫眞の事ですか、……僕は滿更知らなくもありませんが、……」

Hは、彼女に質問を受けると、人の好ささうな眼をぱちぱちやらせて、ひどく狼狽した樣子であつた。さうして、不安らしく部屋の周圍を見廻しながら、百合枝が開け放して這入つて來た入口のドオアを、自ら立つて締めて來た後、やつと落ち着いたやうにしげしげと百合枝の顏を眺めた。

「……さうすると、あなた御自身にも、あの寫眞をお寫しになつた覺えがないのですね。それではいよいよ、あれは不思議な、變な寫眞です。實はあれに就いて、僕もあなたにお尋ねして見たい、とうから思つて居たのですが、他聞を憚かる事でもあり、それに少し氣味の惡い話なのでついついお伺ひする機會がありませんでした。今日は幸ひ誰も居ませんから、お話してもようございますが、聞いた後で、氣持ちを惡くなさらないやうに願ひます。」

「大丈夫よ、そんな恐い話なら猶聞きたいわ。」

と、百合枝は强ひて笑ひながら云つた。

「……あのフイルムは、實は此の會社の所有に屬して居るもので、此の間中暫らく場末の常設館へ貸して置いたのです。あれを會社が買つたのは、たしかあなたがアメリカからお歸りになる、一と月ばかり前でしたらう。それもグロオブ會社から直接買つたのではなく、横濱の或るフランス人が賣りに來たのです。そのフランス人は、外の澤山のフイルムと一緒に上海であれを手に入れて、長らく家庭の道樂に使つて居たと云ふ話でした。フランス人が買つた以前にも、支那や南洋の植民地で散々使はれたものらしく、大分疵が附いて傷んで居ました。しかし會社では「武士の娘」以來、あなたの人氣が素晴らしい際でもあり、あなたが會社へ來て下さると云ふ契約の整つた時でしたから、――それに又、傷んで居るが非常に拔けのいい、あなたの物としても特別の味ひのある、毛色の變つた寫眞でしたから、法外に高い値段で買ひ取つたのです。ところが、買

ひ取つてから間もなく、あの寫眞に就いて奇妙な噂が立ちました。あの寫眞を、夜遲く、たつた一人で靜かな部屋で映して見ると、可なり大膽な男でも、とてもしまひまで見て居れないやうな或る恐ろしい事件が起ると云ふのです。その事實は、以前會社に雇はれて居たMと云ふ技師が、フイルムの曇りを修正する爲めに、此の事務所の階下の部屋で、或る晩、あの寫眞を映しながら疵を檢べて居た、偶然の機會に發見されたのです。最初は誰もMの言葉を信用しなかつたのですが、その後、物好きな連中が二三人で、代る代る試して見てから、「たしかに怪しい、あの寫眞は化け物だ。」と云ふ騷ぎになりました。怪しい事は其ればかりでなく、Mと云ふ技師は、あの寫眞に脅やかされたのが原因で、だんだん氣が變になり、程なく會社を罷めるやうになりました。Mを以外の、物好きに實驗した連中も、それから毎晩夢に魘されたり、譯のわからぬふらふら病に取り憑かれたり、合點の行かない出來事が引き續いて生じるのでした。現に社長なども、實見した一人ですが、後で半月ばかり、病名の明かでない熱病に罹つて、ひどい目に會はされたのです。御承知の通り、社長はああ云ふ御幣擔ぎの、神經質の人ですから、さうなるともう一日も、あのフイルムを會社に置くのが嫌になつたのでせう。病氣が治ると直ぐ祕密會議を開いて、あのフイルムを至急に他の會社へ賣却する事、あのフイルムに關係のあるあなたに對しても、雇ひ入れの

契約を破棄する事と云ふ、二箇條の意見を提出しました。しかし社長の此の意見には、大分反對の說があつて、あれ程の高價で買ひ入れた品物を、會社がみすみす損をしてまで、むざむざと外の會社へ賣却する必要はないと云ふ人や、フイルムは兎に角、本人のあなたに對して、折角契約を結び、既に多額な前金まで拂つて置きながら、破談を申し込むには及ばないと云ふ人や、議論が頗る紛糾して、結局、一つの妥協案が成り立つたのです。つまり、あのフイルムに怪異が現はれるのは、深夜、たつた一人で見て居る時に限るのだから、めつたに其れを發見する人はないであらうし、公開の席で多數の觀覽に供するのは、何の差支へもない譯である。だから社長が、どうしてもあれを社內に置くのが嫌なら、當分の間、餘所の會社へ貸す事にして、相當の値で買ひ手の附くのを待つがいい。それからあなたとの契約は、解除する理由が全くない。勿論寫眞の怪しい事件が、世間へぱつと廣がるやうな事になると、あなたの人氣にも、フイルムの價値にもけちが附きますから、一同堅く祕密を守つて、たとへ社內の人間にも、成るべく彼の事件を知らせないやうにする。――斯う云ふ案が成り立ちました。ですから、役員や俳優の顏觸れに著しく動搖のあつた今日では、あの祕密を知つて居る者が社內に殆んど一人も居ないのも無理はありません。最初、祕密會議に出席した重役連の意向では、何處かの堂々たる會社へ、高い損料で貸し附

けようと云ふ考へだつたのですが、ちやうど其の頃は、會社同士の競爭や軋轢が激しかつたので豫想通りには行きませんでした。そこで據んどころなく、京都、大阪、名古屋あたりの、小さな常設館へ貸してやりましたが、新聞へ花々しい廣告を出すやうな立派な興行主の手にかからない爲めに、あれだけの寫眞が、遂に何處でも、一遍も評判にならずに濟んでしまひました。さうして此の頃、關西を一と廻り廻つて來て、東京の場末に現はれるやうになつたのです。……僕は其のフイルムの、深夜の怪異に就いては實驗者の話を聞いて居るだけで、自分が目擊した覺えはありません。けれども、あれを會社が買ひ込んで、警察官や新聞記者を立ち合はせて、始めて試寫をやつた際に、全篇の映畫を詳細に見物して居る一人です。その時僕がをかしいと思つたのは、あの中の乞食の役を勤めて居る、日本人の俳優の事でした。あの劇に登場する主な男女優は、あなたを始め僕には大概顏馴染の名前の知れて居る人達ですが、ただあの日本人だけが、一度も見覺えのない役者でした。僕は少くとも、あなたと同時に、グロオブ會社に勤めて居た日本人の役者は誰々であるか、よく知つて居る積りです。僕の調査に間違ひがないとすれば、女優ではあなた以外にEとOの二人、男優ではS、K、Cの三人だけしか居なかつた筈です。……ねえ、さうでせう？……ところが、其の乞食になる日本人は、Sでも、Kでも、Cでもないんです。それと

も此の三人の外に、誰かお心あたりがありますか知らん？　僕があなたに伺つて見たいと思つて居たのは、その事でした。」

Hは斯う云つて、長い話の言葉を劃つた。

「あたしにしても、三人の外に別段心あたりはないけれど、誰か、あたしの知らない役者を、燒き込みにしてあるやうな形跡はないでせうか。……あたしはきつとさうだと思ふわ。」

「燒き込みと云ふ事も僕は考へて見ました。トリック寫眞の名人の、ジエフアソンの話も聞いて居ましたから或はさうかとも思ひましたが、いくらジエフアソンにしたところで、燒き込みにしたには、どうもあんまりうま過ぎる箇所が、正に一箇所か二箇所はある筈です。若しもあれが全然燒き込みだとすれば、ジエフアソンは、殆んど僕等の想像も及ばない、靈妙不可思議の祕法を心得て居るのだとしか思はれません。何にしてもいろいろの點は、疑はしい事が澤山ありますから、實は半年程前に、其れ等の疑問を一と纏めにして、グロオブ會社へ問ひ合はせの手紙を出したのでした。するとやがて、會社から寄越した返辭と云ふのが、此れが又甚だ要領を得ないものでした。會社の云ふには、自分の所では「人間の顏を持つた腫物」と云ふ標題の劇を、作つた事はない。けれども、其の劇の中に現はれて居るやうな場面をところどころに使つて、其れに多少

似通つた筋の寫眞劇を、作つた事はたしかにある。だから、何者かが、そのフイルムへ他のフイルムの斷片を交ぜ込んだり、或は一部分の修正や燒き込みを行つて、さう云ふ贋物を製造したのではないだらうか。まさか當會社に專屬中の俳優たちが、會社に內證で、さう云ふ寫眞を製作したとは信じられない。彼等は每日會社の撮影場に出勤して居て、そんな餘裕は絕對にないのである。それから、ミツス・ユリエが當會社に在勤中、彼女と同時に雇はれて居た日本人の男優は、仰せの如く、S、K、Cの三人だけである。しかし彼女の在勤以前に日本人が二三人雇はれて居た事もあるし、最近には新たに雇つたのが五六人居る。故に當會社に於ても彼女が顏を知らない日本人を、彼女のフイルムへ燒き込む事は、必ずしも有り得ない事でなく、同時に隨分ありさうな事である。但し、當會社では可なり困難な、破天荒な、燒き込みを行ひ得るけれども、其の燒き込みが如何なる程度まで、如何にして可能なりやは、會社の祕密に屬することで、殘念ながら明瞭なお答へを致しかねる。猶、お問ひ合せのフイルムが果して贋物であるとすれば、當會社でも捨てて置く譯には行かないし、參考の爲め、一應その品を檢査して見たいから、相當の代價を以て是非會社へ讓り渡して貰ひたい。……大體が、先づ斯う云つたやうな意味で、結局、あの寫眞の正體は未だに分らずじまひなのです。やつぱりグロオブ會社の返辭の中に書いてあるやう

に、何者かがあれに似寄つた筋のフイルムを、外のいろいろのフイルムと繼ぎ合はせて、うまい工合に修正したり、燒き込んだりして一つの寫眞劇に拵へ上げたと云ふ推察が、一番中つて居るやうですが、さうだとすると、そんな仕事の出來る奴は、ジエフアソン以上の名人でなければ出來ませんな。しかしたとへジエフアソン以上の名人が居るにしても、あんな面倒な仕事を、單に金儲けの目的でやれるものではなし、例の眞夜中の怪しい出來事と結び附けて考へると、あれには何か餘程の曰く因緣があるに違ひありません。……斯う云ふと變ですが、あなたは若しや、アメリカにいらしつた時分に、誰かに恨みを買ふやうな事を、なすつた覺えがありはしませんかね。どうしてもあれは、あなたに惚れて居ながら、散々嫌はれたとか欺されたとか云ふやうな覺えのある人間に、關係のある事ですよ。僕は必ずさうだと思ひます。さう云ふ男の怨念が、あれに取り憑いて居るのです。」

「まあ待つて下さい。私はそんな、怨念に取り憑かれるやうな、惡い事をした覺えはないけれどその腫物になる人間の顏と云ふのは、全體どんな人相なのか知ら、何でも大さう醜男だと云ふ話ぢやないの。」

「さうです、恐ろしい醜男です。日本人だか南洋の土人だか分らないくらゐな、色の眞黑な、眼

のぎろりとした、でぶでぶした圓顔の、全く腫物のやうな顔つきをした男です。年頃は三十前後寫眞の中のあなたよりは十ぐらゐ老けて見えます。一遍見たら忘れられない顔ですから、あなたがその男を御存じなら、想ひ出せないと云ふ譯はありません。いや、あなたばかりでなく、僕等にしても、あの男が何處の何者だか今まで知らずに居ると云ふのは、實に不思議千萬です。なぜかと云ふに、笛吹きの乞食の役の、深刻を極めた演出と云ひ、腫物になつてからの陰鬱な、物凄い表情と云ひ、先づあの男に匹敵する俳優は、『プラアグの大學生』や『ゴオレム』の主人公を勤めて居る、ウエエゲナアぐらゐなものでせう。あれ程特徴のある容貌と技藝とを持つた、唯一の日本人が、内地では勿論、アメリカの活動雜誌にも、寫眞は愚か名前さへ出た事がないのは、其れがもう、既に一つの怪異です。今日までのところ、あの男は此の世の中には住んで居ない人間で、ただフイルムの中に生きて居る幻に過ぎないのです。さう信ずるより外、仕方がないのです。殊に、あのフイルムの怪異を實驗した人達は誰もあの男を、人間の寫眞であるとは思つて居ません。『あの男は化け物だ。あんな役者が居る筈はない。』と云ひます。『化け物でなければ、あんな怪しい變事が起る筈はない。』と云ひます。……」

「だから變事と云ふのは、どんな事なんだか、其れをあたしは聞きたいんだわ。先から隨分精し

く説明して貰つたけれど、肝腎の變事の話を未だ聞かないのだから。……」

「實はあなたが、神經をおやみになるといけないと思つて、わざと差し控へて居たのですが、此處まで話が進んだら、もうしやべつてしまひませう。僕はその、後に氣違ひになつたと云ふM技師から、最も詳細な實驗談を聞きましたが、極く掻い摘まんでお話をすれば、つまりあの寫眞の怪異は、その幻の男の顔にあるんです。一體、M技師の長い間の經驗に依ると、活動寫眞の映畫と云ふものは、淺草公園の常設館などで、音樂や辯士の説明を聽きながら、賑やかな觀覽席で見物してこそ、陽氣な、浮き立つやうな感じもするが、あれを夜更けに、たつた一人で、かたりとも音のしない、暗い室内に映して見て居ると、何となく、妖怪じみた、妙に薄氣味悪い心持ちになるのださうです。それが靜かな、淋しい寫眞なら無論のこと、たとへ花々しい宴會とか格鬪とかの光景であつても、多數の人間の影が賑やかに動いて居るだけに、どうしても死物のやうには思はれず、却つて見物して居る自分の方が、何だか消えてなくなりさうな心地がする。中でも一番無氣味なのは、大映しの人間の顔が、にやにや笑つたりする光景で、――さう云ふ場面が現はれると、思はずぞつとして、齒車を廻して居る手を、急に休めてしまふと云ひます。そんな場合には、怒る顔よりも笑ふ顔の方が餘計に恐いと、M技師はよく云つて居ました。『それに自分は技

師だから何でもないが、もし、或る俳優が、自分の影の現はれるフイルムを、たつた一人で動かして見たら、どんなに變な氣持ちがするだらう。定めし、映畫に出て來る自分の方がほんたうに生きて居る自分で、暗闇に彳んで見物して居る自分は、反對に影であるやうな氣がするに違ひない。』と云つて居ました。普通の寫眞でさへさうですから、『人間の顏を持つた腫物』のフイルムを、此の日暮里の事務所の、ガランとした映寫室で、眞夜中頃に一人で見て居る時の心持ちは大凡そ僕等にも想像する事が出來るでせう。何でももう、第一卷の、笛吹きの乞食の姿が現はれる刹那から、胸を刺されるやうな、總身に水を浴びるやうな氣分を覺えて、或る尋常でない想像が襲つて來るさうです。あの寫眞は隨分疵だらけで處々ぼやけてゐながら、それが少しも邪魔にならずに、寧ろ陰鬱な效果を助けて居るのだから妙ぢやありませんか。それでもまあ第一卷から二卷、三卷、四卷までは、どうにか辛抱して見て居られるさうですが、第五卷の大詰、菖蒲太夫の侯爵夫人が發狂して自殺するとき、次ぎに現はれる場面を、ぢつと靜かに注意を凝らして視詰めて居ると、大概の者は恐怖の餘り、一時氣を失つたやうになるのです。その場面はあなたの右の脚の半分を、膝から爪の先まで大映しにしたもので、例の膝頭に噴き出て居る腫物が、最も深刻な表情を見せて、さもさも妄念を晴らしたやうに、脣を歪めながら一種獨得な、泣くやうな笑ひ方

をする。――その笑ひ聲が、突如として極めて微かに、しかしながら極めてたしかに、疑ふべくもなく聞えて來る。M技師の考へでは、其れは外部に餘計な雜音があつたり、注意が少しでも散つて居たりすると、聞えないくらゐの聲であるから、聞き取るには可なり耳を澄まして居る必要がある。事に依ると其の笑ひ聲は、寫眞が公衆の前で映寫される場合にも、聞えて居るのかも知れないが、恐らく誰にも氣が付かずに濟んでしまふのだらう。と、云ふことでした。――どうです、あなたにしても、此の話をお聞きになつたら、あまり好い氣持ちはなさらないでせう。實はお話し申すのを忘れて居ましたけれど、そのフイルムは今後いよいよ、グロオブ會社へ讓り渡す事になつて、二三日前に、巢鴨の大正館と云ふ常設館から引き取つて、目下、此の事務所の其の棚の上に載せてあるのです。社内で映寫する事は、社長から嚴禁されて居ますが、フイルムのまで御覽になるなら一向差支へはありません。いかがです、僕が立ち合ひの上で、ちよいとお見せ申しませうかね。兎に角、その乞食の顏を御覽になるだけでも、何か此の謎を解く端緒を得られるかも知れません。……」

日は、百合枝が、好奇心に充ちた瞳を輝やかして頷くのを待つて、傍の棚上に積んである、ブリキ製の圓い五つの罐の内から、第一卷と第五卷とを收めた罐を引き擦り卸した。さうして、デ

スクの上で蓋を除いて、鋼鐵のやうにきらきらしたフイルムの帶を、長く長く伸ばしながら、明るい窓の方へ向つて、其れを百合枝に透かして見せた。

「ほら、御覽なさい。此れが乞食の男です。・・・」

かう云つて、Hは更に第五卷の方の、彼女の膝へ燒き込んである腫物の顏を示して、

「・・・ね、此の通り、此處で腫物になつて居ます。此れがたしかに燒き込みだと云ふことは、僕にも分ります。此の男にはあなた覺がありませんかね。」

「いいえ、私はこんな男に覺えはない。」

と、彼女は云つた。其れが彼女が、過去の記憶を辿つて見る必要のないほど明らかに、未知の一人の日本人の男子の顏であつた。

「だけどHさん、此れは燒き込みに違ひないのだから、やつぱり何處かに、かう云ふ男が居ることは居るのね。まさか幽靈ぢやないでせう。」

「ところが一つ、どうしても燒き込みでは駄目な處があるのです。そら、此處を御覽なさい。此れが第五卷の眞ん中ごろです。女主人公が腫物に反抗して、その顏を擲らうとすると、顏が彼女の手頸に嚙み着いて、右の拇指の根本を、齒と齒との間へ、挾んで放すまいとしてゐるのです。

あなたは盛んに、五本の指をもがいて苦しがつて居ます。此れなんぞはどうしたつて、燒き込みでは出來ませんよ。」

と云ひながら、Hはフイルムを百合枝の手に渡して、煙草に火をつけて、部屋の中を歩き廻りつつ、獨り語のやうに附け加へた。——

「・・・此のフイルムが、グロオブ會社の所有になると、どう云ふ運命になりますかナ。僕は、拔け目のないあの會社の事だから、きつと此れを何本も複製して、今度は堂々と賣り出すだらうと思ひます。きつとさうするに違ひありません。」

金と銀

第一章

動坂の終點まで行く筈であつた靑野は、根津の停留場へ來ると、なぜか慌てゝ車掌臺の方から電車を飛び降りてしまつた。その時ちやうど彼と擦れ違ひに、運轉手臺の方から乘り込んだらしい一人の男があつた。さつぱりしたポオラルのインバネスを着て、白つぽい鳥打帽子を被つて居るその後影が、車內の吊り革にぶら下つて居るのを、靑野は往來から遠く見送つてほつと胸を撫でおろした。

「たしかに今村に違ひない。好い鹽梅だつた。もう少しでふん摑まるところだつた。」

彼はほんたうに虎口を脫したやうな氣がした。去年の夏假裝會をやるのだと云つて、今村の外套と薩摩上布とを借り出した上、其の晩すぐに質に入れて姿を晦ましてしまつてから、靑野は今村に摑まりさへすれば、必ず擲りつけられるものと覺悟して居た。電車の中だらうが大道のまん中だらうが、見附け次第赤恥を搔かせてやると、揚言して居る今村の噂も彼は內々聞き込んで居

た。新聞には度び度び惡名を曝され、友人からは擯斥されて、恥を恥とも思はなくなつて居る靑野でも、擲られる事だけはさすがに恐ろしかつたのである。

だが、あれから一年立つた今日、今村はもうあの夏外套の事などは忘れてしまつたかの如く、また新しいインバネスを拵へて得々として着て歩いて居る。その樣子が、いかにも金に不自由のない、物を盜まれても平氣な境遇に居る事を證據立てゝ居るやうなので、靑野はいくらか安心もすれば羨ましくも感ぜられた。あんな立派な外套を纏つて居たら己に會つてもまさか擲る譯には行かないだらう、などゝも思つた。去年の外套は質屋で五圓にしか取らなかつたが、今年の奴なら拾圓は大丈夫だらうといふやうなさもしい考さへ、胸に浮べずには居られなかつた。

「いや、今村は己に氣が付かなかつた筈はない。己が急いで前の方から降りようとした時、彼奴はちらりと己の顏に橫眼を使つて、わざと反對の方角から乘つたやうだつた。事に依つたらもう今村は己なんかを相手にしない積りなのか知ら？」

さうだとすると、擲られるよりは餘計屈辱であるやうな氣がして、靑野はひとりでに顏が赤くなるのを覺えた。戶外を歩く度每に始終こんな心配をするくらゐなら、いつそ早く取つ摑まつて一遍に擲られてしまつた方が、却つてせいせいするだらうとも考へられた。

「なんだ馬鹿々々しい！　逃げるには及ばなかつたぢやないか。擲りたければ擲らしてやりやあよかつたんだ。」

彼は路傍の人の聞えるほどの高い聲でかう獨語を云つた。自分と云ふ人間が、まるで他人のやうに賤しく、醜く、滑稽に見えて仕方がなかつた。自分が今村の地位に在つて、自分のやうな男を友達に持ち、往來のまん中で打んなぐつてやつたら、さぞ痛快を極めるだらうと、つまらない想像に耽つたりした。

實際、青野のやうに自分で自分の惡い性分を充分に知り拔いて、散々愛憎を盡かして居ながらも、その性分を遂に改めることが出來ず、生涯それに引き擦られて生きて行かなければならない人間は、かうして自分を嘲けることが、たつた一つの自分を許す逃げ道であつた。さうしなければ彼は到底自分の體の置場がなかつた。彼は自分でも、自分のやうな卑しい人と一緒に歩くのが溜らなく厭であつた。折々は自分の惡い性分を自分の外へ放り出して、嘆いたり、憐れんだり、おかしがつたりしてやりたかつた。そんな風にすれば、せめて一時は自分の品性が高まるやうに感ぜられた。

「世の中の凡ての者が今村と同じく自分を捨てゝしまつたら、自分は果して安穩に生きて行け

るだらうか、それでなくても喰ふに困つて居るのに、さうなつたら自分はどうする了見だらうか。」——

「さうなつたら」ところではない、もう大分さうなつて來て居るのである。少くともたつた一人の親友の大川を除いてしまつたら、現在の青野を救つてくれさうな篤志家は一人も居ない。舊友と云ふ舊友はみんな今村の味方になつて、彼の横つ面に拳骨の一つや二つを喰らはせかねない連中ばかりである。まだしもふん縛れて警察へ突き出されないのが、仕合はせなくらゐである。此の場合、もしあの大川にまでも捨てられるやうな事があつたら、さうして其れでもまだ生きようとするなら、否でも應でも盜賊になるか乞食になるより外はなからう。……

根津の通りを田端の方へぼんやりと歩いて行く青野の頭にはこんな考へが際限もなく組んづ解れつした。彼は時々、はつと我に復つた如く立ち止まつて、初夏の往來を眺め廻した。きれいに晴れ渡つた朝の青空や、新綠の上野の森や、鮮かな日光を受けて目の醒めるやうに明るく照つて居る屋根や地面や、そんな景色が彼には特別に美しく見えた。かうして此處に彳んだまゝ、いつまでも此の景色に見入つて居られたら、どんなに幸福だか知れないとも思つた。ふと、五六年前彼がまだ今日のやうに落ちぶれない時分、フランスから歸朝する際に暫く足をとゞめて居た中央

印度のガンヂス河の流域の風光が、蜃氣樓の如く彼の眼の前に浮かんだ。ベナレスや、フホールや、アムリツアルの町々の、夢の都のやうな不思議な色彩、寶石の結晶したやうな殿堂や寺院の建築、其處に住んで居る市民や行者の、お伽噺の人間じみた奇妙な服裝――それ等の物が朧げになつた記憶の底から、嘗て目擊した實在の世界とも、彼自身の空想の產物とも分らない程自由に精細に、燦然と彼の瞳を射るのであつた。今もあの大陸のあの地方へ行けば、此の六月の青空の下に、あれ等の光景がまざまざと展開して居ると云ふ事實が、青野には何だか本當とは信ぜられなかつた。あの素晴らしい、まるで刺繡の繪のやうな國土へ足を踏み入れた時代の彼と、こんなにまでお羽打ち枯らして根津の通りを辿つて居る彼との間には、何處をどう搜しても全く何等の連絡もないのであつた。

彼は仰向きに首を反らせて、遠い故郷を慕ふやうな眼つきで、つくづくと空の色を視つめてから、またすたすたと歩き出した。大川の家へ行つて、牛肉か洋食か、何か知ら脂つこい、滋養分を含んで居さうな食物に有りつく積りで、わざと晝飯も喰はずに出て來たせゐか、いつの間にか非常な空腹を覺えて居た。大川に會つたら先づ第一に、「あゝ腹が減つた。牛肉を御馳走しないか。」と云ふやうな鹽梅式に洒々落々と切り出してやらう。すると大川が「よし」と云つて早速ロ

ースを一斤か、或ひは一斤半ぐらゐ註文する。水こんろの鐵鍋の上で、どろどろのセピア色に煮つまつた肉の塊を、煖かい飯と一緒に舌へ載せながら、はつはつと馬のやうな息を吹き吹き、口の中がくちやくちやになるほど嚙みしめたらどんなにうまいだらう。さうして、氣が重くなるほど胃袋へ一杯に物が詰まつて、下腹がむつくりとゴム鞠のやうに膨れて來たら、どんなに生きがひのある心地がするだらう。……さう想つて見るだけでも、青野の鼻先には、芳ばしい牛鍋の匂がぷーんと襲つて來るのであつた。彼は一層足を早めながら、動坂を右へ曲つて閑靜な郊外の町へ這入つた。

其の邊には、一體にかなめの生垣を繞らした、氣樂さうな、小綺麗な住宅が竝んで居た。茶の湯の宗匠でも住まひさうな、庵室めいた風雅な普請だの、市内の豪商の別邸でゝもありさうな、廣々とした庭を圍んだ、奥床しい板塀の構へなどが、ところ〴〵に入り交つて油のやうに光つて居る綠樹の新芽と其の鮮かさを爭ふやうに、新築の木の香を漂はせて居た。さう云ふ家々の一つ一つが孰れも牛鍋の匂と等しく、青野の慾望を刺戟せずには置かなかつた。自分も一度は、こんなのんびりした家の内に暮らして見たい。かう云ふ邸宅の主となつて、少しの屈托もない、餘裕のある生活を營んで見たい。此處に住んで居る紳士たちは、みんな今村の着て居たやうな夏外套

を持つて居るだらう。牛肉なんぞは厭になるほど喰ひ飽きて居るだらう。中には又、淑女畫報に出て來るやうな、花やかなハイカラな妻君を持つて居る奴も居るだらう。無論相當の資產があつて、身の周りの小遣ひにも月に百圓や二百圓は水のやうに流すのだらう。青野が此れから訪ねて行かうとする大川も、たしかに幸福な彼等の中の一人である。いや大川ばかりか、青野と同期に美術學校を卒業した同窓の中には、大川に劣らない境遇に出世したものが既に二三人は居るのである。青野にしたつて、順當に行きさへすれば、決してそれだけの地位を得られない筈はなかつた。卒業當時の評判から云へば、誰を措いても彼が眞先に立身しさうな形勢であつた。その形勢に狂ひを生じさせた罪は云ふまでもなく、青野自身にある。みんな自分の心がけが惡いのである。我ながら呆れ返るほど淺ましい、社會の公人として立つて行くべき資格のない、忌まはしい天性の背德病のお蔭である。

田端の山の上の、大川の邸の煉瓦塀が眼に這入ると、青野は急に恐ろしい所へ來たやうな氣がして、一歩々々に足が竦み動悸が昂まつた。いかに大川が自分に對して常に寛大で、親切であるとは云へ、自分は今、どの面下げて彼の門を叩くことが出來るだらう。それも單純な訪問だけならばまだしもであるが、例に依つて金の無心に行くのである。何の面目あつて、どんな顏つきを

して、それを云ひ出すことが出來るだらう。冗談らしく笑つて賴むのには、あんまり今迄に彼を欺し過ぎて居る。さうかと云つて泣いて拜むほどしらじらしい人間にもなり切れない。ゆうべの手紙で、ほゞ大川は承知して居るやうなものゝ、それでも機嫌よく貸してくれるやうな事は、默つて居ても先方から札の束を投げ出してくれるやうな事は、萬が一にもありさうではない。なんぼお人好しの、お坊つちやんの大川でも、きつと不愉快を隱し得ないで、一應は出し澁るやうな態度を示すだらう。その不愉快を突き破つて、無理にも金を借りて來るのは相手が大川であるだけに、餘計青野は心に濟まなかつた。今村の外套を盜むよりも、もつと罪の深い、殘酷な惡事であるとしか思はれなかつた。

「雄辯は銀、沈默は金と云ふ諺がある、それをもぢつて能才は銀、天才は金と云つたところで誰が異議を唱へるだらう。少くとも藝術家としての素質に於いて、君と僕とは金と銀との相違がある。銀があつて始めて金の貴さが分るやうに、僕には君のえらさがよく分つて居る。僕は飽く迄も君を尊敬する。……」

嘗て青野にかう云ふ手紙を寄せた大川は、未だに其の時の氣持ちを失はずに居るのである。青野の人格のゼロである事が立證せられた今日でも、依然として大川は彼の藝術的天分を畏敬して

居る。青野のえらさは自分でなければ分らないと云ふやうな、一種の誇さへも抱いて居る。去年の秋の展覽會に出品された青野の大作が、故意か偶然か、あらゆる藝術家や鑑賞家に依つて黙殺されてしまつた際にも、大川だけは「寧ろ嫉妬を感ずる」と云つたくらゐに、心の底から傾倒して、賞讃の言葉を惜しまなかつた。審査員を始めとして、凡ての先輩や友人が、彼の平素の背德を憎むの餘り、あれだけの作物に一言の批評も、一片の同情も與へてくれなかつた時に、かう云つてくれた虚心坦懐な大川の氣象が、青野には涙の出るほど有難かつた。暘まで腐つてしまつた自分の根性に比較して、大川の品性の純潔さが、それこそ「嫉妬を感ずる」くらゐに氣高く見えた。大川だけは自分を捨てないで居てくれる。自分もせめて此れからは、彼に捨てられるやうな不義理な眞似をしまいと、青野は固く胸に誓つた。にも拘らず、その後彼は大川に對してどれだけ義理を守つたらう、義理を守つたどころか、却つて相手の好意に附け込んで有りつたけの破廉恥な行爲を重ねたではないか。二三日で返すからと云つて、内地ではめつたに買ふことの出來ない中世紀の印度の宗教畫や、文藝復興期の名畫の複製を借りて來て、有耶無耶の間に五十圓で古本屋へ賣り拂つたり、それを大川に發見されて頭を掻いてゴマカシたり、さう云ふ惡事はあれから既に幾度となく繰り返して居る。もしも外套を盗んだゞけで、今村に擲られる理由がある

とすれば、彼は大川からいつ何時絶交狀を送られても、文句の云へないハメになつて居る。まして大川は、美術學校時代の彼の舊友のうちで、技倆から云つても、傾向から云つても、將來彼と角逐し競爭すべき唯一の對抗者であつて、彼の零落を心ひそかに祈つて居る隨一人であらねばならなかつた。青野と同じロマンティックの世界に憧れ、同じ境地に美の幻影を求めて居るらしい大川が、人一倍青野の天分を嫉視したり、その逆境に痛快を感じたりするのは、極めて自然な事であつた。彼に對して、表面は誰よりも親切を裝ひ、寛大に振る舞つて居る大川の胸中に、蔽ふべからざる嫉妬の情の燃え狂つて居ることは、他人は知らず、青野にはハッキリと看取することが出來た。大川が自分を過度に庇護してくれるのは、自分に對して溫情のある結果ではなく、その嫉妬を自ら欺かんが爲めであるとさへ、邪推し得る場合もあつた。我が儘な性質の一面に、恐ろしく神經過敏な道德を持つて居る彼は、なまじひに嫉妬に惱まされて居る爲めに、猶更相手の貧窮を救はずには居られなくなつて居るらしかつた。卑怯であるとは氣が付いて居ながら、青野は仕樣ことなしに其の弱點に斬り込んで、かけられるだけの迷惑をかけた。勿論大川を困らせるのが主眼ではなく、金を借りるのが目的ではあつたけれども、少くとも或る意味に於いて自分が强者となり得る相手を、そのパトロンに見出したことは、擦れつ枯らしの彼に取つて、全然愉快で